

都 市 の 概 念

—その総合的検討のために—

各論 4 (歴史学)

太 田 秀 通 編

東京都立大学
都市研究組織委員会

1974・3

目 次

序説	1
第1章 総論	3
1 ソヴィエト大百科辞典	3
2 マルクス	8
3 マンフォード	21
第2章 古典古代の都市論	27
{ 1 都市の概念	27
1 ホメロス	27
2 ヘシオドス	32
{ 2 都市論の諸論点	34
1 ヘロドトス	35
2 トッキュディデス	38
3 ルクレティウス	39
4 プルタルコス	40
第3章 古代都市論	43
1 クーン	43
2 ブルックハルト	44
3 ビュアリ	47
4 クーランジュ	50
5 リッヒテンベルク	55
6 ファウラー	56
7 ロストフツェフ	58
8 グロッツ	61

9	ウォールバンク	73
10	アウジェフ	77
11	ストルーヴェ	79
12	ウェブスター	83
13	フォーブズ	84
14	エーレンベルク	86
15	ニクソン	90
16	ハモンド	92
第4章	中世都市論	97
{ 1	都市概念論の意味——ハーゼ	97
{ 2	その諸論	105
1	マウラー	105
2	ペロウ	111
3	ゾーム	114
4	リーチェル	116
5	ヘーゲル	117
6	ビレンヌ	120
7	ブラーニッツ	121
8	エンネン	126
9	エーベル	129
10	シュタインバッハ	131
11	ビューヒャー	133
12	オットカール	136
13	ビグレフスカヤ	138
第5章	理想都市論	143
1	プラトン	143
2	アリストテレス	148
3	モア	152
4	カンパネッラ	154

序 説

都市とよばれる人間の定住様式は、人間の歴史の一定の発展段階で、すなわち生産力の一定の発展段階と、これに規定される社会的分業や社会階層の一定の分化を条件として形成された。それ故都市の形態・内容・構造・機能は、歴史的にさまざまであった。都市の実体に迫り、都市の本質を明らかにするには、生産力の発展と関連させ、都市を生み出しあるいは変化させた必然性を、社会構成や国家権力のあり方と関連させて、発展的に捉えなければならない。都市はいろいろな見地から、いろいろな方法で研究されてきたし、また今日もそうであるが、都市の総合的な研究の方法は、歴史的に制約された一定の社会構成の質の中において、都市はいかなる構造的位置にあり、その社会においていかなる機能をもっているか、という二つの視点、すなわち都市の構造と機能を社会構成の中に正しく位置づけるという視点から展開されなければならない。ということは、都市を現実の社会的諸関係から抽象して、孤立した現象として捉えずに、まわりの部族的結合や農村共同体や遊牧社会などとの相互関係において、またそれらの相互関係の中で都市が果たす経済的・文化的・政治的・軍事的・宗教的などの機能的特質において捉えることが、科学的に要請される、ということである。

都市を、社会構成の中における構造と機能の総合的研究によって、より深く捉え、その歴史的変質のプロセスを動態的に捉えるためには、都市自体の内部に入りこんで、その物理的形態、住民の階層構成、職業分化、公共施設、市民権、家族構成、都市的エートスといった細部にわたって分析を進めることが必要である。都市自体の分析においても方法的に重要な視点は、都市の構造と、都市を構成する諸要素の都市における機能および都市外にわたる機能とを明らかにするという視点であろう。

このような視点から都市の歴史を捉え、社会発展史の上に、あるいは人類文化発展史の上に、都市を正しく位置づけ、都市の発展を展望するためには、巨視的な社会発展の時代区分を採用して、古代都市・中世都市・近代都市という時代区分に基づく都市類型を立て、これらのカテゴリーの中で、地域の区別や形態・機能の区分などにより、より小さな類型に区分して観察することが必要であろう。

都市概念の研究が必要とされるのも、都市の歴史的発展を辿り、そのことによって都市の未来像を展望し、もって都市問題を総合的に検討するためであり、都市はいかなるものとして観察されてきたかを概観しておくのがわれわれの当面の課題である。この課題に答えるために、まず第1に、都市を総括的に扱ったものを見、次いで近代歴史学・社会科学の都市論の原形をなした古典古代の都市論の特徴を概括し、近代歴史学・社会科学がうちたてた都市論を、古代都市論・中世都市論の順序で見たい。近代都市論については、歴史学の分野では、まとまったものが乏しいので、法律や経済等の関連分野における諸論を参照されたい。最後に理想都市論をつけ加えた。

〔太田 秀通〕

第1章 総 論

1 ソヴィエト大百科辞典 — 第2版

本稿では、Die Stadt. Geschichte ihrer Entstehung und Entwicklung (Grosse Sowjet-Enzyklopadie — Reihe Geschichte und Philosophie 21), 1953 を使用し、ドイツ語から重訳した。

(1) 都市の発生

「都市とは一つの歴史的に発生した集落であり、まず原始社会から奴隷所有者制 (Sklavenhalterordnung) への移行の際に、しかも手工業と農業との分業ならびに階級と国家の発生の結果として生じてきたのである。若干の民族の場合、都市は封建制が発展するにつれて発生した。歴史がすすむにつれて、都市は徐々にその外観を社会経済的構成体にしたがって変えていったが、その社会経済的構成体のなかで都市は発達したのであった。『都市と農村の対立は、…部族制 (Stammwesen) から国家への、局地性から国民への移行とともに始まって、文明の全歴史を貫いている。』⁽¹⁾資本主義期には、都市と農村の対立は最高潮に達する。社会主義期においては、都市が村落の農業を集団化させ、そして都市と農村とのあいだの矛盾を止揚へと導く。」(Die Stadt 1953:4)

「ある領域における住民配置の条件と方法ならびに定住(都市、村落等)形態は、社会的生産様式によって規定される。定住地としての都市はすすんだ社会的分業の帰結として現われた。それも、農耕から手工業が分離し、規則的な商品交換が成立し、生産手段が私有され、さらに奴隷制が形成された時期に現

われたのである。この時代の都市の主要な特徴は常設市場である。市場は、手工業者にたいしては、彼の労働の産物を売る可能性を与え、都市には周辺農村との交換条件を確保する。原始社会から奴隷所有者制への移行に際しては、都市が発生するにつれて、社会的分業の成り行きとしての都市と農村との矛盾も浮きあがってくる。農村からの都市の孤立化は、歴史の進行にはなほだしい影響をおよぼした。カール・マルクスは、都市と農村とのあいだの敵対が赤い糸のように搾取者の社会の全史を貫いている、と指摘している。⁽²⁾

都市の形態と大きさならびに一地方領域内での都市の位置は、さまざまな社会経済的構成体——奴隷所有者社会、封建制、資本主義、社会主義——によって異なり、また生産力の発展段階および生産関係の性格によって条件づけられている。

5世紀には、ローマ帝国における奴隷所有者制は崩壊した。高度な文化的水準に達し、農村を支配していた都市は、奴隷労働にもとづく生産様式の解体とともに、大部分が没落した。たとえば、100万人以上にのぼっていたローマの人口は、4万にまで減ってしまった。10、11世紀以降、手工業と商業の発展につれて封建都市が発生し始め、14、15世紀には全盛をきわめた。封建制期の都市内部では、新しい資本主義的構成体の要素が生じ、それは急速な成長で抜きんでてくる。都市は、その外観や構造物のうちに資本主義のさまざまな発展段階を反映させている（16/17世紀からのマニュファクチュア期、18世紀末からの機械と大工業の時期、19世紀末から20世紀初めの資本主義の最高の段階としての帝国主義期）。

大社会主義十月革命は、社会主義下の都市をつくったということで、都市の発展に新しい画期をみちびいた。社会主義下の都市は、資本主義下の都市とは根本的に区別され、社会主義計画経済の非常な優越性を反映しており、そして著しく速いテンポで発展している。社会主義的都市の出現とともに、階級社会のもっとも重要な対立の一つ、つまり都市と農村とのあいだの対立を止揚する

ための前提条件が生みだされた。こうして経済と文化の発達における都市の指導的な役割が強められるのである。」

(2) ブルジョワ理論の批判

「ブルジョワ学者は、都市の発生および発展についてさまざまな理論をうちたてようと試みてきたが、皮相な、そしてその大部分がまったく形式的な説明の域を越えていない。それで襲撃にたいする防禦が要塞としての都市の発展の基礎をなすという見解が、奴隷所有者制期および中世の城砦都市の発生に関してもっとも普及した理論の一つ——『防禦理論』（ビュッヒャー、マウラー、ウェーバー）——の根拠になっている。実際、城壁と堡壘は、古代世界でもまた中世でも都市の絶対的なメルクマールではなかった。同様に、中世都市の発生に関するつぎのような理論も根拠がない。それは、都市を政治的・法的組織としてみるが、社会経済的カテゴリーとしては考察しないという理論である（ペロウ、ヘーゲル、ウィルデ、ギールケ等）。都市の発生と発展を地勢の状態や微細な起伏等の特殊性で説明しようとする、俗流地理学者の見解もまた誤りである。すべてこれらの理論は、都市の発生過程におけるもっとも重要なこと、つまり生産力の発展ということに留意していない。都市の発生および発展の歴史の研究は、ブルジョワ的学問では、さまざまな社会構成体にたいして普遍的にしてかつ不変な都市の『類型』が存在したとするような観念にもとづく、都市の機械的類型学にとって替わられてしまった。都市概念を規定する判断基準として、あるブルジョワ学者は人口を考え（ビュッヒャー）、他の者はそれを国家権力の対応行為のうちに見（ライト、レノワール）、またある者は人口密度を前提にしている（メリオ）。この形の上での特徴にもとづいた定義とは異なって、ロシアの学者M. M. コヴェレフスキーは、すべての時代についての都市の経済的な定義を与えようとした。そこでは彼は、都市を『業務——特に工業、商業、信用制度における業務が非常に分化している定住地』として性格づけた。けれども、この定義はただ資本主義下の都市にのみあてはまるのである。

ブルジョワ的学問は、定住形態が社会の生産力の性格と発展段階に左右されている、ということを理解することができない。したがってまた、都市の起源と発展の本質を認識し得ないでいる。資本主義が発展するとともに、未来社会で人類が居住するユートピア論が現われた。その創始者たち（モア、カンパネッラ、後期オーウェン、フーリエその他）は、発達しつつある資本主義の諸矛盾があるなかで都市と農村とのあいだの対立を取り除こうという素朴な試みを企てたのだった。19世紀末から20世紀初頭にかけて、イギリス人E・ハワードの著書『明日の田園都市』が、小ブルジョワ的な人々のあいだでおいに支持された。小ブルジョワ的な空想的社会改良論者であるハワードの見解は、『田園都市』が資本主義社会の枠内で資本主義下の都市のあらゆる社会的諸矛盾を平和的な方法で解消し、さらに資本主義では解決できない都市と農村との対立も除いてしまおうだろうというものであった。そうした『田園都市』を建設しようというハワードの試みは、しかしながらまったく成功しなかった。資本主義、とくに帝国主義時代の条件下では、こうしたことは無意味でしかも反動的なユートピア論であった。」

(3) マルクシズムにおける都市の理論

「マルクスとエンゲルスは、都市のもっとも重要な発展法則を初めて、しかも生産力の発展、増大する社会的分業そして変化する生産関係といったことの結果として明らかにしたのであった。マルクス・レーニン主義の歴史学は、都市をまず第一に社会の社会経済的構造によって制約された歴史的カテゴリーとして考察している。カール・マルクスは、あらゆる時代の都市にたいして単一な類型を定めることは不可能であると指摘した。これとともに、マルクスとエンゲルスは近代の商工業都市のことを考えた。資本主義期の都市のもとでは、工業の大量生産で利用される機械技術や資本の集中および農民層のプロレタリア化が原因となって、加工産業や商業の所在地に人間が不可避免的に集積するということを、彼らは理解したのであった。

マルクスとエンゲルスは、人間の定住に際しての新しい形態の問題と都市と農村とのあいだの対立を止揚するという問題とを、学問の根底に初めて設定した。すでに『共産党宣言』のなかで、農村にたいする都市の支配を除去することは資本主義社会を除去することによってのみ可能である、というテーゼが明確に定式化されている。資本主義を打倒した大社会主義十月革命は、一地方の人口を合理的に配置するという問題を解決し、さらに社会主義的な定住システムと、社会主義的生産関係の実体にふさわしい新しい都市類型とを創造することに初めて成功した。社会主義的定住は、資本主義的定住とは根本的に異なっている。それは、『農村のとりこされた状態、その外界からの隔離、…大都市への膨大な大衆の不自然な密集をも、ともになくす』⁽³⁾人類の新しい定住である。それは、社会主義生産様式、計画経済、生産力の平等な分配、土地の天然資源の最大限の利用、かつての後進地域すべての社会主義建設への包含、農業の再建、そして都市と農村とのあいだの対立の除去を基礎としている。社会主義下の都市は農村を先導し、農業の集団化を促進する。ソヴィエト連邦の都市、とりわけ首都モスクワは農村全体の共産主義的改造に際して大きな指導的かつ組織的な役割を演じており、そして社会経済的および文化的発展の中心となっている。社会主義の都市は、共産主義イデオロギーや進歩的な学問と文化のにな手であり、宣伝者でもある。」(ibid.:7-11)

(1) Marx Engels Werke, Bd. 3, 1958, S. 50. 邦訳, 花崎
卓平訳, 合同新書版, 1966, 107ページ

(2) vgl. MEW, Bd. 23, 1962, S. 373. 邦訳, 全集, 大
月書店版, 第23a巻, 1965, 462ページ参照

(3) Lenin, Polnoe Sobranie Sochinenii, Tom 21,
1961, str. 55. 邦訳, 全集, 大月書店版, 第21巻, 1957.
59ページ。

2 マルクス

Karl Marx (1818-1883)。ドイツの革命家、科学的社会主義の創始者。本稿使用書は、Marx Engels Werke, 1957-68 ; Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, 1953。なお引用箇所を示す際に、それぞれの論文の適当な邦訳の該当箇所も示した。以下の訳文は、筆者の手になるものか、訳書のもを一部改めたものである。

I 初期において

(1) 「草稿」より

まず、初期マルクスの思想の基本的骨格を示している『経済学・哲学草稿』から、みていくことにする。この『草稿』は、大部分が1844年に書かれている。

「資本と土地との、そして利得と地代との[・][・][・]区別、またこの両者と労賃、工業、農業それぞれとの、そしてさらに不動産と動産との[・][・][・]区別は、事物の本質のうちには基礎づけられていないなおまだ歴史的な区別であり、資本と労働との対立が歴史的に形成され発生していくうえで固定化された一つの契機である。不動産という性格をもつ土地所有に対立している工業等においては、ただ〔工業の〕発生様式と、工業が農業にたいしてそのなかで自己形成してきた対立だけが、表現されているにすぎない。この区別が、労働の特殊な種類として、また本質的にして重要な、生活を包含している区別として成りたつのは、ただ、工業（都市生活）が土地保有（貴族的な封建的生活）に[・][・][・]対立して生じ、それでもなお独占、ツンフト、ギルド、職能団体（Korporation）等のかたちをとって、その対立物の封建的性格をみずからが帯びている限りにおいてである。さらにそうした諸規定の内部では、労働は、いまだにみせかけの社会的意義と

現実的な共同体の意義をなおもち、依然として自己の内容にたいして無頓着になり、自己自身だけで完全な存在になるまで、すなわち、他のあらゆる存在から抽象された域にまで、したがってなお自由に放任された資本にまでは発展していないのである。」(Marx Engels Werke — 以下MEWと記す —, Ergänzungsband, Dietz Verl., 1968: 525-526。城塚・田中訳, 岩波文庫版, 1964: 111-112)

(2) 『ドイツ・イデオロギー』より

1845年から46年にかけて、マルクスとエンゲルスは共同著作『ドイツ・イデオロギー』を執筆し、史的唯物論の基本的諸命題を定式化させたのであった。ここに示されている交通(Verkehr)という概念は、のちに生産様式(Produktionsweise)という概念に発展していく。そこでつぎに『ドイツ・イデオロギー』のなかの表現をしらべていこう。

(i) 分業の意義

「さまざまな諸民族相互間の関係は、おのおのの民族がかねらの生産諸力、分業および内的交通をどの程度まで発展させているかにかかっている。この命題は一般に認められている。しかし、たんにある民族の他の民族にたいする関係だけでなく、その民族自体の内的編成全体もまた、その民族の生産と内的および対外的交通との発展段階にかかっている。ある民族の生産諸力がどの程度まで発展しているかは、分業の発展の度合によってもっとも明白に示される。どんな新しい生産力でも、それが従来既知の生産諸力のたんなる量的拡大(たとえば新たに地所を開墾すること)でないかぎり、結果として分業の新しい形成にいたる。

ある民族の内部での分業は、まず農耕労働からの工業および商業労働の分離、そしてそれとともに都市と農村との分離、および両者の利害の対立をもたらす。

.....

分業のさまざまな発展段階は、まさに所有のさまざまな形態にほかならない。

すなわち、分業のその都度の段階は、労働の材料、道具、生産物に関する諸個人相互の関係をも規定するのである。」

(ii) 所有の第一と第二の形態

「所有の最初の形態は、部族所有である。これは、人々が狩猟と漁業、牧畜あるいはせいぜい農耕で生活している生産の未発達な段階に対応している。……

第二形態は、古代の共同体所有および国家所有である。これは、とくに契約や征服によっていくつかの部族が一つの都市に統合されるところから生じ、そこでは奴隷制は依然として存続する。共同体所有とならんで、動産の私的所有が早くも発達し、のちには不動産の私的所有さえもが生ずるが、それは変則的な、共同体所有に従属的な形態として発達するのである。国家公民は、ただかれらが共同することによってのみかれらの労働奴隷にたいする支配力をもつのであり、すでにそのために共同体所有の形態に拘束されている。それは、能動的国家公民の共同の私的所有である。かれらは、奴隷に対抗しなければならないために、こうした自然成長的な連合様式にとどまらざるをえない。それゆえに、ここに基礎をおいている社会の全編成は、不動産の私的所有が発展するにつれて解体してゆく。そしてそれとともに、その民族の勢力も衰微してゆく。分業は、それまでに一層発展したものとなっている。われわれは、早くも都市と農村の対立に出会い、ひきつづいて都市の利害を代表する国家と農村の利害を代表する国家とのあいだの対立に出会う。そして、諸都市自体の内部では、工業と海上貿易との対立をみいだす。市民と奴隷とのあいだの階級関係は、完全に成りたっている。……」

(iii) 所有の第三の形態

「第三の形態は、封建的ないしは身分的所有である。古代が都市とその小領域から出発したとすれば、中世は農村から出発した。……」

崩れゆくローマ帝国の最後の数世紀と、蛮族による征服自体とが、大量の生

産力を破壊した。つまり、農耕は衰え、工業は販路を失って没落し、交易は麻痺するか暴力的に中断され、農村と都市の人口は減少した。こうした当時の諸関係およびそれによって規定された征服組織の方法は、ゲルマン的兵制の影響をうけながら、封建的所有を発展させた。部族所有ならびに共同体所有と同様に、封建的所有はあらたに一つの共同体制度（*Gemeinwesen*）にもとづくが、それに直接生産する階級として対立しているのは、古代の場合のように奴隷ではなく農奴的小農民である。封建制が完全に形成されると同時に、さらに諸都市にたいする対立が付加される。……

土地所有のこうした封建的編成にたいして、都市においては、職能団体による所有、すなわち手工業の封建的組織が対応する。所有は、ここでは主として個々人の労働に〔その本質が〕存していた。連合した強盗貴族に対抗する連合の必要性、産業家が同時に商人であった時代における共同の市場施設の必要、栄えている諸都市に流入する逃散農奴たちの競争の増大、全土の封建的編成などが職種別ギルド（*Zünfte*）を招来した。つまり、個々の手工業者のもとで次第に蓄えられた小資本と、人口が増加しているにもかかわらず固定した手工業者数とが、職人および徒弟の関係を発展させ、その関係こそが、農村におけるヒエラルキーと類似のヒエラルキーを都市においても成立させたのであった。……いかなる国においても都市と農村との対立はあった。身分編成はもちろん非常にきびしくうちだされてはいたが、農村での君侯、貴族、僧侶および農民の別、都市での親方、職人、徒弟、そしてやがては日雇い下層民もくわえる身分の別その他には、なんら重要な分業は生じなかった。」（MEW, Bd. 3, 1958: 21-25。花崎卓平訳、合同新書版、1966: 32-38。なお『ドイツ・イデオロギー』の邦訳は数種類あるが、1965年にソ連のG. A. バガトゥーリヤによって発表された新編集にもとづく花崎訳を、ぜひ参照されたい。以下に訳出した文章の順序もバガトゥーリヤ版にしたがっている。）

(iv) 都市の意義

「物質的労働と精神的労働との最大の分業は、都市と農村との分離である。都市と農村とのあいだの対立は、未開から文明への、部族制から国家への、局地性から国民への移行とともに始まって、文明の全歴史を今日（反穀物法同盟）にいたるまで貫いている。

都市の成立と同時に、行政、警察、租税などの、つまり自治体制度の必然性が、したがってまた政治一般の必然性が与えられる。ここにはじめて、直接に分業と生産用具とにもとづく人口の二大階級への分化が明らかになった。そもそも都市が、すでに人口、生産用具、資本、享樂、欲求の集中という事実であるのにたいして、農村では、まさにその反対の事実、すなわち孤立と分散がながめられる。都市と農村とのあいだの対立は、私的所有の内部でのみ存在しうる。……都市と農村の対立の止揚は、共同社会の第一条件のうちの一つである。そして、だれが見てもすぐわかるように、その条件そのものは一群の物質的前提条件に依存しており、たんなる意志だけでは満たされることはない。（これら諸条件はもっと解明されなければならない。）都市と農村との分離はまた、資本と土地所有との分離として把握されうる。すなわち、土地所有から独立した一つの存在の端緒であり、たんに労働と交換とだけを土台とする所有、つまり資本の発展の端緒として把握されうるのである。」（*ibid.*：50。同上：107-108）

「特殊な階級のうちに確立された交通とともに、そして商業が商人によって都市の近傍以上に拡大されるとともに、すぐさま生産と交通との相互作用があらわれてくる。諸都市は相互に結びつくようになり、新しい道具がこの都市からあの都市へともたらされ、生産と交通との分業はまもなく個々の都市間における生産の新しい分業をよびおこし、それぞれの都市はやがてなんらかの有力な産業部門を開拓していった。局地性という当初の制約は次第に解消されはじめる。……

さまざまな都市間の分業が直接にもたらした結果は、職種別ギルド制度から

分岐成長してきた生産部門であるマニファクチュアの発生であった。……

マニファクチュアの出現と同時に、雇い主にたいする労働者の関係に変化が生じた。職種別ギルド内では、職人と親方とのあいだの家父長的關係が存続していたのにたいして、マニファクチュアにおいてそれにとってかわるものとなったのは、労働者と資本家とのあいだの金銭關係であった。この關係は、農村や小都市では家父長的な色調を帯びていたが、比較的大きな、もともとのマニファクチュア都市では、すでに早くからほとんどまったく家父長制の色彩を失っていた。」(ibid.:53-56。同上:113-119)

「……大工業は、あらゆる文明国とそのなかのあらゆる個人が、自らの欲求を満たすためには全世界に依存せざるをえないようにさせて、個々の国々の従来の自然成長的な排他性を壊滅させた。その限りにおいて、はじめて世界史を生み出したのである。……大工業は、自然成長的な都市にかえて、一夜のうちに姿をあらわす近代的な大工業都市をつくりあげた。それは、侵入した場所で手工業を、またおよそ過去の水準にとどまる限りのすべての工業を破壊した。それは、農村にたいする商業都市の勝利を完成した。」(ibid.:60。同上:126-127)

「住居の建設。未開人の場合、各家族が自分たちの洞穴や小屋をもつのは当然である。これは、遊牧民が各家族ごとに切り離されたテントをもつものと同じことである。こうした家計の分離は、私的所有が発展すればするほど、ますます必要とされるようになる。農業民族の場合、家計の共同は、土地耕作の共同と同じく不可能である。都市の建設は一大進歩であった。それでも、私的所有の廃止と不可分の各個に分離した経営の廃止は、そのための物質的諸条件がなかったために、従来のいかなる時期にも不可能であった。共同家計の制度は、機械装置の発展、自然力やその他多くの生産力たとえば水道、ガス照明、スチーム暖房等の利用、都市と農村の〔対立〕の止揚を前提としている。」(ibid.:29。同上:132-133)

「中世では、どの都市の市民たちも、自らの身を守る必要上、土地貴族に對抗して団結せざるをえなかった。商業の拡大、通信連絡網の確立によって、個々の諸都市は、同じ相手との闘争のなかで同じ利害を貫きとおした他の都市を知るようになった。個々の都市の多数の局地的な市民集団から、ただきわめて徐々に市民階級が成立してきた。」(ibid. : 53. 同上 : 134)

(3) その他より

1846年の暮に、マルクスは『アンネンコフへの手紙』を書いたが、この『手紙』は彼の『哲学の貧困』のいわば基礎をなすものであった。この『手紙』のなかから、われわれはつぎのような文句をみつけだすことができる。

「ブルードン氏には分業の問題がすこしもわかっていないので、たとえばドイツでは9世紀から12世紀にかけて現われたような都市と農村との分離についてさえ、彼は何も述べていないのです。だから、ブルードン氏にとっては、この分離は永遠の法則となるよりほかはない、というのは、彼はその起源もその発展も知らないからです。彼の著書の全体をつうじて、彼は、あたかも一定の生産様式のこの所産が最後の日までも存続するかのように語るでしょう。」(MEW, Bd. 4, 1959 : 550. 邦訳全集, 大月書店版, 第4巻, 1960 : 565-566)

1848年2月、マルクスとエンゲルスが発した『共産党宣言』は、ロンドンで刊行された。そのなかの一節。

「ブルジョワジーは、農村を都市の支配に従わせた。彼らは巨大な都市をつくりだし、都市人口を農村人口にくらべておおいに増大させ、このようにして人口のかかなりの部分を農村生活の愚昧(*Idiotismus*)から救いだした。ブルジョワジーは、農村を都市に依存させたように、また未開国や半未開国を文明国に、農耕諸民族をブルジョワ諸民族に、東洋を西洋に、依存させた。」(ibid. : 466. 同上 : 480)

II 「諸形態」より

マルクスの経済学研究の成果は、『哲学の貧困』に一つの結実をみることが出来る。そして1848年ごろには、彼の経済学説の根幹をなす剰余価値論が、基本構想として確立されていた。しかし、1848年から49年の「三月革命」への積極的な参加によって、研究の続行は一時中断されざるをえなかった。

1850年代になると、マルクスはふたたび経済学の研究に、そしてさらに関連諸科学の研究にとりかかっていった。その結果、1857年秋から58年の春にかけて、マルクスは草案(Rohentwurf)とはいうものの壮大な学問的構築物『経済学批判要綱』を執筆する。この『要綱』の「資本に関する章」の〔第二編——資本の流過程〕のなかに、一般には『資本主義的生産に先行する諸形態』というタイトルで知られる、あの難解ではあるが著名な分析が収められている。『諸形態』は、諸生産様式の内的連関とその発展の必然性を検討した論考であり、基本的経済諸法則に関するスケッチである。そこで『諸形態』のなかから、都市に関する興味深い部分をひろってみよう。

(1) 共同体の諸形態と都市

「……〔所有の第一の形態における本源的共同社会においては、〕労働により現実に保有することの共同体の諸条件、すなわちアジアの諸民族の場合にきわめて重要であった用水路、交通手段等は、この場合には上位の統一体、すなわち小さな諸共同体の上にうかぶ専制政府の事業として現われる。この場合本来の都市は、……対外貿易に特別有利な地点や、または国家の首長とその大守たち(Satrapen)が彼らの所得(剰余生産物)を労働と交換し、この所得を労働元本(labour-funds)として支出しているところにだけ形成される。

……〔所有の〕第二の形態は、土地をその基礎とするのではなくて、農耕者(土地所有者)の既成の定住地(中心地)としての都市を想定している。農耕地は、都市の領域として現われるのであって、村落がたんなる土地の付属物と

して現われるのではない。…共同団体が会合する困難は、他の共同団体によってのみひきおこされる。すなわち、他の共同団体が土地をすでに占拠しているか、さもなくば占拠している共同体をおびやかしたりするのである。だから戦争は、それが生存の客観的条件を占取するためであろうと、その占取を維持し、永久化するためであろうと、必要にしてかつ重大な任務であり、重大な共同作業である。だから家族からなる共同体は、さしあたって軍事的に編成されている——軍制および兵制として。そしてこのことが、共同体が所有者として生存する条件の一つなのである。住所が都市に集合するのが、この軍事組織の基礎である。」
(Marx, „Grundrisse“, Dietz Verl., 1953:377-378。
手島正毅訳, 国民文庫版, 1963:12-13)

「古典古代の歴史は都市の歴史であり、しかも土地所有と農業との上にうちたてられた都市の歴史である。アジアの歴史は、都市と農村との一種の差別なき一体制〔の歴史〕である。(ここでは、本来の大都市は、たんに王侯の宿营地として、また本来の経済機構の上にある複受胎(Superfötation)としてのみ考察さるべきである。)中世(ゲルマン時代)は、歴史の場面としての農村から出発し、この歴史のその後の発展は、やがて都市と農村との対立というかたちで進行する。近代の〔歴史〕は、古代人の場合にみられるような都市の農村化ではなく、農村の都市化である。

都市における連合に際しては、そのものとしての共同体は一つの経済的存在をもっている。都市自体の定在(Dasein)とは、独立家屋が多数存在することだけではない。ここでは、全体がその部分から成りたっているのではない。それは、一種の自立した有機体である。……古代の世界にあっては、農村共有地(Land mark)をもつ都市が経済整体(das ökonomische Ganze)となっているが、ゲルマン的世界にあっては、個々の住居こそが、この経済整体である。この住居自体は、付属する土地のなかの点として現われるにすぎないが、多数の所有者の集合体ではなくて、自立的単位としての家族

である。アジア的な（少なくともそれが支配的な）形態にあっては、個々人の所有ではなく、ただ保有だけがある。共同体が本来の現実的所有者で、——したがって所有は土地の共同所有としてのみ〔生じる〕。古代人（事態がもっとも純粹で、もっとも明瞭な形態にある、もっとも古典的な実例としてのローマ人）にあっては、国家的土地所有と私的土地所有との対立的形態〔があり〕、その結果、後者が前者によって媒介されたり、前者そのものがこの二重の形態で存在したりする。それゆえ、私的土地所有者が同時に都市の市民〔でもある〕。経済的にみれば、国家公民という存在（Staatsbürgertum）は、農民が一都市の住民であるという単純な形態に集約される。ゲルマンの形態にあっては、農民は国家公民、つまり都市の住民ではない。むしろその基礎は、孤立した、自立的な家族の住居であり、それは同じ部族の類似した家族の住居との同盟と、このような相互保証のためにときおり開かれる、戦争、宗教および法律的調停等に関する集会とによって保証されている。」（ibid.：382—384。同上：21—24）

（2）都市の成員と産業

「私的所有者としての共同体成員が、都市共同体〔成員〕と都市領地所有者としての自分自身からすでに分離しているところでは、また個々人が自分の所有を喪失するかもしれないような諸条件、すなわち彼を同格の市民、共同体の成員にするとともに、彼を所有者にもするという二重の関係もすでに生じている。」（ibid.：394。同上：42）

「……交換価値の発展——商人身分の形態で存在する貨幣によって助成された——は、直接的な使用価値をより多くめざした生産と、それに照応する所有形態——客観的諸条件にたいする労働の関係——とを解体し、こうしてまた労働市場（奴隷市場とは明確に区別されるべき）の形成をおしすすめる。しかしながら、貨幣のこの作用もまた、資本と賃労働に立脚するのではなくて、ツングフト等の労働組織に立脚する都市の産業（Gewerbefleisz）という前

提条件のもとでだけ可能であったにすぎない。都市の労働自体が生産手段をつくりだしたが、その生産手段にとってツンフトが窮屈（*gênant*）なものとなったことは、改良された農業にとって古い土地所有諸関係が窮屈なものとなったのと同様であった。そして、この改良された農業自身はまた、ある程度は都市への農産物の販売が増大した結果でもあった。……ところで、資本への転化以前の貨幣財産自体の形成に関していえば、それはブルジョワ経済の前史に属することである。その場合、高利貸、商業、都市制度、そしてそれらとともに登場する国庫が、主要な役割を演ずる。借地農、農民などの退蔵（*Hoarden*）もまた、より少ない程度ではあるが〔一役買っている〕。」（*ibid.*：407-408。同上：65-66）

Ⅲ 『資本論』以後

(1) 『資本論』より

つぎに『資本論』のなかからみていくことにする。周知のように『資本論』の第1巻は、1867年に初版が出版された。しかし第2巻および第3巻は、マルクスの死後、彼の僚友エンゲルスの編集によって、それぞれ初版が1885年と94年に刊行された。

「すでに発展したすべての、そして商品交換によって媒介された分業の基礎は、都市と農村との分離（*Scheidung*）である。社会の全経済史は、この対立の運動に要約されるということができるのであるが、しかしここではこれ以上この対立には立ち入らないことにする。」（*MEW*, Bd. 23, 1962：373。邦訳全集，第23a巻，1965：462）

「農業の部面では、大工業は、古い社会の要塞（*Bollwerk*）である『農民』を滅ぼして、賃金労働者をそれに替える限りで、もっとも革命的に作用する。こうして、農村の社会変革的要求と社会的諸対立は、都市のそれと同等にされる。旧習によどみきった不合理きわまる経営に代わって、科学の意識

的かつ技術的な適用が現われる。農業やマニファクチュアの幼稚で未発達な姿にからみついて、それらを結合していた原始的な家族の紐帯を引き裂くことは、資本主義的生産様式によって完成される。しかし同時にまた、この生産様式は、一つの新しい、より高次の統合のための、すなわち農業と工業との対立的につくりあげられた姿を基礎に両者を結合するための、物質的諸前提条件をもつくりだす。資本主義的生産は、それによって大中心地に集積される都市人口がますます優勢になるにつれて、一方では社会の歴史的な原動力を集積するが、他方では人間と土地とのあいだの物質代謝を妨げる。すなわち、人間が食料や衣料のかたちで消費する土壌成分が土地に帰ることを、したがって土地の肥沃さが持続する永遠の自然条件を、妨げるのである。それと同時に、資本主義的生産は都市労働者の肉体的健康をも農村労働者の精神生活をも破壊する。……農村労働者が比較的広い土地の上に分散しているということは、同時に彼らの抵抗力を摘みとるが、他方集中は都市労働者の抵抗力を強化する。都市工業の場合と同様に、現代の農業では労働の生産力の上昇と流動化の増進とは、労働力そのものの荒廃と病弱化とによってあがなわれる。」(ibid.: 528-529。同上: 656-657)

「中世には、イタリアでのように、都市の例外的な発展によって封建制度が破られていたのではないところでは、どこでも農村は都市を政治的に搾取しているのであるが、他方都市では、どこでも例外なく、その独占価格や、その租税制度や、そのツンプト制度や、その直接的な商人的詐欺そしてその高利によって、農村を経済的に搾取しているのである。」(MEW, Bd. 25, 1964: 809。邦訳全集, 第25b巻, 1967年: 1026)

(2) 『剰余価値学説史』より

『資本論』の第4巻として構想されていたものに、『剰余価値に関する諸学説』がある。これは、従来わが国では『剰余価値学説史』と呼ばれてきたものである。マルクスがこれを執筆したのは1862年から63年にかけてである

が、これは『要綱』と同様に草案であり、完全に仕上げられたものではなかった。最初の刊行は、20世紀にはいつからカウツキーによってなされた。

『学説史』からの抜粋を以下にかかげる。

「もし都市の労働者のほうが農村の労働者よりも発達しているとすれば、それはただ、農村の労働者の労働様式が彼らをして直接に自然とともに生活させるのにたいし、都市の労働者の労働様式は彼らをして社会のなかで生活させるという事情によるものにすぎない。」(MEW, Bd. 26, Zweiter Teil, 1967: 232. 邦訳全集26Ⅱ巻, 1970: 307)

「農村でのアジア的形態および西洋的形態(往時のそれであるが、部分的には今でもなおみられる)に対立して、中世の都市労働はすでに資本主義的生産様式への、労働の連続性と安定性(steadiness)とへの、おおきな進歩であり、予備段階となっている。」(MEW, Bd. 26, Dritter Teil, 1968: 426-427. 邦訳全集, 第26Ⅲ巻, 1970: 563)

(3) エンゲルス『反デューリング論』より

最後に補足として、1876年から78年にかけてエンゲルスが執筆した『反デューリング論』からの抜粋を示しておく。

「大工業は、……工業生産を場所的な制限からおおきく解放した。水力は局部的であったが、蒸気力は自由である。…蒸気力を主として都市に集中し、また工場村を工場都市につくりかえるものは、蒸気力の資本主義的な利用である。だが、それは、そうすることで、同時にそれ自身の経営の諸条件を掘りくずす。蒸気機関にとって第一の要件であり、また大工業のほとんどすべての事業部門にとって主要な要件であるものは、比較的きれいな水である。ところが、工場都市は、水という水を悪臭をはなつ汚水に変えてしまう。だから、都市への集中が資本主義的生産の根本条件であればあるほど、産業資本家はみな、資本主義的生産によって必然的につくりだされた大都市を去って、農村での経営に移ることにたえず努めるのである。……資本主義的大工業は、たえず都市から

農村へ逃れることによって、たえず新しい大都市を生みだしている。……

この新しい悪循環、このたえず新しく生みだされる近代工業の矛盾を廃止することは、これまた近代工業の資本主義的性格を廃止することによってのみ可能である。自己の生産力を単一の大規模な計画にしたがって、調和ある仕方では組み合わせる社会においてはじめて、工業それ自体を発展させるとともに、その他の生産要素をも維持ないし発展させるのにもっとも適した仕方では、工業を全国に分散させて配置することができる。

こういうわけで、都市と農村との対立を廃止することは、たんに可能なだけではない。それは、工業生産そのものの直接の必要となっており、同様にまた、農業生産の面からみても、さらに公共衛生の面からみても、必要なことになっている。……

都市と農村との分離を廃止するということは、大工業を全国にわたってできるだけ均等に分布させることがそのための条件となるという面からみてさえ、空想ではないのである。なるほど文明は、われわれに大都市という遺産を残したし、これを取り除くためには多くの時間と労苦を要するであろう。だが、それがどんなに長大な過程であるにせよ、大都市は取り除かれなければならないし、また取り除かれるであろう。」(MEW, Bd. 20, 1962: 275-277。邦訳全集, 第20巻, 1968: 304-305)

〔長沼 宗昭〕

3 マンフオード

Lewis Mumford (1895-), *The City in History: Its Origins, its Transformations, and its Prospects*, 1966 による。

アメリカの都市学者である著者は都市文化の専門家であるが、この書物の中では、都市の発生から種々の形態変化を経て今日の都市に至るまでの都市史を概観し、その将来への見通しを述べている。欧米都市を中心とする点に一定の限界があるが、一定の視角からこれを捉えたことの中に特徴が見られる。著者は本書全体の目的を次のように述べている。

(1) 都市の歴史的問題性

「都市とは何であるか。都市はどのようにして出現したのか。都市はどんな変化の過程にあるのか、それはどんな機能を行なっているのか、それはどんな目的を果たしているのか。単一の定義で都市のすべての現象を説明できるようなものはないであろうし、単一の叙述で都市のすべての形態変化を、すなわち社会的細胞核の胎児からその成熟期の複雑な形態およびその老年期の具体的崩壊に至るまでの形態変化をカバーできるようなものはないであろう。都市の起源はおぼろげで、その過去の大部分は復元のしようもないほどに埋もれ消し去られており、その将来の見通しを考察することは困難である。

都市は消滅するであろうか。あるいはこの遊星全体が巨大な都市の蜂の巣となるであろうか（これは消滅のもう一つの仕方であろうが）。人々を都市に住ませる必要と欲望とは、かつてエルサレムやアテネやフィレンツェが約束するようにみえたすべてのものを、より高い水準で回復することができるであろうか。墓場とユートピアのあいだに生きた選択がまだ存在するであろうか。すなわち内部矛盾から解放されて人間的発展を積極的に豊かにし促進するであろうような新しい種類の都市を建設する可能性はあるであろうか。

もしわれわれが都市生活に新しい基盤を据えようとするなら、われわれは都市の歴史的な性格を理解しなければならず、都市の本来の機能と、それから生まれ出た機能と、今日でも依然として要求される機能とを区別しなければならない。われわれは、長いこと走らねばならぬ歴史へと出発することなしには、われわれ自身の意識の中で未来に向けて十分に大胆に跳躍をするに必要な動力を

もてないであろう。……歴史のあけぼの時代に都市はすでに成熟した形態をとっている。われわれは、都市の現状に対してよりよい洞察をものにしようとしている中で、より古い構造の痕跡やより原始的な機能のぼんやりした痕跡を発見するために、歴史の地平線の尖端をのぞきこまなければならない。それがわれわれの最初の仕事である。しかしわれわれは、この研究を書かれた歴史の5000年を通じてその曲折や後もどりとともにやりとげて、出現しつつある未来にまで至るまでは、この這い廻りをやめないであろう。」(Mumford 1966:11-12)

(2) 都市の形成

こうして著者は原始社会における居住形式から都市が発生してくることを述べ、古代オリエントにおける都市形成の意味を考察して「職業的カーストの社会階層は古代都市の内部に一種の都市型ピラミッドをつくりだした。それは絶対的支配者たる王に頂点に達し、神官、戦士、書記がこのピラミッドの頂上部分を構成したが、最高位にある王だけが太陽の光線を隈なく浴びた。彼の下には、商人・職人・農民・船乗り・召使い・被解放者・奴隷(永久の影の中に沈んだ最下層)へと層が広がっていた。こうした区別は、いろいろな程度の財産の所有または欠除によって著しくされ鋭くされていた。さらにこうした区別は衣裳にも、生活慣習にも、食物にも、居住地にも表現されていた。」(ibid.:126)とし、さらに所有の問題にふれて「都市の数の増大と都市における富の増加に伴って、もう一つの区別が現われた。すなわち貧富の差である。そしてそれは都市生活における次の大改良すなわち所有制度とともにやってきたのである。財産は、この語の文明化した意味においては、原始共同体には存在しなかった。どちらかといえば、土地が彼らに属していたというよりも、人民が彼らの土地に属していたのである。そして彼らは、御馳走にせよ飢饉にせよ、その土地の産物を分有した。剰余生産物が富者の御馳走を保証するように労働者をその仕事にしばりつけておくために人為的飢饉をつくり出すことは、文明

に残された仕事であった。村落から都市への転化には、この共有方式の解釈の
一歩進んだ確認がある。すなわち、土地とそれが生み出す一切は神殿と神の財
産となり、それを耕す農民さえ神殿に属し、共同体の他のすべての成員も土地
に属し、彼らの労働の一部を運河掘りや堤防造りや建造物造営などの共通の仕
事に供することを義務づけられた。これらの財産は、王の俗権の拡大とともに、
王領となり、共有地と主権の同一視は深くしみ通ったので、私有財産権は最も
鋭く意識している近代国家においてさえ、国家自体が終局的な所有者であり残
額財遺贈者であって、結局は所有したり破壊したりする権力であるところの徴
発権と課税権とをもっているほどである。私有財産は、ブルードンのいうよう
に掠奪によって発生したのではなく、一切の共有財産を王——その生命と幸福
は共同体のそれと同一視された——の私有財産と見なすことによって発生した
のである。財産は、集団的全体の特種な代表者としての王自身の人格の拡大・拡
張であった。しかしひとたびこの主張が受け入れられるや、財産ははじめて譲
渡可能となり、王の個人的な贈与によって共同体から移動することが可能となっ
た。」(ibid. : 129) といっている。

エーゲ海周辺におけるポリスの成立の原因については、著者は風土的条件の
ちがいを最も重要視している(ibid. : 142-3)。またギリシア都市
の形態の特徴をアクロポリスとアゴラと劇場の存在に見出している(ibid.
: 188-9)。

ローマ帝国の都市建設と古代都市の衰退について、バルバロイの侵入の役割
を大きく見ており、新しい中世都市の成立にはたした修道院の役割を強調して
「修道院は実際に新しい種類のポリスであった。それは志を同じくする人々の
連合というよりもむしろ緊密な兄弟団であり、しかも時々の儀式のために集合
する集団ではなく、この地上にひたすら神への奉仕に捧げるキリスト者の生活
を実現しようとして永久に共住するための集団であった。」(ibid. : 285)
といっている。そして中世都市の形成力として、修道院・ギルド・教会をあげ

ている。

(3) 都市の存在理由

以下資本主義の成立、産業革命の進行による都市の変貌を跡づけつつ、著者は近代都市への人口集中などの都市発達に伴って生じる影の部分の問題の由来を説き、最後に歴史の中の都市を広大な展望の中に位置づけている。そして都市のあり方について次のように提言している。

「われわれが見てきたように、都市はこの5000年のあいだに多くの変化を経てきた。そしてさらに変化が用意されていることも明らかである。しかし緊急に必要としている革新は、物理的装備の拡大や完成にあるのではない、ましてや文化の残りの機関を定形なき郊外の埃の中に散乱させるために自動的な電子考案を増やすことにあるのでもない。まさに正反対である。有意義な改善は、芸術と思想を都市の中心的な人間的関心事にすることによってのみ、一切の存在を包みこんでいる宇宙的生態学的プロセスに新鮮な貢献をすることとともに、行なわれるであろう。われわれは、母のように生命を育てる機能と、自主的な活動と、長いあいだ無視されたり抑えられたりしてきた共生的結合とを、都市に復活しなければならない。なぜなら都市は愛の機関でなければならない、また都市の最良の経済は人間への配慮と文化であるから。……都市の最終的な使命は、宇宙的歴史のプロセスへの人間の自覚的な参加を促進することにある。都市は、それ自身の複雑で持続的な構造を通じて、これらのプロセスを解釈する人間の能力、およびそれらのプロセスに積極的で形成的な役割をはたす能力を、大きく増大させている。それ故に、都市が上演するドラマのすべての場面は、最高度に、意識の照明であり、目的の刻印であり、愛情の色彩である。感情的交際や合理的交流や技術的熟練、とりわけ劇的な再現によって、生のあらゆる局面を拡大することが、歴史における都市の最高の職能であった。そしてこのことは、今でも、都市存続の主な理由である。」(ibid.:655-6)

〔太田 秀通〕

第2章 古典古代の都市論

§1 都市の概念

metropolis, megalopolis, cosmopolitan, politics などの中核をなすのはギリシア語の polis であるが、この語は大別して三つの意味をもち、(1)城砦のあるアクロポリス、(2)都市とその領域を含む都市国家の中心市、(3)都市国家の市民団あるいは市民共同体、を意味する。(1)はポリスの成立を示唆し、(2)、(3)はポリスの構造と機能の相関関係を示唆する。urban, urbanization, suburb などの中核をなすのはラテン語の urbs で、これは城砦都市の物理的側面を意味し、city, cité などのもとの語 civitas は市民共同体または市民権を指し、civis は個々の市民を指す。古典古代の歴史は、このような語群に示唆される市民共同体としての都市国家の歴史であるといってさしつかえない。この市民共同体の中核的部分が自由な中小農民であった点に、古典古代の都市国家の特質がある。ローマの都市論・国家論の原理はすでにギリシアにおいて確立されていたと見られるので、古典古代の都市概念・都市論を検討するための材料として、さしあたりギリシアの古典に眼を向けてみよう。

1 ホメロス

Homerus (800 B.C. 以前)

ホメロスの二大叙事詩は、紀元前1200年ごろのミケーネ時代の末期のテ

ーマをもとにし、吟遊詩人の語りつきによって、ギリシアに都市国家が成立する紀元前8世紀ごろまでの間に成立したものと考えられており、ポリス成立前夜の社会状態が反映しているので、まずこの詩の中に、都市概念のあり方を求めなければならない。

(1) ポリスの意味

polisの語はここでもいろいろに使われているが、城砦の意味に使われることが最も多く、例えばトロイの王妃ヘカベーがその子ヘクトールに向かって呼びかけている次の言葉の中にそれが見出され、しかもそこでは城砦と住民の住居とが別の言葉で表現されている。

「子よ、おん身は何故きびしい戦さを棄ててここに入ってきたのか。きっとその名も呪わしいアカイア人の子らが町(asty)を攻め悩ませているからであろう。そこで、ここに着いたら高い城砦(akrē polis)から両手をゼウスにさしのべて祈ろうという考えが、おん身をここによこしたのであろう。」(Ilias: 6. 254-257)

町がまわりの平原と公道をもって結びつき、平原から馬を駆って入ることもできたことは、トロイ軍に攻められたギリシア軍中で、剛勇のアイアースが船の甲板から甲板へと飛び移りながら防戦する有様を、馬を駆って町に入る男のようだとたとえている次の比喩の中に描写されている。

「よく馬の御法を心得た男が、沢山の馬の中から4頭の馬を選び出していっしょに並べ、それを御して、平原から大きな町(mega asty)へと、衆人の通る公道(laophoros hodos)を駆ってくると、多くの人々が男も女もこれを感じ嘆いて眺める。御者は絶えずしっかりと落ちる気配もなく、馬から馬へと跳び移る、そして馬どもはその間も疾走していく。ちょうどそのようにアイアースは……」(Ilias: 15. 679-685)

(2) 都市住民の生活

ホメロスの詩の中で、都市の住民の生活が典型的に描かれているのは、いわ

ゆるアキレウスの楯の表面に彫り出された光景の一つで、鍛冶の神ヘーファイストスがアキレウスのために作ってやった楯の描写の中に出てくる二つのポリス、すなわち平和時のポリスと戦時のポリスである。婚礼と裁判をもって平和を表現し攻城戦をもって戦時のポリスを表現しているのは興味深い。ホメロスは次のように歌っている。

「次に彼〔ヘーファイストス〕は物思ひ人間どもの二つの立派な都市（polis）を制作した。一つの中では今しも婚礼と宴会がおこなわれており、花嫁たちを奥の女部屋から光り輝く松明の光に照らして町（asty）へと連れ出して行くと、おびたしい祝いの歌が湧きおこっている。若ものたちが踊り手となって輪舞すると、その真中では豎笛や豎琴が響きをあげる。それを女たちが各自の戸口に立って感心して見ている。一方民衆は広場（agorē）にぎしりと集っていて、そこではもめごとがもちあがっていた。2人の男が殺された男の賠償をめぐる口論しているところであった。一方の男はすべて支払ってしまったと市民に向って言明するが、他方の男は何ひとつ受け取ってはいないと否定している。双方が決着をつけようと裁き人のそばでいきり立っている。民衆は二つに分かれてそれぞれの側を助けて声援している。それを今触れ役たちが制止しようとしている。長老たちは神聖な円形の中で磨いた石の座に坐り、声張りあげる触れ役たちの笏杖を手に持ち、それを受けとっては、かわるがわる判決を下していた。まん中には黄金の錘が二つ置いてあり、彼らの中で一番すじの通った裁きを述べた人にそれを与えることになっていた。」（Ilias : 18.490-508）

「もう一つの都市（polis）の方では、これをはさんで物の具をつけてきらきら光るつわものどもの二つの軍隊が対峙しているところであった。寄せ手のあいだでは意見が二つに分かれ、一方は却掠してしまえと主張し、他方はこの美しい城砦（ptoliethron）が貯えているすべての財宝を二分させよと主張している。これに対して守り手は承知せず、伏兵を送り出そうと秘かに武装を整えるところであった。城壁の上には愛しい妻たちや頭はない幼児たち

が登って防衛に当たり、中には老齢の男たちもいた。こうして彼らは出かけたが、先頭に立つのは、ともに黄金でつくられたアレースとパラス・アテーナーとである。二柱の神が黄金でつくられた衣服をまとい、美しくまた大きやかに物の具をつけた姿は、本当の神々のようにあたりに目立っており、一般のつわものたちの姿は小さかった。彼らが待ち伏せするのに適当と思われる場所に着くと、それは牛や羊がみんな水を飲みに来る川のところであるが、そこで彼らは輝やく青銅に身を固めて隠れ伏した。伏勢からはなれたところには二人の偵察が出されており、羊や角曲れる牛が現われるのを待ち受けていた。間もなく家畜の群が現われ、二人の牧者がこれに付添い、笛を楽しんでいて、どんな計略があるか少しも予想していない。伏勢がこれを見て襲いかかり、たちまち牛の群と白い羊のみごとな群を切り倒し、羊飼いをも殺した。一方寄せ手の方は、評定の場に坐っていたが、牛の群のところから大騒動がおこっているのを聞くなり、すぐさま駿足の馬にまたがって疾駆すれば、たちまちその場に到着した。彼らはしっかり立って川の堤で戦い合い、たがいに青銅の槍を投げつけ、そこには争いの女神や騒乱の神や死の運命の女神がいて、あるものは生きているが新たに傷を受け、あるものは無傷のまま、あるものは死んだものの足をつかんで混みあう中を曳きずって行くと、その両肩にかけた衣類も人の血で紅に染まっていた。まるで生きた人間のように彼らはいりまじり戦い、たがいに死んだ人の屍を曳きずって行くところであった。」(Ilias: 18. 509-539)

(3) 都市の建設

ホメロスは都市建設についても示唆しており、都市建設にあたってまず行なわれなければならないことが何であったかを示している。すなわちオデュッセウスが漂着したスクリエーにフェイエークス族が植民市を建設した時の事情を説明して、城壁の構築、神殿と住居の建築、耕地の分配をはじめに行なったとしている。その植民市を建設したのは現在の王アルキノオスの父ナウシトオスであったが、それは次のように描写されている。

「神のごときナウシトオス王は彼ら〔ファイエーケス族〕をひきいて移動し、日用の糧のために働く人間どもから遠くはなれてスケリエーに連れてきて、城砦（polis）のまわりに城壁をめぐらし、家を建て、神々の社を造り、そして耕地を分配した。」（*Odysseia*：6・7-10）

ここでの耕地の分配は、詩中の土地制度の研究から、王の御料地又は王領および神殿領としての *temenos* および自由人すべてに対する分割地（*klēros*）の配分を指すことは疑いがない。

ポリスの様子は、アルキノオス王の王女ナウシカーがオデュッセウスを助けて王宮に来るようにと、その道順を説明している詩句の中に美しく描き出されている。塔をもった城壁、港、民会会場をともなったはずの広場、船置場、神殿領、王領、といったものの配列の具体例をここに見出すことができる。すなわちナウシカーはオデュッセウスに次のように呼びかける。

「他国の人よ、さあお立ちなさい。賢いわたくしの父の館にあなたを送り届けるように、ポリスに参りましょ。そこにいけばあなたはすべてのファイエーケス人の貴い方々と知り合いになれましょ。ですがこうして下さい。あなたは無分別な方とも思われません。田園と人間の業なる耕地のところを行く間は、腰もとたちといっしょに騾馬と車の後をさっさとおいでなさい。わたくしが道を先導いたします。程なく高い塔のある城壁をめぐらせた町（polis）に着くでしょう。町の両側には美しい港が一つずつあり、町への入口が狭くなっています。道に沿って両側に揺れる船が引きあげられています。みんなめいめい船置場がそこにあるからです。そこに、美しいポセイドーンの社の両側に、切り出して引いてきて深く埋めた石で固められた集会場（*agorē*）があって、そこで人々には黒い船の道具、網や帆の手入れをし、また櫂を削っております。ファイエーケス人は弓や箠には興味がなく、船の櫂や櫂に興味があり、それに喜びを感じて灰色の海を渡る均り合いの取れた船が好きなのですから。」（*Odysseia*：6・255-272）……「道のすぐそばにアテーネーの

美しい白楊の茂る神域をあなたは見るでしょう。そこに泉が湧き、まわりは野原です。そこにわたくしの父の御料地 (temenos) に豊かに実った果樹園があります。町 (ptolis) から呼べば聞こえるほどのところですよ。わたくしたちが町 (asty) に入って父の館に着くころまでそこに坐ってお待ち下さい。」 (Odysseia: 6. 291-296)

(4) ホメロスの都市概念

このように見てくると、ホメロスのポリスは草深い田舎町や城砦であり、王はいてもそれは共同体の首長にすぎず、国家とよばれるにふさわしい公権力や権力機構は存在しない。一般にホメロスの背景にある社会では、商工業の発達には未熟で、王宮中心の海外貿易はあっても、共同体内分業は未発達であり、後には手工業者層を意味するデーミウールゴイ (dēmiourgōi 共同体のために働く人々) も、医師・木工・預言者・吟遊詩人・使者を指しており

(Odysseia: 17. 383; 19. 135), ポリスとはいっても、古典期のそれのように非農耕的人口層が大きな比重をもつ都市とはちがって、村落的集住の域を出なかったものと考えられる。こうした村々の結合ないし統合 (kōmōn koinōnia) が古典期のポリスの原型である。ホメロスのポリスはこのように暗黒時代の社会状況を反映して、城砦または城砦のまわりの集中的居住地、あるいは城砦なしの村落的集住を意味していたようである。

〔太田 秀通〕

2 ヘシオドス

Hesiodos (700 B.C. ころ), *Erga kai Hemera*
(ヘシオドス「仕事と日々」) による。

今日の学界では紀元前 800 年前後に国家としての公権力をもつポリスが形

成されたというのが定説であるといつてよい。それは従来の王権が否定されるか、制限されることによって、貴族の政權独占によって成立したと考えられており、市民団國家の出発点は、貴族政ポリスであつたといふことができよう。貴族政期の農民の姿を示す唯一の文獻がポイオティアのヘシオドスの「仕事と日々」である。これは単なる農事曆ではなく、農書とはいへても、詩人で農民であるヘシオドスの個人的体験や、歴史觀や、貴族に対する憎しみや、正義の觀念などを含む個性的な作品である。彼のポリス觀は市民団の存在を前提としており、平民の立場に立つて裁判を独占する貴族に批判の眼を向け、彼らを「賄賂くらう貴族ども」と呼んで憎しみをぶつけている。彼はポリスの繁榮と正義の關係についてこういつている。

「他所のものにも土地のものにも公正な裁判を行ない、そして正義の道からはなれない人々においては、ポリスは榮え、人民はその中で繁榮する。若ものを育てる平和（*Eirēnē*）が地上にあまねく、彼らに対して速く見通すゼウスは決して殘忍な戰爭をしかけないし、正しい裁判を行なう人々は、飢えもなく病もなく、心明かに関心の的たる田園を保つ。」（*Erga*: 225-231）

平和と正義をポリス繁榮の条件と考えるヘシオドスは、裁判を曲げる貴族たちに対して、人民が立つて報復するであろうと脅かしている。これはヘシオドスの時代には現實には起きなかつたが、紀元前7世紀6世紀には、貴族と平民の対立の中から、平民の指導者が立つて貴族政を打倒するといふことがおこつて、僭主政が成立することとなつた。ヘシオドスの次の詩句はこうした状況を予見しているといえよう。

「貴族たちよ、このような正義をよく心に考えて見よ。不死の神々は人間のすぐそばにいて、不正な裁判で互いに傷つけ合つて神々の怒りを氣にかけない人々を見て目ぼしをつけている。肥沃な大地の上には、3万人のゼウスの不死なる監視者が死すべき人間どもを見ており、正義と不正な行爲を監視し、霧に身を包んで地上をあまねく歩きまわっている。さらにゼウスから生まれた処女神

正義（Dikē）がいて、オリュンポスに住む神々に敬われている。誰かが不正に彼女を非難し傷つけると、直ちにクロノスの子なる父なるゼウスのもとに坐って、人間の不正な心を告げるだろう。そしてついには人民（dēmos）が心に毒を含んで不正を述べて、裁判を曲げる貴族たちに復讐するであろう。賄賂くらう貴族たちよ、これらのことから自ら守り、裁判を直くし、不正な裁判をきっぱり忘れよ。」（Erga: 250-264）

ここには正義の法の存在が前提されており、慣習法の成文化は彼に続く時代にはじまるようになる。成文法の成立は多く立法家に帰せられるが、それは法解釈を市民団の前に批判の対象としたことを意味し、貴族に対する平民の勝利の第一歩であった。

ここに注意しなければならないことは、平民詩人たるヘシオドスは、1～2の奴隷を所有する小農民であり、詩の中で人民（dēmos）と呼んでいる階層は共同体成員であって、奴隷はデーモスの中には入っていないということである。ポリスは封鎖的な市民団であり、ポリスの制度は市民相互の関係の総体であって、このポリス共同体は中小農民の分割地（klēros）所有に基礎を置く。したがってポリスは中心市と農村から成り、ポリス領域内に住む奴隷やその他の隷属民はこの共同体から排除されている。それ故ポリスの原理としての自治・独立（自由）・自給自足は、共同体成員のみの政治的自由と家計の独立を基礎としている。

〔太田 秀通〕

§2 都市論の諸論点

古典古代の都市論は、古典古代社会の構造に制約されて、経済的見地よりもむしろ政治的軍事的見地に立っているということができる。しかし都市論展開

の論点は必ずしも同一ではなく、あるいは国制という観点から、あるいは政治形態という観点から、あるいは部族制度との関係から、あるいは人類進歩の過程における一段階という観点から、いろいろな論じ方がなされた。主なものを見てみよう。

1 ヘロドトス

Herodotos (484-425 B.C.23), *Historiai*.

ハリカルナソスのヘロドトスは広くオリエント世界を旅行し、ペルシア戦争に頂点に達するギリシアと東方勢力との抗争を叙述して、「歴史の父」と称せられたが、彼のポリス観は、東方ペルシア帝国の専制君主国家との対比によって明確にされている。すなわちこの歴史叙述全体を通じて、専制君主国家の軍隊がいかに主人の気にいるかを考えて戦うのに対してギリシア人がいかに祖国の自由のために戦うかを示しており、アテネ民主政の成立がいかにこの東西抗争にあたって大きな意味をもったかを明らかにしている。ポリスの生活がペルシア大王の眼にどのように映じたかを示す例として、アゴラーの市場としての機能にふれる物語をあげることができよう。それはスパルタ人の使者とペルシアのキュロス大王（紀元前6世紀中葉に活躍）との対話の中に出てくるもので、次のように伝えている。

「使者がそう伝えると〔スパルタ人がサルディスに送った使者を通じて、ギリシアのポリスを征服しないようにとペルシアに申し入れた時のことを指している〕、キュロスはそこに居合せたあるギリシア人たちに向って、かかることをいってよこすラケダイモン人とは何ものであり、またその数は幾何であるかと聞いたそうである。彼はその答を聞いてから、スパルタの使者に向っていっ

た。『余は、いっし』に寄り集って誓を立てながら欺し合う一定の場所をポリスのまん中にもっているような、そんな者どもを恐れたことはない。もし余が生きながらえれば、彼らはイオニア人のことにかかずらうどころか、自分自身の悲運について話さねばならぬようにしてやる。』キュロスはこうってギリシア人全体を非難したのであるが、その現実には、ペルシア人は公けの場所で物を売買することもなければ、そもそも市場（*agorē = agora*）をもっていなかったのに、ギリシア人は物を売買するアゴラーをもっていたからである。」（*Historiai*: 1.153）

ヘロドトスは民主政下のアテネで優遇されたが、政治形態の優劣にも関心を寄せ、ペルシアのダレイオス大王の即位の事情を叙述するにあたって、有名な政治形態論争を展開している。この論争は、ペルシアの宮廷陰謀を鎮めた後に、いかなる政治形態が最善かを論議した時におこったもので、ここでは平等政治と寡頭政治と独裁政治との優劣が論ぜられたという。オタネスは政治に民衆を参加させて平等政治にすべきだと主張し、メガビュゾスは寡頭政治を主張し、ダレイオスは独裁政治を主張し、ダレイオスの見解が勝利してダレイオスがペルシア帝国の大王となったというものである。その真偽のほどは分らないが、ヘロドトスはここでギリシアのポリス政治の特質を論じていることは明らかである。これはポリス政治論の最初のものであると考えられる。ここでこれら三つの主張を見、ポリス政治が都市の機能とどう関係するかを考える材料とすることが必要である。

オタネスの主張（要約）「われらのうち誰も独裁者（*mounarchos*）となつてはならないと思う。責任を負うことのない独裁制は秩序ある国制とはならない。この世で最もすぐれた人物でさえ、君主になれば、驕慢の心と嫉妬心とから、あらゆる悪徳をもつことになる。独裁者というものは、適度に讃めれば奉仕が足りないといって機嫌をそこね、大切にしすぎれば、へつらい者として不興を買う。だが今から私のいうことが最も重要なことで、独裁者というも

のは父祖伝来の慣習を変え、婦女を犯し、裁判もせずに人命を奪うものだということである。これに対して大衆による政治は第1に平等政治(*isonomia*)という美しい名をもっており、第2に独裁者の行なうようなことは一切しない。役職には抽籤をもって就任し、役人には責任があり、すべての決議は公論によって決せられる。だから私としては独裁政治(*mounarchiē*)を断念して大衆の権利を確立せよと提案する。」(*Historiai*: 3.80)

メガビュゾスの主張(要約)「オタネスが独裁政治を廃せよといった主張には賛成するが、大衆の権利を確立せよというのは最善の見解とはいえない。役にも立たぬ大衆ほど愚かで驕慢なものはない。独裁者の驕慢を避けようとして大衆の驕慢におちこんではならない。われわれは最もすぐれた人々の一群を選び出し、これに政権を与えるべきであるし、われわれもまたそれに入るはずである。」(*Historiai*: 3.81)

ダレイオスの主張(要約)「メガビュゾスが大衆の性質についていったことには賛成であるが、寡頭政治(*oligarchiē*)については正当でないと思う。民衆政治・寡頭政治・独裁政治の三つがそれぞれ最善のものであるばあいには、最後のものが最もすぐれていると私は断言する。なぜなら最も秀でただ1人の人物による政治にまさるものはないからである。寡頭政治においては、公益のために努めようとする人々の間に個人的な激しい紛争がおこり、紛争から殺害がおこり、そして結局は独裁政治に帰着するものである。また民衆政治のばあいは悪人たちの間に友愛が生じ、彼らは力を合せて悪事を働くことになるから、誰かが民衆の指導者になってかかる悪人を根絶すると、その結果彼は民衆の称讃的となり、やがて独裁者となる。こうして独裁政治が最善の政治形態であることは明らかである。このすぐれた父祖伝来の慣習を廃止するようなことがあってはならない。」(*Historiai*: 3.82)

〔太田 秀通〕

2 トウキュディデス

Thoukydides (460-400 B.C.ころ), *Historiai*.

アテネの歴史家トゥキュディデスは紀元前431-404年のペロポネソス戦争の歴史を叙述し、ギリシア全土の諸市がアテネ方とスパルタ方に分れて戦った有様を明らかにした。この中には古代都市国家の権力論が表現されている。しかしここでは、都市国家が村々の結合から生まれたとする発生論を見ておくだけで足りるであろう。彼はスパルタがポリスへの集住(synoikismos)を行っていないことを次のように述べている。

「ところがラケダイモン人〔スパルタ人のことを指している〕はペロポネソスの5分の2を領有し、他のペロポネソス全土と、その他に散在する同盟諸市を指揮する立場にあるものと、ポリスへの集住も行なわれておらず、華美な神殿も建築物ももたずに、ギリシア古来の居住様式と同じく、村々に分かれて(kata kōmās)住んでいるために、実力と比べて貧弱に見える。」
(*Historiai*: 1.10)

またアテネの集住については次のように述べている。

「ケクロブス〔アテネ第1代の王と伝えられる〕と初期の王たちの時代からテセウス〔アッティカ統合を行なったと伝えられるアテネ王〕の時代までは、アッティカは、それぞれの公会堂(prytaneion)と首長(archōn)をもつ多くのポリスに分かれていて、何か恐ろしいことでもおこらない限り、彼らは王のもとに集って評議したりすることもなく、それぞれ自分たちで事を処理し、また自分たちで評議していた。そして彼らは、時としてエウボルモスのひきいるエレウシス人がエレクトウス〔伝説的なアテネ王〕と戦ったように、たがいに戦ったことさえあった。しかしテセウスが王位につくと、知謀と力にすぐれた彼は、他の点についても国の政治を改善したが、地方の各ポリスの評議

会議事堂 (bouleutērion) と役所 (archē) を廃止し、唯一の評議会
議事堂と公会堂をつくって、アッティカの全住民を今日あるような単一のポリ
スに統合した。そして住民は従来通り自分たちの土地に住んでいたが、彼はア
テネにだけポリスの機能を認めることを強制し、それ以来アッティカの全住民
は市民としての権利義務を与えられた。こうして大きなポリスができあがり、
それがテセウスによって子孫に伝えられたのである。アテネ人はこの時から今
日に至るまで、国費をもって、女神アテナのために集住祭 (xynoiikia =
synoiikia) を催している。」 (Historiai: 2.15)

〔太田 秀通〕

3 ルクレティウス

Lucretius, Titus Carus (100-50 B.C. ころ),
De rerum natura (ものの本質について)。

ルクレティウスはエピクロスのアトモ論によって万物の発展を説明し、人間の歴
史的発展についても透徹した見通しを展開した。その中で都市建設が王たちに
よって行なわれたことを叙述し、それが家畜と土地の分割と平行していたと捉
えていることは注目に値する。彼はこの詩の中で次のように述べている。

「彼ら〔未開な人間ども〕は、いかにして以前の生活を新しいものに変える
べきか、それを才能と心の強さに卓越した善意の人々によって実現すべきかを、
日々ますます多く示されていた。王たち (reges) が都市 (urbs) を建設
し、自らの保護と防衛のために城砦 (praesidium) をつくりはじめた。
そして彼らは家畜と土地を分割し、美と力と才能にしたがって各人に割りあて
た。なぜなら当時においては、美は大きな力を持ち、肉体の強さは重要であっ
たから。それから富が導入され、金が発見され、金は容易に強いものからも美

しいものからもその名誉を奪った。なぜなら、肉体がどんなに強くとも、美しくとも、人はたいてい富める人の党派に従うから。」(De rerum natura : 5.1105-1116)

〔太田 秀通〕

4 プルタルコス

Ploutarchos(46-120 ころ), Bioi (いわゆる英雄伝)。

プルタルコスの都市発生論の例として、アテネとローマの建国についての彼の考え方を見ておく。まずアテネの集住について、

「アイゲウス〔伝説的アテネ王〕の死後テセウス〔アイゲウスの子〕は驚くべき大事を思い立ち、アッティカに住んでいた人々を一つの町(asty)に集住させ、それまで散住していて、全体に共通の利益のために呼び集めるのが困難であるばかりでなく、時にはたがいに不和で戦うこともあった人々を、一つのポリスの一つの民衆(dēmos)とした。さて彼は部族(phylē)ごと氏族(genos)ごとにまわり歩いて説きつけた。平民や貧民は直ちに彼の訴えを受け入れたが、有力者たちに対しては、王のいない国制と民主政治(dēmokratia)を約束し、自分はただ戦争の指揮者および法律の擁護者になるだけで、他のことについてはすべての人に平等の関与を認めると約束した。……そこで彼はそれぞれの部落にあった公会堂(prytaneion)や評議会議事堂(bouleutērion)や役所(archē)を廃止して、すべてに共通な一つの公会堂と評議会議事堂を現在のアテネの町のところにつくり、そのポリスをアテネと名づけ、共通の祭典パンアテナイア〔全アテネ祭の意味〕を創始し

た。」(Solon 24)

「テセウスはさらにポリスを大きくしようと思って、平等を条件としてすべての人を呼びよせた。そして『民衆よ、すべての人はここに来れ』という文句は、すべての民衆の一種の一体性を確立した時のテセウスの言葉であったといわれている。しかし彼はその民主政治が無差別の大衆の突進によって無秩序で混乱したものになることを許さず、はじめて貴族(Eupatridai)と農民(Geōmoroi)と職人(Dēmiourgoi)とに区分し、貴族には、神事を司り、役人になり、法律の教師となり、聖俗のことがらの解説者となることを認め、他の市民に対しては、榮譽においては貴族が、有用性においては農民が、数においては職人が他にたちまざっていると考えて、権限を平等に定めた。(Solon 25)

次にローマの建国については、

「二人〔ロムルスとレムスの兄弟〕が集住(synoikismos)をおし進めた時、たちまち場所のことで争いがおこった。ロムルスは四角のローマを意味するローマ・クアドラタを築いたから、その場所に移住したいといい、レムスは、彼の名をとってレモニウムと名づけられ、今リグナリウムと呼ばれているアウェンティヌス丘の堅固な場所がいいといった。二人はこの争いを吉凶の鳥によって決めることに同意して、別々に離れて座を占めたところ、レムスには6羽の兀鷹が、ロムルスにはその倍の兀鷹が現われたといわれる。しかしある人々の説では、レムスは本当にそれを見たのだが、ロムルスは嘘をついたのに、レムスがやってきたその時に12羽現われたのであり、そのためにローマ人が鳥占いをする時には、今も兀鷹を用いているのだという。」(Romulus 9)

「レムスはその欺瞞を知ると大いに怒り、ロムルスが城壁のまわりにめぐらそうとして壕を掘っている時、その仕事を嘲笑したり邪魔をしたりした。そしてついに彼が壕を飛び越えた時、レムスは、ある人々によればロムルス自身に

よって、ある人々によればロムルスの子の1人ケレルによって、打たれて死んだと伝えられる。」(Romulus 10)

「さてロムルスはレモリアにレムスを養い親たちといっしょに葬って、都市建設を進めていった。……今のコミティア〔ローマのフォルムにある民会会場〕のまわりに円く壕が掘られ、慣習においては良きものとして使われ、自然においては必然のものと思われるあらゆるものの初穂がそこに入れられた。そして最後に、各人がめいめいの故郷から小さな土くれをもってきて、その初穂の中に投げこんでまぜ合わせた。この壕は元と同じ名でムンドゥスと呼ばれる。それからこれを中心として円を描くようにポリスをまわりに描いた。そして都市建設者は、犁に青銅の刃をつけ、牡牛と牝牛を軛につなぎ、それを自分で駆りながら境界線に沿って深い畝をつくり、後からついていく人の仕事は、犁のおこした土くれを境界線の内側にかき入れ、外側にこぼれたのを決して見逃さないことであった。」(Romulus 11)

〔太田 秀通〕

第3章 古代都市論

古代都市の研究は、古代社会の研究と不可分の関係にあり、歴史学・社会人類学・考古学などの長足の進歩は、都市発生論についても、古代都市論においても、いちだんと総合的視野を必要としているように見える。またエジプト・メソポタミア・カナアン・インド・メソアメリカなどにおける都市の研究は、都市の発生が独立的におこなわれたことをますます強く示唆している。しかし古代都市の構造と機能を大観すると、東洋的専制のもとにおける都市と古典古代の都市国家との二大類型に区別することができるのではあるまいか。このことは同時に国家形成過程の差異ならびに形成された国家の構造の差異と関連しており、したがって同じく都市とはいっても、古代東洋社会と古典古代社会との構造差に対応する違いをもっていたことは当然である。研究史の上では両者はそれぞれ単独に研究されたり、あるいは比較史的に関連させて研究されたりしているので、東洋の古代都市、西洋の古代都市というふうに二分することは困難であり、また学界の現状では両者を相関的に取りあげる方がより意味があるように思われる。

1 クーン

本稿使用書は、Kuhn, Emil (1878—), Ueber
die Entstehung der Staedte der Alter:
Komenverfassung und Synoikismos, B. G.
Teubner, Leipzig, 1878.

村 (Kōmē) の統合としてギリシアの都市国家の形成を見たもので、都市発生論で軍事的起源説をとる一つの典型となっている。

「都市はそれ自身の中に共同体 (Gemeinde) の概念と国家 (Staat) の概念を同時に含んでいた〔ギリシア・ローマの都市を念頭に置いて〕。」
(Kuhn 1878:7)

「古代人は都市の名称のもとに、通常、特にその名づけられた都市に集中する土地・人民を同時に把握した。集中の力によってアッティカはアテネに把握されている。アテネに居住するものだけでなく、アッティカに居住するものもアテネ人なのである。都市に住む同胞と田園に住む同胞の間には、共同所属または共同体帰属に対する関係においては何らの差別も存在しない。このようなより包括的な意味はギリシア語の polis という言葉にだけでなく、ラテン語の civitas や urbs という言葉にも内在するものである。」(ibid.:155)

「都市は何よりもまず〔村々からの古代都市への統合の動機を説明して〕、分散居住は、例えば海陸両面から同時に攻撃されたようなばあい、戦争において相互に支持と援助を実現するには適していないのではないかという心配に基づいて、建設された。経験は同じことを教えていた。すなわち、ある地方の分散して存在する村々が個別に攻撃されたばあい、統一された力をもってこの攻撃に立ち向かう可能性がそれらの村々から奪われるだろうということを教えていた。」(ibid.:159)

〔太田 秀通〕

2 ブルックハルト

本稿使用書は、Burckhardt, Jakob (1818-1897),

Griechische Kulturgeschichte, 2 Bde.,
Verlag von W. Spemann, Berlin und Stuttgart, 1898.

ブルックハルトのギリシア理解の特徴は、祖先崇拜とかまどの崇拜に現われる宗教から家族を説明し、また都市国家の手本をフェニキア人の都市に求めている点にある。そこには文化国家の直観が見られるが、フェニキア人の都市の概念がどれだけギリシア人に影響を与えたかは実証的に疑問であるが、この見地はもう一度考え直してみる価値があろう。

「一つの民族が何処でどのようにして始まるかという問題は、すべての起源と同様に不明瞭なままである。しかしギリシア人の生活の社会的基盤、家族・結婚・所有はすでにギリシア人以前の時代に、おそくともギリシア人とギリシア系イタリア人がなお単一の民族を成していた時代に存在していたようである。しかしそれらのものは必ずしも組織されたより大きな民族体 (Volkstum) を前提とするわけではなく、その反対に、祖先崇拜とかまどの崇拜に中心的地位を譲り与えていた原始宗教 (urreligion) の作品 (または表現) であるにちがいない。家族はこの祭祀によって団結している。それ故われわれはこの家族を、自然的結合と少なくとも同じ程度に宗教的結合であると考えなければならない。祖先崇拜は一夫一婦制度を規定するものでもあり、この制度は、煩雑な婚礼儀式と姦通に対する重い刑罰とから考えて、ギリシア人の基盤には初めから存在していたであろう。同様に土地所有の権利はかまどと墓地への崇敬と因果関係にある。」 (Burckhardt 1898, I: 57)

「すでにギリシア人以前に、フェニキア人が polis すなわち都市共同体 (Stadtgemeinde)、国制を具備した都市的国家制度を創設していた。彼らの王政は、特権的家族の首長たちを成員としていたらしい評議会によって制肘されていた。これらの都市は、移民団を、彼らの祖国の状況の自由な似姿と

して、送り出す能力をもっていた。それは、個々の民族において全体の中心点を現わしていたところの東洋の古い王城とは異なったあるものであった。……すなわちそれはすでに市民団（*Bürgerschaften*）であったのである。このフェニキアの都市国家はすべて行動的で堅固な海岸都市で、一般に階級も軍人層もないが、あらゆる方法で自己を防衛することを心得ていた。この模範がギリシア人に対して影響を与えずにはおかなかったと仮定すれば、ギリシア人の名誉は傷つけられるであろうか。フェニキア文化がギリシア人の生活の中に早くから入りこんできたことは、他の多くの点から今日では一般に承認されている。おそらくテーベは、後にボイオティア人のものとなった土地につくられた、起源からいえばフェニキア人の都市であったのであろう。だがいずれにせよ、ギリシア人はすでに早くからフェニキア海岸の諸市とその植民市についての知識をもっていたにちがいないのである。」（*ibid.*:61-62）

「ポリスは決定的なギリシア人の国家形態であり、一定の耕地を支配し、その領内では、他のいっそう堅固な武装都市や、より広汎な独立の市民団の存在は許されないところの、独立した小国家であった。その成立は決して漸進的なものとは考えられず、常にただ一回的なもの、一つの強力な瞬間的意志または決意の結果によるものと考えられる。ギリシア人の空想は全く一回的な都市建設（*Ktiseis*）で満たされている。……一つの堅固な武装都市を有する小国家が、小規模でしかも見晴しのきく（*eusynoptos*）ものでなければならない自らの内的必然性を正確に認識していたということが明らかとなるであろう。……熱に浮かされたような生活衝動がポリスを創造するに当たって採用する形式は、普通にいわゆる集住（*Synoikismos*）、すなわち従来の村落共同体を、できれば海岸において、一つの堅固な武装都市に集めて定住させることである。当時における海賊と貿易との混合、岩がちの岬や入江の存在が、この過程に対していかなる作用を及ぼしたかは、おそらく大して重要ではなかったであろう。人々は何よりもまず一つの強固な政治体（*politischer Körper*）を

つくろうとするのであり、同一の過程が起こりつつある近隣のポリスに対して態度を構えようとするのである。単なる交通や物質的繁栄などの目的をもってならば小都市（Polisma）や田舎町（Ptolieithron）以上に出ることはなかったであろうが、ポリスはそれ以上なのである。」（ibid. : 64-66）

「ポリスの形成は一つの住民の全存在における大きな決定的体験であった。生活様式は、耕地の耕作が続けられているところでも、田舎風から都市風の優勢なものに成った。それまでは『農夫』であったものが、今や、みなが集って住む時は、『政治家』となった。この体験の意義は、都市の建設についての、また都市が以前の大きな危険から救われたことについての諸伝説の中に反映していた。」（ibid. : 72）

「一つのポリスの本来の中心点はアゴラーすなわち広場であった。古代ギリシアの小さな諸都市においては、アゴラーが一つにしてすべてであった。プリュタネイオンもブーレウテーリオンも裁判所も、一つまたは数個の神殿も、アゴラーのところに置かれていた。その上アゴラーは民会（Vosksversammlung）や競技にも使われた。それらの個々の目的のためには、もっと別の所にかつ豊かに用意されていたばあいでも、アゴラーは依然として都市の本来の生活機関（Lebensorgan）であった。」（ibid. : 75）

〔太田 秀通〕

3 ビュアリ

本稿使用書は、Bury, J. B. (1861-1927), A History of Greece to the Death of Alexander the Great, London and New York, MacMillan and Co. Limited, 1904.

ヨーロッパの学界にはアーリア人の古い社会の共通性に関心を寄せる一傾向があり、そこではアーリア社会の諸要素からヨーロッパの国制の特色を導き出そうとすることになることがある。ビュアリのギリシア史はもちろん古代ギリシアだけの政治史中心の概説であるが、その背後にはやはりアーリア人社会の共通性についての確信が横たわっている。

「アーリア人たるギリシア人・ローマ人ならびにゲルマン人の子孫（養子による子孫であれ出生による子孫であれ）の大部分に共通する遺産であった政治制度の働きを垣間見させる最も古いものはホメロスの叙事詩である。それらがわれわれに示すところでは、頂点には王がいた。しかし王は自己の意志だけによって統治するのではなく、彼が相続する共同体の主要な人々から成る評議会によって導かれ、そして王と評議会の共同討議の決定は、全人民の総会に提案されるのである。王と評議会と民会とのこれら三つの要素からヨーロッパの国制は成長してきた。ここに王制・貴族政・民主政というさまざまな形態のすべての芽がある。

しかし最も古い時代においては、この政治組織は弱くかつゆるやかであった。原始社会における真の力は家族であった。われわれがはじめてギリシア人に会う時、彼らは家族共同体をなして共同生活をしている。彼らの村は、*genos* すなわち氏族または広い意味での家族の居住地である。そのすべての成員は共通の祖先から出た子孫であり、血縁の絆によって結びつけられている。はじめ家族の首長はその家族に属するすべての人々に対して生殺権をもっていた。そしてこの権力がしだいに衰えたのは、もっぱら国家の權威が成長し、家族の相対的独立性に対抗して自己を主張したからであった。しかし村落共同体は、アジアの旧世界のばあいとは異なり、孤立しても独立してもいなかった。それらは *phylē* と呼ばれるより大きな共同体すなわち部族の一部なのである。部族は最も簡単な形態の王国の全人民なのであり、部族の居住している領域はその *dēmos* と呼ばれた。一人の王が強力となって隣接する王たちのデーモスど

もに対する支配権を獲得すると、1部族以上からなる共同体が成立し、各部族は、それぞれ固有の政治制度を国家全体の共通の制度の中に没せしめなければならなかったと同時に、その固有の個性をより広汎な連合の枠内で保持したであろう。

数家族が結合して *phratría* と呼ばれる社会すなわち一定の共通の宗教的慣習をもつ兄弟団を結成するのが普通であった。兄弟団を中間単位とする氏族および部族の組織は、アーリア人の祖先から由来する枠組で、少なくとも他のアーリア人と共有するものであった。何故ならわれわれは同じ制度をローマ人の間にもゲルマン人の間にも見出すからである。」(Bury 1904:69)

「家族の重要性は、ギリシア人が征服地を占取したその仕方の中に、最も明瞭に示されている。土地は個々の自由人の私的所有とはならなかったし、また共同体全体の公有地ともならなかった。1部族または複数の部族の王は全領域を共同体の家族数によって幾つかの地片に分け、諸家族は籤引きをして所領を決めた。各家族はこうしてそれぞれ固有の所領を所有した。家長はこれを管理したが、これを譲渡する権限をもたなかった。土地は血縁集団全体に属し、その中の特定の成員に属するものではなかった。土地所有権は征服の権利に基づくものではなくて宗教的感情に基づくものであったらしい。各家族は死者をそれぞれの所領の中に埋葬した。そして死者が横たわる土地を永遠に所有するのはその死者であり、その墓地のまわりの土地は、正当な権利によって、現に生きている死者の血族に属し、祖先の墓を守りかつこれを世話することはその血族の最高の義務である、と考えられていた。」(ibid:70)

「ギリシア人の国家の国制の構造は、ホメロスの時代には、このように単純で弛かなものであった。おそらく大きな共同体がギリシアに入ってきたことはほとんどなく、より大きな共同体は征服の過程でたえず形成されたものであった。王政時代の後半に、ギリシア史の将来を決定するはずの新しい運動がはじまった。すなわち村々の統合から、都市が出現して形をとりはじめるのである

(都市のはじめは紀元前10世紀から9世紀)。平地や河谷の住民は、彼らのばらばらの村を去って、通常は王の城砦の影のもとにある一つの場所に相並んで住居をつくる気になったのである。はじめこの運動は、混乱した不安な時代に共同居住によって与えられる保護を獲得することであつたろう。……村落から都市生活への変化は一般的ではあつたが普遍的ではなく、村落生活を続けてずっと後まで都市を形成しなかつた共同体も多い。この運動は王たちによって促進された。強力な王たちがしばしば強制によってこれを実現したこともありそうなことである。しかしこれを促進することによって、王たちは心ならずも、王政を掘り崩して彼ら自身の廃位への道を開いていたのである。都市国家は自然に共和国へと傾く。」(ibid.:72)

〔太田 秀通〕

4 クーランジュ

本稿使用書は、Coulanges, Numa-Denis Fustel de (1830-1889), *La Cité Antique*, Paris, Librairie Hachette et Cie, 1905 (訳文は、田辺貞之助訳『古代都市』白水社、1961.によつた)。クーランジュは、フランスの歴史家で、古代都市とフランス土地制度の研究に業績をあげた。

(1) 古代都市の形成

古代、わけても古典古代(ギリシア・ローマ)における都市の形成は、「数個の支族(phratries)が結合して部族(tribus)をなしたように、数個の部族も、それぞれの祭祀を尊重するという条件でたがいに連合(asso-

cier)することができた。この連盟(alliance)が成立した日に、都市が生まれた。」(クーランジュ 1968:189)「したがって、家族、支族、部族、および都市はどれもまったく類似した社会で、一連の結合によって順次に上位のものの母体となったのである。」(同上:189)

「この古代都市発生の方法は、ひさしいあいだつづいた慣習によって証明される。初期の都市の軍隊をしらべてみれば、それが部族、支族および家族にわりあてられていたことがわかる。それはある古代人の言葉〔原注(1)〕によれば、『戦士が平時においておなじ祭壇に灌祭や献祭をおこなうものとならんでたたくため』であった。またローマの初期の人民の議会〔原注(2)〕をみれば、投票は支族や氏族ごとにおこなわれた。祭祀の点についても、ローマには各氏族に〔原注(3)〕ふたりずつ都合6人の巫女がいた。アテナイでは、執政官(アルコーン)は全都市の名によって大部分の犠牲奉献をおこなったが、それ以外に各部族の首長によって共同でおこなわれる2, 3の宗教的儀式があった。」(同上:190)

このようにその形式の論拠を述べ、さらに以下のごとく続けている。「しかし、ここにひとつの留保をしなければならない。それは、最初の都市がそれ以前に成立した小社会の連合によって形成されたとしても、われわれに知られているあらゆる都市がおなじ方法でつくられたと断定するわけにはいかないことである。ひとたび都市組織の方法が発見されると、そののちに形成される都市は同様のながい困難な道をはじめから経過する必要がなかった。ときにはまったく正反対の道をたどることさえできた。ひとりの首長が、すでに構成された一都市からでて他の都市を建設にゆく場合には、普通はごく少数の同胞市民(concitoyens)だけをつれていった。そしてのちに、他の雑多な地方からきた種々の民族に属する群集(hommes)を結合した。しかし、この首長はつねに故国の都市の姿に似せてあたらしい国家を構成することをわすれなかった。したがって、彼は人民を部族と支族とにわけ、その小さな連合はどれ

も祭壇をもち、生贄をささげ、祭典をもよおした。そのうえ、それぞれに古代の英雄をおもいおとしてこれに礼拝をささげ、時をへるにつれて、ついにはその神を自分の都市の太祖と信ずるようになった。」(同上：194-195)

原注(1) ホメロス『イリアス』Ⅱ，362。ヴァロ『ラテン語論』Ⅴ，89。アテナイには兵士を部族と行政区とによって排列する習慣があった。ヘロドトス，Ⅵ，Ⅲ。イサイオス『メネクレスの相続について』42。リュシ阿斯『マンティテオス弁護』15。

原注(2) ハリカルナススのディオニシオス，Ⅱ，23。

原注(3) アウルス・ゲリウス，ⅩⅤ，27。

原注(4) ボルックス，Ⅷ，111。

(2) 古代都市の概念

「都市は個人の集合ではなく、都市よりまえに形成され、かつ都市がそれを存続させた数個の団体の連盟(*confédération*)であった。」(同上：190)

「しかし、ここでとくに注意すべきことは、これら種々の集団がこのようにたがいに結合していても、そのおのおのは決して個性や独立をうしなわなかったことである。数個の家族が合して支族となったが、おのおのの家族は孤立していたところの構成をそのまま保存していて、祭祀も祭司職も所有権も家族内の裁判も全然かわらなかった。それから支族も連合したが、おのおのの支族は独自の祭祀と集会と祭典と首長とを保存していた。ついで部族から都市にうつったが、部族はそのためになされたのではなく、都市が存在しないかのようにならねとして一団をなしていた。すなわち、宗教的には無数の小さな祭祀が存続し、そのうえに共同の祭儀が設定され、政治的には多数の小さな政治機関が依然として活動し、そのうえに共同の政府が樹立されたのである。」(同上：189-190)

(3) 都市と都会

「都市(cité)と都会(ville)とは古代人にとっては同意語ではなかった。都市は家族や部族の宗教的、政治的団体であるが、都会はこの団体の集会の場所であり住所であり、とくにその聖所であった。」(同上：198)

そして都会の建設に関しては、現在との比較の上で次のごとく述べる。「古代においては、都会はかように緩慢な人口と戸数との増加にともなっておもむろに形づくられたのではない。古代人は一挙に都会を建設し、全部を一日で完成したのである。それには宗教的、政治的団体たる都市がまず構成されなければならなかったが、これはもっとも困難で、かつ通常もっとも時日を要する仕事であった。しかし、家族と支族と部族とが結合しておなじ祭祀をもつことに同意すると、すぐにその共同の聖所とするために都会を建設した。それゆえ都会の建設はつねに宗教的行為であった。」(同上：198)

従って、「建設者の第一の配慮は新都会の敷地の選択であった。この選択は非常に重大視され、国民の運命がそれにかかっていると信じていたが、これはつねに神の決定にゆだねられた。」(同上：199-200)

さらに、「儀式の次第がはっきりわかると、すぐに協会建設の工がおこされた。神官らはまず生贄をささげ、」(同上：203)「市民とともにあたらしい都会にすむことを神々に決意させる効験があると信じられていた、さまざまな祈禱をとなえた。」(同上：203-204)

こうした過程をへて都会が建設された訳であるが、その建設者も、「都会の存立を左右する宗教的行為を成就したもの」(同上：209)で、「その生前から、人々は彼を祭祀の創始者、都市の父とみなし、死後は未来永劫の子孫にとって共同の祖先」(同上：209)として崇拜されたのであった。

このように、「都会は神聖な囲牆にかこまれ、祭壇を中心としてひろがるものであるから、都市の神々と人々とを包含する宗教的な住所であった。」(同上：204)

(4) 市民と外国人

市民と外国人についての相違は、「古代の市民をもっとも本質的な属性によって定義するならば、都市の宗教を所有するものというべきである。」（同上：281）「これに反して、外国人とは祭祀にちかづくことをゆるされないもので、都市の神々の保護をうけないばかりでなく、神々を祈願する権利さえもたない。」（同上：281）とあるように、祭祀の有無にある。

「祭祀にまじわることは同時に権利の享有をともなった。市民は集会にさきだっておこなう犠牲奉獻に列席できるから、その集会の投票にくわ入ることができた。彼は都市の名によって犠牲奉獻をおこなえたから、市長または執政官となることもできた。また彼は都市の宗教を有するから法律を主張し、訴訟手続のあらゆる儀式をおこなうことをゆるされたのである。これに反して、外国人は宗教にあずかるものでなかったから、なんの権利ももたなかった。」（同上：283）

けれども、たとえ市民であっても都市に対する罪を犯したものは、市民権剝奪(atimia)〔原注(1)〕の罰則を受け、「要するに、その都会で外国人となりはてるのである。公権、宗教、私権など、みな同時にうばいとれる。これら全部は市民という呼称のうちにふくまれるものであるが、彼にとってはすべてがなくなるのである。」（同上：285）

原注(1) アテナイの「アティミア」については、アイスキネス『ティマルコス弾劾』21。アンドキデス『神秘教について』231。トゥキディデス、V、34。プルタルクス『アゲシラス王』30。をみよ。——これと同じ刑罰がローマにもあって、「インファミア」（名誉剝奪）あるいは「トリブ・モヴェレ」（氏族より追放）という言葉であらわされた。ティトウス・リヴィヴェレリウス・マキシムス、II、9、6。

Ps-Asconius 版オレリリ P103。『ローマ法典』liv. III, tit, 2。ディオニシオス(XI, 63)は「インファミア」を「アティモン」と訳し、ディオ・カッシウス(XXXVIII, 13。)は「トリブ・

モヴェレ」を「アティマゼイレ」と訳している。(同上：287)

〔桜井 悠美〕

5 リッヒテンベルク

本稿使用書は、Lichtenberg, R. F. von, Haus,
Dorf, Stadt: Eine Entwicklungsgeschichte
des antiken Städtebildes, Leipzig, 1909.

リッヒテンベルクは家と村と都市とを相関的に取りあげ、原始社会からローマ帝国の崩壊までのエジプト・メソポタミア・クレタ・ギリシア・イタリアの発展を観察しており、人間の歴史的発展の中で、都市の成立を社会的分業の発展の帰結として捉えようとする基本的見地に立っている。この点について彼はこう述べている。

「住民数の増加とともに需要が増大するにつれて、城砦のそばにより豊かな生活を可能にする集落に、次第に分業が発展した。即ち一方ではある人は相変わらず耕作しており、他方では他の人には一つまたは二つ以上の手工業に専念し、報酬を求めて他人のために働き、それによって自分の生活費を儲けた。こうした集落の拡張と住民の職業分化の中に、われわれは都市発生の経済的原因を見ることができよう。海や水路や人通りの多い道路のところに好都合にも存在した集落は、徐々に村から都市へと変化した。同じことは今日でも現われている。

しかし古代においては政治関係の方がより重要であった。古代史全体の中で注目すべきことは、都市はひとりでに成立したのではなく、誰か強力な人の意志にその成立を負っており、すなわち実際にはある一定の時点で準備された構成物として建設されたということである。かかる都市建設は全古代を通じてオ

リエントでもヨーロッパでも通例であった。」(Lichtenberg 1909 : 147-8)

このようにリヒテンベルクの都市論は、東洋と西洋に共通な都市発生論の上に立ちながらも、そこには大きな違いがあったことを主張し、「アジアの大国家においては、とくにエジプトにおいては、都市建設は全く支配者の恣意的な行為であった。……しかしギリシアにおいてはこれと全く異なっていた。ここでは都市建設は集住(Synoikismos)すなわち多くの小共同体の集合によって、しかも政治的な目的のために、おこなわれた。」(ibid.:148-9)と述べており、東洋の専制国家と古典古代的都市国家の構造差が都市発生の違いを生み出していることを示唆している。これは東洋と西洋を対比的に捉える西洋近代市民階級のつくりだした伝統的な考え方に沿った考え方であり、今日までの古代都市論の主流をなす考え方であるといえることができる。

〔太田 秀通〕

6 ファウラー

本稿使用書は、Fowler, W.W., *The City-State of the Greeks and Romans: A Survey Introductory to the Study of Ancient History*, London, Macmillan and Co. Limited, 1919.

ファウラーはギリシア・ローマの都市国家をポリスという概念で表わし、両者の差異の基礎にある共通性をつかみ出し、共同体と個人と国家の相関関係から歴史を動的に捉えようとしている。都市国家に固有な内紛・党争も、都市国家の衰退もこの見地から捉える。

「初期の村落共同体の四つの主要な性格は、全成員の血縁関係、評議会と首長による統治、土地の共同体、共通の崇拜、である。」(Fowler 1919 : 33-34)

「もし村々の統合が、地縁の観念が血縁の観念にとって代るにつれて、より可能にされたとすれば、実際に統合を促進した動機、あるいは統合を暗示した事情はいかなるものであったと想像されるか。われわれは二つの動機を判別することができる。そしてここではそれに満足しなければならない。すなわち、(1)自衛の必要、(2)ある宗教的崇拜の顕著な中心地の評判、である。この二つは多くのばあいともに働いたであろう。」(ibid.: 43-44)

「われわれは、この国家形態〔ギリシア・ローマの都市国家ポリス〕に自然に伴う内的・有機的なものとして描いてもよいこの疾病〔党争(stasis)を指す〕の影響のもとで、感情と行動の統一性が消滅する傾向が生まれたこと、またそれに伴って、ギリシアの最良の時代におけるギリシア的なすべてのものと結びついている若々しい健康と美の大部分が衰えたことを見た。」(ibid.: 274)

「国家の古典古代的形態は、領域を附属させた都市として描かれた。市民は便宜上の首都をもつことになった地方の住民であるのみでなく、都市共同体(City-Community)の成員である。この定義からつぎのことがでてくる。真の都市国家は余りに大きな領域をもってはならない。何故なら領域が大きくなればなるほど、住民が都市共同体の成員権を真実に実現することはそれだけ少なくなるからである。国家のハートであり生命である都市からずっと離れて生活している人々は、この国家生活に適当に参加することができなかつたし、また彼らが属している有機体の脈搏を感じるができなかつた。彼らは国家の成員としての利益からはなれる自分自身の利益を發展させようとするようになるだろう。こうしてポリスの真の生命の本質的な事実である個人と国家の一致が完全に実現されることは少なくなるだろう。また都市国家の人々に

も一定の限界がなければならない、ということにもなる。何故なら、一般に大人口には大領域が必要であり、大領域が完全な統一の実現に不適であるならば、同じように大人口も完全な統一の実現に不適であるであろうから。」(ibid. : 275)

〔太田 秀通〕

7. ロストフツェフ

Rostovtzeff, M. (1870-1952), A
History of the Ancient World, 2 vols.,
Oxford, the Clarendon Press, 1920.

社会経済史家ロストフツェフは、この書物の中でオリエント・ギリシア・ローマの古代社会を古典古代社会と本質を異にするものとして対比的に捉えている。両社会における都市の構造と機能のちがいを考える上で、こうした社会構造のちがいについての考え方や研究の成果は、重要な意味をもってくる。

「東洋の王国が出現してから3000年の間の政治的文化的発展を概観するに当たってわたくしは、一度ならず、それらを西方の制度とくにギリシアの制度からあれほど鋭く区別するところの政治的社会的経済的な根本的差異を示してきた。西方では一定のタイプの社会的政治共同体(ほとんどが至るところで同一で、細かな点でだけ異なるところの)がしだいに形成された。こうした政治体の起こりは、東方においても世界の他の部分においてと同様に、特殊な部族組織と緊密に結びついている。この部族組織はしだいに都市に成長し、そして都市は同時に国家となるのである。しかし東方ではギリシアとは反対に、小領域をもつ都市はその政治的独立を維持できず、あるいは多かれ少なかれ民主

的形態の自治に立脚する制度を創出することができないのである。すでに述べた原因によって、これらの個々の都市国家の権力は王個人の手に集中された。そしてこれらのさまざまな王の主な目的は、一つの中央集権的な大王国をつくることできるように、多数の都市を自分自身の王笏のもとに結合することであった。この統一は一般に単一の民族の枠内で、すなわち同じ言葉を話し、同じ神々を崇拝する氏族の群の枠内で確立された。

この統一の枠内で政治的社会的経済的枠組の基礎が据えられる。そして基礎が一度据えられると、それは、これを案出した氏族よりもより恒久的かつ実体的であることが判明した。起源も信条も異なる民族による長期にわたる国土の占領に結果するところの外部からの征服と攻撃のため、住民の支配階級は変化するが、その基礎的枠組は不変である。こうしてバビロニアでは、シュメール人からセム人へ、セム人からカッシート人へ、カッシート人からまたもやセム人とエラム人へ、次いでセム系アッシリア人へ、そして最後に印欧語族のメディア人とペルシア人へ、といった権力の移動は、シュメール人によってはじめて形成された国家の枠組にはほとんど変化を与えなかった。これはまた異なる人種の住む外国領土の併合によっても変らなかった。そしてわれわれはエジプトにおいても同一の現象を見る。

王国や共同体を一つの全体に結びつける紐帯は、第一に宗教であり、第二に宗教と緊密に結びついた王権である。王権は初めから絶体的形態をとり、無制限かつ神聖で、天に対してだけ責任があるのであり、臣民には盲目的服従を要求し、軍隊と役人と祭司とに依存する。」(Rostovtzeff 1926 I: 143-144)

「農業が経済生活〔古代東方の〕の基盤であった。工業と貿易は神殿と王宮のまわりに集中した。支配貴族、王の近衛隊、商人、工匠が王と神のすぐそばに住み、神殿と王宮のまわりの居住地を、防壁で守られた都市に変えた。神と王に支配される都市国家は、全東洋ことに西アジアにおける政治生活の最古の

萌芽であった。都市の中で、同じ職業同じ社会階層の人々の間に、例えば近衛兵、役人、祭司、職人、商人の間に、一定の統一が成長した。これらのものは主として宗教を基盤にして一種の連合団体を形成することがあった。……国家権力の眼から見れば都市は一定の地域の中心であり、支配勢力の居住地である。歴史の進行過程で成長したいかなる権利も王を縛るものではない。そしてこの点が東方の帝国をヘレニズム王国やローマ帝国から区別する根本的差異である。東方では都市住民によって支えられる自治の伝統がなかった。アッシリアやペルシアの王は、ある都市に住む人民の主権の相続人ではなく、自らも神たる王であったところの前王の相続人であった。」(ibid.:148-149)

「ギリシアの政治組織は地理的ならびに経済的諸条件によって規定された。自然はギリシアを小さな経済単位に分け、ギリシアは大きな政治の体制を創り出すことができなかった。エーゲ文明の優勢な間もそうであったし、その後も依然としてそうであった。それぞれの河谷は自己完結的で、その住民は嫉妬深く自分の牧地と耕地とを守った。……生活のタイプは至るところで同じであった。血縁集団やその一部が自己の独立を嫉妬深く守る政治的小単位を形成する。彼らは生命財産を攻撃から守るために、丘の頂上に城壁をめぐる避難所を建設する。それがしだいに都市に変化する。都市は彼らの生産物に市場を与え、宗教生活の中心を与え、王や戦争指揮者や祭司に住居を与える。都市は、田舎に散在する離れ屋や小屋か、あるいは村にいっしょに集って住むところの農夫や牧夫の居住する大小の領域の中心となる。かかる都市国家が確実に増加する。……これらの古いギリシア人の共同体の経済的社会的政治的体制はホメロスの詩に描かれている。」(ibid.:181-183)

〔太田 秀通〕

8 グロツツ

本稿使用書は、Glottz, G. (1862-), La
cité grecque, 1928.

グロツツはクーランジュが古典古代を一括して問題にしたのに対して、ギリシアだけを専門的にとりあげ、いろいろな側面からギリシア史の実体に迫ろうとした。この書物はグロツツのギリシア史構想の基本を示すもので、簡単にいうと、ギリシアを、国家と個人が氏族制度を破っていき、個人がついに国家と矛盾するに至る過程として捉えるのがその特色だといえる。彼は古代ギリシアの最も著しい特徴、その偉大さと弱さとの根本的原因を、それぞれが国家を構成する無数の都市に分かれていたことに見出し、ギリシアの最高の知性もポリス以外に人間のための組織に値するものを見出せなかったとし、その原因を自然的条件に帰することは誤りであり、歴史的事情がこれと結びついていたとしている。そしてこの点からアリストテレスとクーランジュの都市論を批判している。

I アリストテレスとクーランジュの批判

(1) 両者の要約

「『政治学』の著者〔アリストテレス〕によればギリシア人は3段階を通過した。最初の共同体(communauté)は、それがまさに自然であるが故にあらゆる時代に存続するのだが、夫と妻、主人と奴隷の結合を基礎としていた。それは同じ机で食事をし、同じ祭壇からの煙を吸ったすべての人、すなわち家族あるいは家を含んでいた。家族から群をなして出て植民するとそこに村ができた。村の住民、家族の子たちと孫たちは、一人の王に服従し、王はより大きな氏族において、原始的氏族の最年長者にあったすべての権利を行使した。最

後に、多くの村の連合から、完全な国家、完全な共同体、ポリスが形成された。それは人が生きるためにつくられ、よく生きんがために存続したが、自給自足である間だけ存在し存続した。それ故に都市は自然の産物であり、それに結実した先行の綜合体と同様であった。そして、家族の中でのみ自らを發展させるはじめる人間が、なぜポリスの中でのみ完全な開花に到達することができるかを説明するものは、まさにそれである。それ故人間は生れながらにして《政治的存在 (un être politique)》なのである。

比較史的方法の厳密な使用によって、『古代都市』の著者〔クーランジュ〕は、現代において、ある点では上の考えと異なるが全般的には類似した結論に到達した。すなわち彼は制度の説明を原始信仰に、死者と聖なる火の崇拜に、簡単にいえば家の宗教 (la religion domestique) に求める。それは、広い意味での家族、ギリシアのゲノスおよびローマのゲンスの形成原理であった。共通の祖先を崇拜する義務は、家族の存続を確実にする義務を伴い、結婚を主宰する規則に、所有の法に、相続の法にその本質的特徴を与えた。これはまた、神聖な先祖の直系の子孫の中の最年長者たる家父長 (le père de famille) に絶対的な權威を与えた。それがすべての道德の基礎であった。経済的ならびに軍事的な性質の必要が、つぎつぎに、家族を兄弟団に、兄弟団を部族に、最後に部族を都市に結合させた。宗教は人間社会の発展に追従するであろうが、家の外の神々と家の神々とのちがいは、その崇拜の広がりすぎなかった。今や公共の火があり、都市には、全制度に浸透する一つの宗教がある。王は何よりもまず最高神官であり、王位を継承した役人は本質的には聖職者であり、政治的權威の源は宗教的機能であった。法とは高所からの命令でなくて何であったか。愛国心とは都市的敬虔でなくて何であったか。追放とは交際からの排除でなくて何であったか。神聖な力が国家の万能をつくり出したのであり、個人の自由の要求は神々への反逆に等しいものと見なされた。このように構成された都市においては、氏族の首長たちは特権階級を形成し、

彼らは王に抵抗しうる地位にあり、彼らのまわりに庇護民として集ってきた人々、とくに外国人の子孫である平民大衆を威圧していた。こうした排他的な権力は、一連の革命をひきおこすこととなった。最初の革命は王から政治的權威を奪って、宗教的權威に制限した。しかし貴族層の首長たちは自分の氏族の内部では各自依然として本当の一人支配者であった。第2革命は氏族制度を変革し、長子相続法を廃止し、庇護民制度を消滅させた。第3革命は平民をも都市の内部にひきいれ、私法の原則を変え、統治においては公共の利益を優越させた。しかし1時は富の權威が生まれ力の權威にとって代ったようにみえた。そこで民主的な統治の規則を確立するために第4革命が必要となった。都市はそれ以上に発展することができなくなり、富者と貧者の間の闘争が都市の破滅をもたらすこととなった。哲学者の批判は、いかにこの体制が狭いかを指摘しはじめ、ローマの征服はこの都市制度から一切の政治的性格を奪いとり、最後にキリスト教が、精神の中で普遍的觀念の勝利を確実にしあらゆる統治の条件を永遠に変えた。」(Glötz 1928: 2-5)

(2) その論評

グロッツはこのようにアリストテレスとクーランジュの都市論を簡潔に要約し、さらにこれに論評を加えて次のようにいう。

「人はフュステル・ド・クーランジュの立てた偉大な構想を称讃せずにはいられない。詳細にわたっての正確さと文体の明澄さとが思想の豊かさと結びついている。にもかかわらず、今日では彼の緒論のすべてに同意することはできない。われわれはここに彼の比較史的方法の小心な使用を非難しようとは思わない。なぜなら、一部はわれわれがそのような方法をこの書物で全くとらないからであるが、それだけではなく、実際に、『古代都市』が公けにされた時にはモンテスキューの時代以来誰もこれほどの優越をもってこの方法を使った人はいなかったからである。彼の傑作が与える誘惑に対して自制しなければならぬのは別のことがらについてである。彼が氏族から兄弟団へ、さらに部族へ、

都市へと移っていくにあたって、この歴史家は、自分では否認するとしても、原始的集団において観察される信仰と慣習とを、より大きな集団へと、単に移しているだけであって、それらはより広い範囲に拡充されているだけで同一である。彼は、冷静な論理をもって、それを展開して一連の同心円の中心に家族をおくのである。しかし人間社会はそのように発展するのではなく、それは幾何学式紋様ではなくて生きた存在であり、その生きた存在は根本的に変化する限りにおいて存続しその同一性を維持するのである。実際においては、ギリシア都市は、家族制度を維持したままそれを消耗して成長することができたのであり、それは、原始的集団において、原始的集団が押えていた個人的なエネルギーに訴えねばならなかった。都市は長い間にわたって氏族に対して戦わねばならなかった。そしてその勝利のひとつひとつは、家父長制的隷属を抑圧することによって獲得されたのであった。こうしてわれわれはフェステル・ド・クーランジュの大きな誤りを見つけるのである。彼は、19世紀の自由主義学派において支配的だった理論に合せて、都市の全能と個人的自由の間の絶対的矛盾という観念をうち立てたが、実際はその反対に、公権力と個人主義とは、歩調を合せ、相互に支えあって進歩したのである。

したがってわれわれが眼前に見るのは、家族と都市の二つの力ではなく、家族と都市と個人との三つの力であり、この三つはそれぞれ交替して卓越した。こうしてギリシア国制史は3つの時代に分けられることになる。

第1の時代では、都市は、古来の権利を嫉妬深く守りすべての成員を集団的利益に屈服させている家族から成っていた。

第2の時代では、都市は、解放された個人の援助に訴えることによって家族を服従させた。

第3の時代では、個人主義の過度が都市を破壊し、拡大された国家の形成を必然的とした。」(ibid.: 3-6)

II グロッツの立場

グロッツの立場は、ポリス世界の形成を歴史的事情と自然環境の結合において捉えようとする立場であるから、地理的唯物論ないし環境決定論に反対するとともに、アリストテレスやクーランジュのように自然環境を考慮にいれないことにも反対する。さらにグロッツは、アリストテレスやクーランジュの構想が余りにも整然としていることを批判し、歴史はそうすっきりしたものではないとして次のようにいっている。

「われわれは、アリストテレスからフュステル・ド・クーランジュに至るまで、都市の起源が純粹に論理的な仕方と考えられていたことを見た。残念ながら問題はそれほど単純ではない。歴史は一直線を辿るものではない。生き、苦しみ、戦い、そしてさまざまな必要に服従している人間に関する限り、真理は常に複雑である。そして、もし説明しようとしている出来事が、直接的な記録を何ひとつ残していない時代、すなわちエーゲ世界のすべての地域において人種と文明が混淆した民族移動の環境の中でおこったとすれば、人は、観念と慣習の伝播、発展曲線の中における人を囁す不規則性、恐るべき逆もどりに続く飛躍的進歩を、予期しなければならない。」(ibid.: 6)

(1) 都市の起源と構成要素

こういってグロッツは史実に即して都市の起源を検討した後、ギリシア都市一般の要素と特徴について論じ、都市の起源は暗闇にかくされているが、少なくとも都市が存在する以上は、歴史家はもう少し明瞭にその構成要素を見ることができるとして次のように述べている。

「都市はまず第1に守衛(se défendre)が必要である。都市はその始源から、敵軍や海賊団に脅かされた時に田園の人々が避難することのできる丘をもっていた。それはほとんど常にひとつまたは複数のアクロポリスをもっていた。さらに下町の発展は、通常、もっと広い空間を容れる城壁の構築を必要とした。われわれは叙事詩の中に、塔や道路に開いた門のある城壁にかこま

れたasty(町)を見る。アリストテレスが、アクロポリスの防衛体制は王政と寡頭政に便利で、民主政は平地の城砦を好むと主張する時、彼が何をいおうとしていたかを人は知る。歴史時代になってからも、城壁のない都市が少なくなかったことは疑いがない。」(ibid. : 22)

「アクロポリスと城壁の存在が明らかにする相互防衛の必要は、古代におけるすべての社会的機能がそうであるように、宗教的形式に表現された。すべての都市はすべての家族と同じようにそれ自身の神をもっていた。血族が家の炉の祭壇の前に集ったように、市民は《共通の炉》(koine hestia)の前でポリスの祭式を祝った。ここで、神々の加護を人々に下さるように訴えるための犠牲が供えられ、そこで公式の饗宴が開かれて、犠牲獣の肉が都市の長老や高官や評議員、およびこの名誉に値する市民や外国人の間に分配された。長い間共通の炉は都市の最高神官たる王の宮殿におかれていた。……王政が倒れると、女神ヘスティアの名で崇拜された共通の炉は、都市の首長または首長たちや当番評議員たちが寝起きする建物から分離されることはなかった。それが都市館〔ブリュタネイオン〕の中心になり、ヘスティアがその守り神であった。オリュンピアの廃墟に立って人は入口で小さな神殿を想像しなければならない。——その中央には燃えさかる木に満ちた祭壇があり、奥には宴会の広場とすべての必要な道具を備えた台所とがある。ブリュタネイオンのない都市はなかった。『ブリュタネイオンは都市のシンボルなり。』ティトゥス・リウィウスはそれを断乎としてpenetrable urbis(都市の内奥)とよんだ。アッティカが多くの小都市に分かれていた時代には各都市がそれぞれブリュタネイオンをもっていたが、それが単一の都市になったとき、それは単一のブリュタネイオンをもった。それはアルコーンが王をそこから追い出した住居であり、しかし王が部族王とともに古風な判決をいい渡すためにそこにもどってきた住居であった。植民市が建設される時はいつでも、移民は母市の炉から、新しいブリュタネイオンに燃やされるはずの燃えさしをもっていった。……ブ

リュタネイオンから遠からぬところに、評議会の開かれる *Bouleuterion* (評議会議事堂) があった。都市の政治体制がいかなるものであれ、評議会はなくて済ませるわけにはいかない機関であった。かつては長老や評定者として王をとりまいていた偉い人々が、統治の主脳となった時、彼らが共通の炉で当番評議員によって代表されているだけでは十分でなく、彼らの評定に適した会場がさらに必要であった。……都市の国制によって人民全体が何らの政治的権利を行使しなかったり、反対にすべての政治的権利を行使したりしたが、その国制のいかんにかかわらず、人民全体が集合できるということが常に不可欠であった。アゴラとよばれたこの会合のために、公的な場所が必要であり、それがまた同じアゴラの名でよばれた。それは何よりもまず市場であった。アリストテレスはこう述べている——『ほとんどすべての都市においては、各人が相互の必要を満足させるためには売買が必要であり、またそれが都市にとって自足する最も手近かな方法であって、その故に人々是一个の共同体に結合したもののようである』と。それ故に商業のために特設された場所は、またもアリストテレスによれば『海外または本国の内部から来る商品にとって容易に近づきうる』ものでなければならず、それが供給のために与える商品は、通常、リュタネイオンを市場の近くにひきよせるのである。例えばプリエーネの発掘がこの主張を確認している。しかし市場はたんに商業取引のために存したわけではなく、商人や顧客にまじってお喋り屋やのらくらものがいた。1日中そこは人々が屋外でぶらつき、新しいニュースを知り、政治を論じ、世論が形成される集会所であった。それ故アゴラは、全市民の集合に役立つように、すなわち王や貴族の指導者たちによって政府の決定を討議するために招集された民会でも、主権者たる民会の討議のためにも役立つように設計されていた。軍営をなす軍事的都市でも同様であった。』(*ibid.* : 23-26)

(2) 都市国家と市民

さらにグロッツは、アクロポリス、リュタネイオン、ブーレウテリオン、

アゴラをもつ首都がしばしばその領域内に港をもっていることを特色としてあげ、それに加えて市民がフラトリアや部族に分かれていたことをギリシア都市の顕著な特色のひとつとして数え、これらの構成要素から成る都市が同時に国家であったことを指摘し、その領域の狭さ、人口の少なさを例をあげて説明し、都市国家の市民には自由の観念が旺盛であったとして次のようにいっている。

「独立の情熱が都市を——それがどんな小さな都市であれ——主権国家たらしめた。2つの隣接する都市をとってみよ、すべてが両国をへだてていた。2つの領土の限界を示す神聖な境界標は、宗教・法律・暦・貨幣制度・度量衡および利害と愛情の間に、ほとんど越えることのできない境界線を引いている。古代ギリシアの偉大な数世紀において祖国とは何であったか。言葉自体がそれを示している。それは、共通の祖先、同じ父をもつ人々を皆結びつけている一切をいい表わしている。祖国のもとの言葉である *patria* とは、小アジアでは常にそうであったように、まず第1に氏族のことであった。それは、例えばエリスのばあいのように、しだいに拡大されて、通常フラトリアとよばれるより広い集団になり、そして最後に、何処でも、すべての小範囲の社会を呑みこんだ共同体、すなわち都市があった。それ故ギリシア人の愛国心とは、今日のわれわれの眼からみれば、故郷愛のようにみえるが、それはより限られた対象に向けられたので、より熱烈で深い感情であった。丁年になった *éphēbe*〔ギリシア語の *ephēbos* に由来し、18才に達して2年間の軍務につくことになる青年を意味する〕が市民たるの宣誓をおこなった時、彼はその思想と血のすべてを都市に捧げたのであった。彼がその肉体と靈魂とを捧げるのは、ある抽象に対してではなく、彼が日々眼前に見ている具体的なあるものに対してである。祖国の聖なる地とは、家族の屋敷であり、祖先の墓であり、全所有者に分配された耕地であり、木材を伐り家畜を連れて行き蜂蜜を集めた山であり、自ら供儀に参加した神殿であり、行列をつくって登ったアクロポリスであった。それは人が愛するすべてであり、誇りに思うすべてであり、各世代が受けとっ

たよりもより輝かしいものとして次の世代に残すことを願うものであった。単一の、そしてしばしば小さな町、ヘクトールが死を賭して走ったのはこれのためであり、スパルタ人が《第1線で倒れること》を《徳》の冠と考えたのはこれのためであり、サラミスの勇士たちが勝利の歌を歌いつつ敵艦に突入したのはこれのためであり、ソクラテスが徳への尊敬から毒人蔘を飲んだのはこれのためであった。

都市という小宇宙の境界を出るやギリシア人は外国に、しばしば敵国にいることになった。そんな観念が恐ろしい結果を生んだ。」(ibid.:35-36)

こうしてグロツは都市同盟の失敗とギリシア人の分裂状態を述べた後、結論的に「だが少なくとも都市の自治は多くの利点をもっていた。各都市は固有の相、固有の個性、固有の命をもっていた。各都市は、その国制と法律により、その宗教と祭典により、その記念碑と英雄により、ひとつの共通の文明の経済的・政治的・道徳的・知的原則の解釈と適用のすべての方法により、この文明に対して無限に多様な表現を与えることに貢献した。実り多い競争心は経験を増殖し、模倣の中で独創性を勇気づけ、あれほど小さな共同体のすべての潜在力を実現するために、個人の精力のすべてを呼び起こした。」(ibid.:38)

(3) 都市の民主政

グロツのギリシア都市論の大要は以上の通りであり、以下第1部貴族政都市、第2部民主政都市、第3部衰退期の都市が本書の内容をなしている。その詳細に入ることはここでは必要でないが、前記都市論をより明確にすると思われる部分について触れておくのが便利であろう。グロツは民主政都市を描くにあたり、紀元前6世紀末までのギリシアの政治的進化を概括して次のように述べている。——「都市は個人を家父長制的隷属(*servitutes patriarcales*)から解放することによって強力になったのであり、個人は都市の保護のもとに自由になったのであった。しかしこうした結果があるところでは成し

とげられた後、公権力が世襲的特権の維持に成功した大氏族によって掌握された都市もあったし、また公権力が解放された個人の全集会に帰属した都市もあった。貴族政都市や寡頭政都市に対抗して、人民の声が人民の主権を捉えることのできる都市がおこった。」(ibid. : 137)

グロツはペリクレス時代までのアテネ民主政の進展を概観し、この時代の民主政の性格にふれてこういっている——「その民主政は、極端民主政さえも、——もしわれわれがそれを現代的な視点から判断するならば、たまたもしわれわれが民主政の原理ではなく民主政によって利益を受ける人間を考えるならば——ギリシア都市においては一種の貴族政以外のものではなかった。アッティカにおいては市民は少数者であった。彼らとならんで、少なくとも同数の奴隷と、半数に近い在留外人とが住んでいた。」(ibid. : 149)

Ⅲ 都市の衰退

(1) 頽廢の状況

グロツの見解によれば、最盛期のギリシアにおいては、公権力と個人の権利の間に幸福なバランスがあったが、それはいつまでも維持されることはできなかった。個人主義(individualisme)は、これまでは、都市が家父長制的氏族に勝つことを助けた後は、小家族の堅い組織と国法とによってしばらくの間は抑えられていたが、やがては利己主義(egoisme)へと頽廢し、ますます増大する欲望によって、家族を掘り削し、都市を破滅させることになった、というのである(ibid. : 345)。この衰退期の現象を、大都会における結婚危機、遊女の支配、人口減少、人口の都市集中、美術・文学における新しい傾向、など生活様式とイデオロギーにおける変化によって説明した後、グロツは、社会生活と政治生活における変化に論じ進み、貨幣の力の増大がモラルを破壊し、農業を商業化したとし、小農民の追い立ての増大(l'éviction progressive des petits paysans)と分割地の集中(la concen -

tration des parcelles)) によって大所領できるほどになったとし、
富が社会的価値の尺度となったとし、紀元前4世紀における資本主義の発展に
触れて、「衰退する都市では、国庫の窮迫と資本主義の発展とは、人口の大部分
への貧困の拡大という結果を生み出した。農民は額に汗して働いても、生きる
に足るほどのものを手に入れることができなかった。都市では自由労働が奴
隷制の競争によっておしつぶされた。……数千のアテネ人は、プラトンが述べ
たような不幸な状態、すなわち『都市に住みながら都市のいかなるカテゴリー
にもふさわしくない、商人とも工匠とも呼ぶわけにはいかない、また騎士とも
重装兵とも呼ぶわけにはいかない、ただ貧しいまた赤貧のというほかない』と
いう状態にあることを自認したかもしれない。……このプロレタリアから、た
えず、すぐにも反乱の叫びに変わりうる呻き声があげられていた。こうした無
一物の人々のパーセンテージは驚くべき規則性をもって増大した。紀元前431
年ごろ彼らは42000を越える市民中19000から20000を数え(約
45パーセント)、355年ごろには過半数になり、40年後には21000
の市民中12000を数えた(57パーセント)。』と述べ(ibid.: 366
-7)。

こうした貧民の窮状を、イソクラテスなどからの引用によって描き出し、こ
うした群衆を外国に送り出しても無駄で、常に新手が代りに現われたとし、さ
らに次のように述べている。

「往来にひろげられる悲慘は都市の恥辱であった。それは民主政が誇ってい
た高貴な原則をびしゃりと打消すものである。市民という称号は、実際は、食
うものとして何ひとつない人々に対する衰れた慰めにすぎなかった。彼は政治体
制が自由と平等の上に築かれていることを確信していたし、貧困はそれから免
れようとする人々にとっては恥でないことを確信していた。だが、閑暇をもて
るだけの財産家だけが国事に参加できるような自由とは、いったい何であるか。
財産を自由にできるそれらの人々に労働者を隷属させる平等とは、いったい何

であるか。自由だと？それは弱いものと強いものにとって同じ価値ではない。強いものは自由によって極度に富み、弱いものは自由によって全くおちぶれて、それ故に自由は自らを破滅させ、平等を破壊する。それ故全く形式的な権利に対して、人を欺く現実が反対している。主権者とよばれるこの平民(dēmos)の中に、主人に隷属し、寡頭政下の農奴よりもみじめな一種の奴隷制にしばられた多数者があったのである。主権者たる民衆(people-roi)の大部分にとって、民会に出席し、評議会や法廷に坐することは、義務の履行や権利の行使というよりもむしろバンをかせぐ手段であった。政治理論と社会体制の間の何たるコントラストか、」(ibid.: 368)

(2) 結論的に

グロッツはさらにこの時代の階級闘争を論じ、プラトンの理想国家論を批判し、結論としてギリシア都市の終焉に説き及び、紀元前338年のカイロネアにおけるマケドニア王フィリッポスの勝利とコリントにおける全ギリシア同盟の形成を、ギリシア都市の終焉と捉えている。その理由は、ギリシア都市がこの時以後自身でなくなり、外国の従属国になったことにおかれている。ここで彼は、このことはよかったのか悪かったのかと自問し、19世紀末以来ドイツの学者たちはマケドニアの勃興を積極的に評価し、ギリシアに一定の地域統一をもたらしたことから、ギリシア文明を広汎な世界に拡大したことを重く見て、デモステネスに反対してフィリッポスに味方し、弁護士共和国〔アテネのことを弁論家たちの共和国として軽蔑したドイツ語からの借用、l'Advokatenrepublik〕に反対して軍事王政に味方した、と批判し、その1人Lenschauをあげ、彼が、ギリシアに火と剣をもって国民的統一を強いたマケドニアをもちあげて「権力の意志を称えること、より高い権利によって政治的権利の侵害を正当化すること、国民的政策を世界政策に拡大しようとしているわれわれの時代のような時代が、それ自身の特質をフィリッポスとその光栄ある息子の事業の中に見出して、自らを無条件にマケドニアの側に立たせることは、

当然である。」といっていることを指摘し (ibid.:449), ここにはわれわれの求める客観的基準はないとしている。そしてデモステネスをアテネと民主政のための戦士としてとらえたとともに、人道主義などの点でヘレニズム時代は決して進歩とはいえないことを実例をもって示し、結論として次のような評価を下している。

「ギリシア文明が、小都市から大王国へと移ることによって、広がりでは得るところがあったが価値においては失ったという確かなしるしを人は確認する。アテネは全ギリシアを壮大な解放の事業に導きうるどころの政治的かつ社会的改革のプログラムを辿っていた。奴隷制の必要性についてではないにせよ、奴隷制の正当性そのものについては、すでに疑問が感じられていた。進歩は立案され目標は見えていた。しかしマケドニアのファランクス〔重装歩兵密集部隊〕がすべてを捕えてしまった。勝利者がとった最初の措置のひとつは、奴隷解放の禁止であった。アテネはその使命を完全に果たす前に倒れてしまった。人身的自由についてのアテネの高貴な法によってアテネは例外であった。……それ故、決定的な闘争において、進歩を代表するものはマケドニア人ではなかったし、またアテネ人は、カイロネイアの敗者たちが、マラトン・サラミス・プラタイアイの勝者たちよりも、祖国の精神的遺産を守ることにおいて失敗したということとはなかったということを、宣誓することができる。」(ibid.: 459-60)

〔太田 秀通〕

9 ウォールバンク

本稿使用書は、Walbank, F. W., *The Decline of the Roman Empire in the West*, London,

ウォールバンクは古典古代社会の中心的な制度を都市と考えており、ローマ帝国の没落をこの都市の衰退と関連させて捉えようとしている。都市を支える中産階級、奴隷制、技術的水準の低さなどを相關的に理解している点は、都市を全社会構造の中で捉えようとするわれわれの目的から見て、十分参考にするべき観点を提示するということができる。

「古典古代文明の最も典型的な制度である都市は衰退していた〔ローマ帝国後期の時代について述べている〕。都市の中産階級はTyne 川からIndus 川に至るまで、Tagus 川からDnieper 川に至るまでギリシア・ローマ文化を運び、またバクトリアの平原やフランスの河谷に一群の都市をつくって植民したが、その都市はすべてギリシアやイタリアの古い都市の描写であり、周囲の農村の下層階級や農民を搾取する中心でもありまた工業や有用な活動の蜂の巣に等しかつたと公正に認めよう。また都市の中産階級は、そのあらゆる欠点（実際それは多かったのだが）にも拘らず、われわれが今日古典文明の中で最も価値ありとするほとんどすべてのもの——すなわちアッティカの演劇、ヘロドトス・トゥキュディデス・ポリュビオスの歴史、ギリシアの彫刻と神殿、科学的概念の最初の熱心を模索、プラトン・アリストテレス・エピクロスと思弁（極めて片意地なばあいでは華麗な）、カトゥルスやウルギリウスの詩、ルクレティウスの高貴な現代攻撃、タキトゥスやユウェナリウスの諷刺、ローマ建築の勝利とローマ法の壮大な構成——の傀儡であつた。この中産階級は今や彼ら自身の創造物である帝国の要求の前に急速な退却を余儀なくされていた。」（Walbank 1946: 44-45）

ローマ帝国の衰退の原因は何か一つの特徴に求めらるべきではなく、すなわち気候や土壌や住民の健康や、あるいは衰退の実際の過程においてそれほど重要な役割を果たした社会的政治的要因のどれか一つにさえも求めらるべきでは

なく、むしろ古典古代社会の全構造の中に求められなければならない、ということをおれわれのこれまでの分析は示した。ついに決定的であることが判明した矛盾ははじめて出現しはじめた時期は、紀元200年でもなければ紀元前27年におけるアウグストゥス＝カエサルによる元首制の樹立でもなく、むしろアテネが自らの創造した中産階級民主政を維持拡大することができないことを明らかにした紀元前5世紀である。アテネの失敗は都市国家の失敗の縮図であった。都市国家は、奴隷労働の基礎の上に、あるいは農民層を含む同じような社会集団の搾取の上に築かれ、華々しい少数者の文明を生み出したのであったが、はじめからそれは頭でっかちであった。その市民の過失のためではなく、都市が勃興した時と所との結果として、都市は甚だ低い技術水準に支えられていた。これをいうことは自明の理をくり返すことである。アテネの精神的達成とアテネの貧弱な物質的財貨とのパラドシカルな対照は、長いあいだ、豊かな物質的遺産は自動的に文化生活の豊かさを保証するものではないということを見出した幾世代もの称讃的としてもちあげられてきた。しかし、奴隷制なしで済ますことを考えることさえ不可能にし、そして奴隷制を家内労働という無害な範囲から鉱山や仕事場〔エルガステリオンを指す〕——そこでは奴隷制は、社会の諸矛盾がいよいよ表面化するにつれて、いよいよ強力なものに成長したのだが——にまで広げることをおもひなくしたのは、まさしく、ギリシア・ローマ社会がうち立てた業績に比較して低いこの技術水準であった。」

(ibid.: 67-68)

「大ざっぱに言えば、都市国家は、まさにそれが少数者の文化であったが故に、侵略的・掠奪的になる傾向があり、都市国家の自治の要求は、あらゆる機会において、気づかぬうちに、他人を支配することの要求へとすべりこんでいった。そのことが戦争へと導き、戦争はこんどは新たな奴隷を生み出す多くの奴隷源の中に重要な位置を占めることになった。奴隷制は成長した。そしてそれが生産のさまざまな部門を侵略するにつれ、それは不可避免的に、科学的関心の低下

と、手を使う階級と心を使う階級（後には心を使うことをやめたが）との間の分裂（前述）へと導いた。こうしてこのイデオロギーの分裂は、共同体の諸階級への真の分裂を反映する。そしてそれ以後は、どんな犠牲をはらってもこの階級社会を維持することが、プラトンやアリストテレスといったような都市国家の最も賢い子たちの最高の仕事とさえなるのである。」（*ibid.* : 68）

「物質的には、増大する奴隷制の結果は、新しい生産力の解放が社会の根本的変革に十分な規模では確実に行なわれないということであった。貧富の懸隔はますます著しくなり、国内市場は萎縮し、そして古典古代社会は貿易と人々の衰頹、さらには階級戦争の消耗をこうむった。こういう因果連鎖の中に、ローマ帝国の勃興は寄生的首都という新しい要素をもちこんだ。そしてそれはヘレニズムの制度をイタリアに拡げ、イタリアでは、帝国の拡大と、比類を見ない規模の支配と平行して、農村の貧窮化が進んだ。こうしたすべてのことから、帝国の社会生活の典型的な発展すなわち、工業の分散化と自給自足的農業への逆転が起こった。そして最後の試みは危機を回避することであり、あるいは少なくとも破滅から救いうるものは何でも救おうとすること——それもひるむことなき抑圧と官僚制的国家の機構を十分使ってそうすることであった。こうした傾向についてはわれわれは既に分析したのでここにくり返す必要はない。重要な点は、それらの傾向がいっしょになってそれ自身の論理をもつ一つの因果連鎖の中にはまりこむということであり、またそれらは古典文明の基礎を諸前提すなわち絶対的に低い技術と、これを償うための奴隷制度との結果であるということである。ここにローマ帝国の衰退と没落の真の原因がある。」（*ibid.* : 69）

〔太田 秀通〕

10 アブジェフ

本稿使用書は、Awdijew, W, I., *Geschichte des Alten Orients*, Berlin, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, 1953.

古代オリエント社会を世界史の発展段階にどのように位置づけるかという問題は、いわゆるアジア的生産様式論争の重要な問題の一つであるが、アブジェフのこの書物は、古代オリエント社会を未発達な奴隷制社会として位置づける立場から書かれている。その前提は、古典古代社会を発展した奴隷社会と規定する古代社会論である。このこと自体に問題があることは当然であるが、ここには古代専制国家のもとでの都市の形成および都市の内部構造の特徴がどのように捉えられているかを、エジプトを例にとってここに示すとともに、フェニキア都市をどのような性格のものとして捉えているかを示す部分を引用しておく。フェニキアの海岸都市の性格は、古典古代の都市国家の性格を考えるばあいにも、比較史的にみて重要な意味をもってくるからである。

「部落共同体が徐々に解体すると、その結果村落共同体成員の著しい部分は、自由な手工業者、商人、土地と奴隷の大小の所有者といったさまざまな大衆から成るようになった。

手工業と商業の発展は都市の成立と成長を助けた。依然として現物経済が支配的であったとはいえ、中王国〔エジプトの〕の時代には、新しい都市と同じように行政と経済の中心地が成立し、その中で社会生活の新しい形態が現われた。Fayum のオアシスの近くの発掘は、Sesotris II のもとに建設されたこのような都市（Kabun）の遺跡を明るみにひき出した。ここに王は一つのピラミッドを立て、このまわりにたちまち一定の計画にしたがって創造された一つの都市が成立した。一般に直線の道路が直交する規則的な幾何学的形

式が優勢であった。都市全体は煉瓦の城壁でかこまれた。住宅の範囲と内部の配置は、明確な社会階層を明らかにしている。この都市には、富裕者とならんで、典型的な都市中間層たる手工業者や小商人が住んでおり、貧民はみじめな小屋に住んでいた。都市の西部に比較的小さな平面（ $240 \times 105 \text{ m}$ ）にある貧民街には、貧民の小さな小屋がひしめきあって立っていた。このひしめきあった人間の蟻塚には狭さと悲惨さが支配していた。そして同じ都市の城壁の内側には、貴族の宏壮な邸宅が立っており、それはほとんど別荘で、しばしば大きな平面（ $45 \times 60 \text{ m}$ ）を占め、貧民の小屋の50倍も大きかった。70の部屋と回廊までもつこうした邸宅は、東部の貴族街にかたまって立っていた。この都市の遺跡には、貧民の小屋よりはいくらか大きい貴族の広大な建物には遠く及ばない小さな屋敷が発見された。これらの家には、商工業と緊密に結びついた自由な住民の中間層の一族が住んでいた。……Kabun の金持街は、一つの堅固な城壁によって貧民街から区切られ、多分王のものと思われる宮殿は特別に堅牢な城壁によって守られていた。」（Awdijew 1953：176-178）

「それ故この時代の古代エジプト社会は、人間を重ねてつくられた巨大なピラミッドを想起させる。このピラミッドの土台は、みじめに搾取される奴隷と貧民の被抑圧大衆を表現した。中間部分は自由人の中間層すなわち村落共同体の成員たる農民と手工業者から成っていた。彼らは経済的には奴隷所有者貴族に従属し、耐えがたい租税と貢納のもとで呻吟し、ほとんど完全に奴隷に零落しそうであった。ピラミッドの上部は、役人や祭司を含む奴隷所有者貴族が形づくっており、頂点には全国的宗教的暴力を意のままにして専制的に統治するファラオがいた。かかる社会秩序の永続は、働く人々の無慈悲な搾取の助けを借りた中央集権的官僚制国家の強力な装置、ならびに、王を神と宣言し、全社会体制を神によって創造され太古以来の宗教的伝統によって聖化された秩序と宣言するところの宗教的イデオロギーによって、確実にされたにちがいない。

しかし、古い氏族制度の残存物がまだ非常に強かったこの初期奴隷所有者社会には、内的な経済的結合が欠けていた。自由な住民の中間層は動揺する不安定な要素であった。そのことがまた階級組織全体の不安定を規定した。」

(ibid. : 178-179)

「フェニキアとシリアでは最古の時代には、他の古代東洋諸国におけると同じに、村落共同体秩序があった。……しかし貿易の著しい発展はすでに紀元前3千年紀には、古い村落共同体をしだいに内部的に分化させ、その緩慢な解体と奴隷制の発展に導いた。紀元前2千年紀のRas Shamraの取引書には、商人や金持や私的土地所有者さえも述べられている。このことは広汎な階級分化を推論させるものである。……エジプトとヒッタイトの国力は長い間のはげしい戦争の中で疲弊したが、このことはシリアやフェニキアに自立の国家の成立に好都合な前提をつくりだし、それらの国家は紀元前10世紀および9世紀に繁栄した。この時代にはエジプトとアッシリアは衰え、フェニキアとシリアの富裕な貿易都市を脅かすことができなかった。Byblosのほかに二つのもっと大きな貿易都市SidonとTyrosが前面に現われた。……Hiram 1世〔紀元前10世紀中葉のティルス王〕の征服政策の結果、ティルスは強大な繁栄する富裕都市となった。都市領域を大きくするために都市の東部に土が盛りあげられ、そこにヒラムの時新しい市街がつけられ、市場ならびに民会のための広場がつけられた。」(ibid. : 287-288)

〔太田 秀通〕

11 ストルーヴェ

本稿使用書は、Struwe, W.W., Geschichte der alten Welt, 1955.

ストルーヴェは第一期アジア的生産様式論争の過程で、マルクスのアジア的
生産様式なるカテゴリーは奴隷制社会の一形態であるという見解を強く打出し、
これが長くソヴェト歴史学界の一般的見解と見なされてきた。この見解は戦後
出された古代史の史料集3巻の第1巻であるこの書物の序説の部分に最も簡潔
に述べられている。現在進行中のアジア的生産様式論争とも関連が深いので、
一つの古典的な見解として見ておくことが必要であろう。彼の見解によれば、
原始社会からの社会構成体の発展は封建社会を実現するのではなく奴隷所有者
社会を実現するのであり、古代オリエント社会は決して封建社会ではなく奴隷
制社会である。彼は古代オリエント社会の基本的構造を次のように捉えている。

「古代オリエントの専制国家には、二つの異なる社会的集団に関連する二つ
の収奪形態があった。第一の形態では、同時に地代でもある貢租が農民から収
奪された。それは最古の時代に、つまり氏族貴族が部族成員たちを収奪してい
た半ば家父長制的な諸関係にまでさかのぼる。この貢租は、例えば崩壊する氏
族制度の時代でもなお、ホメロス時代の自由なギリシア農民がその王に支払っ
たものである。エジプトの王は彼の側近の人間に対し、一つまたはそれ以上の
村落共同体を財産として贈与することができた。そしてそれによって彼らがこ
れらの共同体から貢租を引き出せるようにすることができた。それはギリシア
の村落共同体が王の倉庫に運んだ貢物に似ていた。しかし次のことが強調され
なければならない。すなわち人はこの義務履行——古代オリエントの専制君主
のもとやホメロスのギリシアや王政時代のローマの村落共同体が課せられてい
た——を、ブルジョア歴史家がこれまでそうしてきたように、また今でもそう
しているように、また何人かのソヴィエトの研究者が彼らに追随しているよう
に、決して封建時代に対比してはならないということである。貢租（地代）、
すなわち自由な共同体成員から吸いあげられた『貢納』（Tribut）は、崩
壊しつつある家父長制的秩序の諸関係のもとで成立した義務履行である。

マルクスが古代オリエント社会に特徴的だと考えた第2の収奪形態は奴隷制

であって、王、神官、貴族、そしてさらには自由な『非農耕人口』の中の財産家層による奴隷の収奪であった。それは第1形態に比すれば先進的であった。なぜなら、奴隷の収奪は階級社会の諸条件のもとで成立し、その表現をまず第1に巨大な構築物ことに灌漑に役立つその建造に見出したから。家父長制的収奪と奴隷制に基づく収奪との二つの形態の並存の中に、アジアおよびエジプトの太古にすでに成立していた最初の階級社会の特殊性も横たわっている。このことから古代オリエントの社会を、半ば奴隷制に基づき半ば家父長制的な社会とする明瞭正確な定義が生じてくる。当時のオリエントにおいては先進的な収奪形態すなわち奴隷制が指導的であった。それ故われわれが、エジプトとアジアの古代に成立し、古典古代世界に先行したこの初期の階級社会を、原始的奴隷所有者社会と特徴づけることは正当なのである。」(Struwe 1955. : 10-11)

そしてエジプトやバビロニアとフェニキアの社会を対比して、前者を農業的奴隷所有者専制国家とし、後者の都市国家を貿易に基づく奴隷所有者社会としている(ibid. : 12)。さらに古代オリエントと古典古代の発展段階を論じて、「古代オリエントの原始的奴隷所有者専制国家は古典古代と密接に関係している。ギリシア・ローマの社会は他の古代世界と質的原理的に異なっているのではない。それは単に奴隷所有者的構成体の発展における最高の段階を表現しているにすぎない。前7世紀6世紀の新バビロニア帝国にはローマ型ベクリリウムの方における奴隷収奪の諸形態があったのであり、それを必ずしもローマ帝政時代にのみ考える必要はない。この見地からすれば、集团的奴隷所有を伴うスパルタを、前3千年紀はじめのシュメールの都市国家に対比することができる。それが単一の例ではない。」(ibid. : 12)とし、原始的奴隷所有者社会の特徴として、原始社会の遺物と家父長制的諸関係の要素が残っていること、アジア的共同体には個人の占有だけがあって所有がないこと、をあげ、都市と農村の一体性があり、都市が通常は行政的宗教的商業的中心であ

って、手工業が農業から完全に分化していなかったことをあげている（*ibid.* : 13）。そして前2千年紀はじめのクレタにも原始的奴隷所有者国家が成立したとし（*ibid.* : 15）。ミケーネ国家を同様だったとしつつ、ホメロスの社会はクレタ・ミケーネの国家よりもより原始的な段階を示しており、エンゲルスが未開上段と規定したことを正しいと見ている（*ibid.* : 16）。

ギリシアについてはスパルタとアテネを典型的な例として取りあげ、大体においてエンゲルスの見解に基づいて整理しているが、スパルタのヘイロータイ制度については、「形態的には農奴制（*Leibeigenschaft*）を想起させるこの種の収奪は、征服の結果であり、奴隷の収奪よりもより原始的なものであった。『奴隷を使用しうるためには人は二つのものを自由にしなければならない。第一に奴隷の労働のための道具と対象を、第二に奴隷を生かしておくに必要な手段を、自由にしなければならない。』（*Anti-Dühring*）スパルタ人はそれらを必要としなかった。彼らは武力をもってヘイロータイを屈服させ、貢納することを強制した。……ヘイロータイ（および同じような地位にあったペネスタイやクラロータイも）の収奪は後進的諸国家の社会に特徴的であった（例えばスパルタ・テッサリア・クレタ・最古のアッシリアなど）。それに比較すれば、古拙シュメールやエジプトの原始的奴隷所有者国家でさえ明らかに先進的であった。」（*ibid.* : 18-19）といているのが注目される。

アテネとローマについては、氏族制をおしのけて国家が成立した過程が概観されている。

ストループヴェの古代像全体の特徴は、古代オリエントと古典古代を同じ奴隷制社会のカテゴリーに所属させ、そのちがいは単に量的なものにすぎず、より低い段階の奴隷制と最高に発展した段階の奴隷制とのちがいにすぎない点があるが、このような捉え方には有力な批判があることも当然である。

〔太田 秀通〕

12 ウェブスター

本稿使用書は、Webster, T. B. L., *From Mycenae To Homer*, London, Methuen, 1960.

ウェブスターは最近の考古学の発達に依拠して、王宮中心の国際的ミケーネ文明の崩壊から、ギリシア諸種族の移動を経て、都市国家が成立してくる過程を明らかにしようとした。ここでは、キオスのばあいを例にとりて、アゴラーと城壁をもつポリスという概念、およびポリスの成立時期についての推定だけを示しておく。

「ヴェントリスによる線文字Bの解読はまたミケーネ時代のギリシア語の状態を示したし、また言語学者はギリシア文明の3段階、すなわち、ミケーネ文明、ミケーネ世界の王宮の崩壊から紀元前900年ごろまでの時代、および紀元前900-700年の時代に対応するギリシア語の3段階を素描することができるようになった。これらの3段階は、歴史的には、ミケーネ時代と、ドーリア人の侵入とイオニア人の移住を含む時代と、ある程度の繁栄が取りもどされ古典的都市国家が形をとりはじめた時代とに対応する。」(Webster 1960:3)

「Teos に定着した貴族たちはそれぞれ自分の塔(Pyrgos)——多分身分の低い大衆の家がそのまわりに群がっていたところの囲壁をめぐる家——を持っていた。この種の居住地についてのある観念は、ChiosのEmporioの最近の発掘からも形成されることができる。それは城壁をめぐるせたアクロポリスの中に一つの貴族の家と女神アテナの神殿があり、神殿には紀元前8世紀の初頭すなわちヘクトール王の時代にさかのぼる奉納品が伴っていることを明らかにした。そしてアクロポリスのまわりには約50の家の遺構が群がっているのが発見された。下の港のそばでは、紀元前800年以来栄

えていた他の神殿の遺構が発見された。このようにヘクトール時代のキオスは、貴族たちの囲壁をめぐらした家のまわりに群がった多数の孤立した居住地からなっていたようにみえた。約200年後の一つの碑文(Tod, I, no. 1.)は、キオスが評議会と *dēmarchos* とよばれる役人をもった発展した国制をもっており、その評議会が「民衆の」とよばれているところから多分「貴族の」評議会もあったことを示すものと思われ、また *dēmarchos*〔民衆の首長または行政区の首長を意味する〕が「王たち」とならんで挙げられている、そうした状況にあったことを示している。「王たち」と複数形が使われていることは、王はその時までには役職の一つになっていたことを示している。しかしわれわれは、ヘクトール王とこの碑文の間に横たわる200年のあいだの何時の時点でこれらの変化が起こったのか解らないし、また私の知る限り、われわれは中心にアゴラーをもった城壁をめぐらした都市については古い証拠は何一つ持っていない。しかしホメロスはそれを知っていた。スケリアはポリスとして建設された(*Odysseia* 6. 9) すなわち *Nausithoos* は都市のまわりに城壁をめぐらし、家を建て、神々の神殿をつくって、耕地を分割した。そしてそれは美しいポセイドン神殿の両側にアゴラーをもっていた。非論理的に言えば、*Alkinoos*〔*Nausithoos* の子で詩中の現在のスケリア王〕のミケーネ式王宮がこの近代的なイオニアの設計の上にのっけられているのである。』(*ibid.* : 157)

〔太田 秀通〕

13 フォーブズ

本稿使用書は、Forbes, R. J., *Studies in Ancient Technology*, 2 vols., Leiden, E. J. Brill,

灌漑と都市の発生の関係を重視する考え方の例としてフォーブズをあげておく。

「亜熱帯に適用された灌漑は、不毛の荒野と豊かな河谷との対照をきわ立たせたにちがいない。運河や排水路や貯水池の構築は大量の土を処理することを意味する。その労働は小規模のばあいを除いて小さな共同体では不可能であった。灌漑は、程よい規模のばあいにおいてさえ、共同と労働の組織化を意味していた。それ故それは緊密に結合された社会構造と権力が、権力のために、また権力によって、働く時にのみ可能となる。この大規模な処理は、賦役（*corvée*）が租税の形態をとるが故に可能であった。……それは、こうした仕事を組織し管理するための権力と役人がある国家によってのみ可能であった。灌漑と犁は収穫を高め、かくて急速に増加する人口に食料を与え、こうして最初の都市的中心（*urban centres*）が近東の河谷におこった。この人口集中は山地との交易をさかんにした。灌漑と都市の進化とは密接に関連していた。古代灌漑網の衰退は中央権力の衰退であり、運河の磨損や耕地への塩分の蓄積や重税のための人口減少や侵略者による運河の破壊は二次的原因にすぎない。」（*Forbes 1965 II: 6-7*）

「シュメールの都市国家は実際には灌漑の単位であったという印象を受ける。……都市国家の商業的神政制度は、農業に、したがって灌漑に基づくものであった。……運河と排水路の建設は王の第一の義務であった。」（*ibid.: 20*）

〔太田 秀通〕

14 エーレンベルク

本稿使用書は、Ehrenberg, Victor, Polis und Imperium, Zürich und Stuttgart, Artemis Verlag, 1965, および, Der Staat der Griechen, 2 Bde., Leipzig, B.G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1957.

(1) 都市国家の本質

エーレンベルクは古典古代の都市国家の典型としてのギリシアのポリスの本質について深い洞察を示しており、ポリスを責任ある市民の共同体として捉えるのがその基本的立場となっている。この見地からポリスの発展と衰退を捉え、またこの見地からポリスとシュメール人のいわゆる都市国家とのちがいを捉えている。まず都市国家の本質については、

「暗黒時代（前11-9世紀）については、いくつかの結果のほか何一つ解っていない。しかしそれらの諸結果は、ギリシア人の独創的精神がこの時代にはじめて現われたことを示すに十分である。好戦的貴族の指導のもとで、ギリシア人はますます町に定着していったが、その指導的貴族層は、戦争には兵車で出陣することができ、土地と家畜と貴金属をもっていた。ミケーネ時代の国家の中心が王宮であったとすれば、将来は国家の中心は都市的居住地となるはずであった。こうして現われたのがポリス、都市国家であった。これの出現は大体紀元前800年ごろとすることができる。そしてこの達成とともにわれわれは新しい時代がきたといわなければならない。……それは歴史上はじめて人間が、自由で責任ある市民の共同体の成員、すなわちポリスの中でポリスによって生きる動物 *zōon politikon* となった新しい時代を意味する。」

(Ehrenberg 1965: 24)

「ギリシア人は人類の歴史の上で最初の政治的国民であった。なぜなら彼らは国家を純粋に市民共同体（そこでは行政と政策形成がこれらの市民の権利であり義務であった）としてはじめて創造した人々だからである。」（*ibid.* : 264）

「国法上の意味でポリスとは排他的に市民国家であり、明確な市民権附与だけが、すべての非市民に存した制限を破ることができた。」（*Ehrenberg* 1957, I : 28）

（2）都市国家の発生と形態

ポリスの発生については、当然ミケーネ時代との関連で考えられており、いわゆる暗黒時代はギリシア人にとっての新しい出発として捉えられている。すなわち「いずれにせよ紀元前11-9世紀のギリシア社会は、その文化的経済的原始性によってミケーネ時代のミケーネ社会から明瞭に区別される。それは一つの新たな出発を意味していた。」（*ibid.* : 28）と述べている。それにもかかわらず、ミケーネ時代との関連については、連続の側面にも注意を払っている。それは次のような指摘に現われている。

「多くのギリシア人は、例えばアテネ人は、自分たちは土地生えぬきだと信じていた。実際には、すべてのギリシア人が、民族移動を通じて、バルカン北部の古い占住地から南方へと押しつけられたのだということは、疑いがない。彼らは波状をなして、最も早いところでは紀元前3千年紀から2千年紀への変わり目のところにこの地に侵入して、古くからいた先住民を征服または駆逐したのであった。このギリシア人以前の諸民族の政治組織については、強大な王国が成立していたクレタを除いては、何も解っていない。ギリシア人自身は「部族（*Stämme*）」をなしてこの土地に入ってきた。移動と定着の過程で、どの程度まで大部族が分裂したか、あるいは小部族が連合したか、ということは認識されていない。いずれにせよ実際に起こったことは、現存する諸部族の自立的形成、あるいはその結果おこったところの多数の政治的構造物への分裂であ

った。」(*ibid.* : 6)

「ミケーネ時代のギリシア人の政治生活においては、その文化一般におけると同様に、ギリシア的北方的要素と非ギリシア的東方的要素との結合が確認される。……ミケーネ的諸国家の中心は君主の城砦であった。これを表わす最も古いギリシア語が *polis* (*ptolis*) というのであれば、それは都市および国家としてのポリスがこの語に由来することを証明している。堅固な、城壁に守られた城砦(その中に王宮が立っていた)には、しばらく、築城されてはいないがさまざまな都市の性格を獲得した居住地が接続していた。城砦と居住地(*asty*)が宮廷生活と政治的・経済的生活の中心を形成していた。そして避難のための城砦はなかった。」(*ibid.* : 7)

「それ〔1200 B.C. ごろのドーリア人の南下に続くギリシア諸族の東方への進出〕は、それを通じてミケーネ時代のギリシア人の政治的世界が、少なくとも部分的に、その基盤と伝統とから手を切ったところの、最初のギリシア人の植民活動であった。それは植民地にしだいに成立する都市の形態を規定した。ことにギリシア人が非ギリシア人の住民のただ中において、また非ギリシアの大きな後背地の縁辺において、たいていは古い居住地に接続して定着したところの小アジアにおいては、すべては断乎として明白な都市的居住へと駆り立てた。ミケーネ的ポリスは、ここでは、狭い意味での、本来の意味での都市となった。」(*ibid.* : 7-8)

「ミケーネ時代とその王国の内的・外的衰退の後に、今や部族の秩序が復活した。諸部族がしばしばそうであったように緩やかな村落の居住形態で(*kata kōmās*) 定着しなかったところでも、あるいはむしろミケーネ時代の居住地に接続した都市(今や常に城壁のない)に住んだところでも、部族組織が決定的な意義を獲得し、それ故結局は植民市も多かれ少かれフィクションとして部族組織をひきついだ。スパルタでは(さらにエリスでも同様だったが)ミケーネ時代の住居から意識的に離れて新しい住居がおこったが、近隣の数や「村」

(Dörfer) から成る、城壁をめぐらさない場所 (Ort) は、やはり少なくとも半都市的な居住様式を意味した。それ故部族国家的上部構造の型式の下には、実にさまざまな新しい国家形態 (Staatstypen) が隠されていたのである。しかしすでにこの居住形式は、村々であろうと都市であろうと、部族の「人事的」秩序と矛盾して、それぞれの地方的自然の基礎の上に存立していた。この矛盾は、定住によって部族的関連が弛めば弛むほど、ますます強く立ち現われた。」(ibid.: 8)

彼はさらに部族組織の基底に、自由人と不自由人とから成る家族 (Oikos) を見、定住の過程で分割地 (klēros) の分配がおこったとし、オイコスの経済的基盤は私的所有たるこのクレーロスにあったと見ている (ibid.: 8-9)。

(3) 都市国家の衰退

ポリスの衰退については、次のようにその基本的な考え方を示している。

「しばしばいわれるように、紀元前4世紀には、ポリストポリス社会とは解体したというのは誇張である。しかしそれは確かに重要な変化をこうむった。本質的变化(それは他の変化を生み出したものだが)は、政治生活とポリス行政が複雑になり、たんなる市民よりもむしろ専門家を要求したということである。」(Ehrenberg 1965: 29)

「民主政国家について不平を鳴らしながら退却した貴族、国家への奉仕の刺戟と費用よりも快適で開けた生活を好む富裕な階層、日用の糧を儲けるのに忙しく国家的義務とは少しばかりの収入を意味するにすぎなかった貧民、国家を活動の場として国家を喰いものにする職業政治家、ポリスの一般的衰退を喰いとめることができなかった民主的理想主義者(それがまだ存在した限り)、これらの人々がすべて、意識せると否とにかかわらず、国家から分離された社会に貢献している。彼ら自身の内部では、たしかに、ブルジョアジーとプロレタリアートといい表わすほかない二つの階級に分かれた。」(ibid.: 136)

(4) シューメル人の都市国家

エーレンベルクは以上のようなポリス観からシュメール人のいわゆる都市国家についての考え方を明らかにして、

「例えばシュメール人の都市国家をギリシアのポリスと同じタイプのもとに見なすことは誤りである。居住形式は類似していたかもしれないが、それが存在する類似性のほとんどすべてである。……フェニキア人の諸都市はこれと少し異なっている。」(*ibid.* : 264, Anm. 1.) と述べ、またいわゆる原始的民主政の問題については、次のように述べている。

「われわれは原始的部族や他の先史社会に属する諸形態(しばしば民主政とよばれるところの)を無視する。それらの社会には直接的帰着点がなく、通常初期王政に導いた。かかる原始的民主政はシュメール人にも発見されていて、そこでは時としてもっと後になっても、地方的な王は人民の代表者と見なされることができる、とわれわれは聞かされている。この文脈における「民主政」という言葉の使い方は間違いである。」(*ibid.* : 264, Anm. 2)

〔太田 秀通〕

15 ニクソン

本稿使用書は, Nixon, Ivor Gray, *The Rise of the Dorians*, 1968.

この書物は近年の考古学の発達に依拠して、伝統的なドーリア人観、すなわち彼らは北方からギリシアに侵入した野蛮で荒々しい種族で、発展の途上にあったミケーネ文明を破壊したというイメージを破壊しようという意図のもとに書かれたものである。著者はドーリア人をミケーネ文明世界の外側にあったと

いう一般的な見方を排して、その辺境にあったとしてもミケーネ人の一部であったとし、ミケーネ文明の中心地を破壊することによってギリシア社会をより高い段階に引きあげたのだとしている。この研究に基づく著者の歴史像は都市論の見地からも興味深いものがある。すなわち、本書の終章「民主政の生みの苦しみ」において、著者は、文明成立後の東地中海周辺の発展を、① Temple-King の時代、② 聖なる保護のもとにある王の時代、③ 都市国家の時代、の3段階に区分し、この段階ごとにわれわれが今日知っている民主政に向って近づいたとしている（Nixon 1968: 152）。

第1段階は定着農業の発展と社会的分業の発展の結果として、自然に成長した中央集権国家であり、著者は、それが先行する時代からの自然の成長であることを説明して、「なぜなら、狩猟の組織、ついで農業の組織によって、人類は自然の顕現に対する霊的な説明を要求したからである。季節の移り変わり、および彼らの成功や失敗は、人間の物質的快適さにとって最も重要であった。狩猟や農業に対する季節の移り変りと、そのよい作用や悪い作用は、説明を要求していた。先史の人間は、はじめこれを「交感呪術」の中に発見し、ついで超自然力の作用という説明に見出した。前者は、部族の医術師と洞窟絵画に導き、そして医術師はついには Priest King に進化した。彼の共同体支配は、部族の医術的儀式の組織から、民族神の最高の代表者たる職務へと発展した。……この中央統制は、神殿が活動の焦点であるような都市、そして専門家がそのエネルギーを特殊な活動に捧げ、食糧を他の共同体成員の狩猟や農業から分配される神殿付属の仕事場をもつような都市の発展へと導いた。それは文明発展への巨大な一步を画するものであった。……しかし、そうでなければ約束多いはずの進化というものを台なしにしたのも、まさにこれであった。なぜなら、ものごとをやりすぎる人間的傾向は、崇拜の付属物に提供するにはあまりにも多量の富を吸いあげる中央権力に集中された絶対権力に導いたから。この慣習と伝統は聖なる法に凝集した。そして創意工夫と独創性とは神殿制度によ

って息の根をとめられ、それ故に進歩は停止した。古代エジプト文明がその顕著な例である。」(Nixon1968:152-3)

つぎの大きな前進は、Priest King 体制から、神聖な属性をもつ世俗君主すなわちKing Priest の体制への移行であり、著者はこれを、線文字B文書に描かれた状況、すなわち印欧語族の部族構成と近東の神殿組織の混合の中に見出そうとしている。彼はミケーネ的王権が宗教的側面から独立を強めていることを重く見、その官僚制と神殿組織にもかかわらず、より自由な部族制度がこれに混合していたが故に、より強固でより進歩的な社会が現出したのだと捉えている(ibid.:154-5)。

前進のつぎの一步は都市国家の成立であるが、ミケーネ帝国の滅亡の内因を王と貴族とへの富と権力の集中に見出し、ミケーネ文明を亡ぼしたドーリア人を、都市国家の形成によって民主政への一步を前進させたものと捉えている(ibid.:156-7)。

〔太田 秀通〕

16 ハモンド

本稿使用書は、Hammond, M., *The City in the Ancient World*, 1972.

この書物はメソアメリカと東アジアを除く古代世界の都市の歴史を概観したものであるが、それぞれの専門分野での研究をよくまとめている。都市概念については、何か一つの規準または規準群によって都市を他のものから区別できるものではない、という見地に立っているが、同時に、都市は住居の密集地、家族・氏族・部族の居住地や村や軍営や宗教的共同体や行政中心地とは区別さ

れなければならないという見解を示している。

「都市の起源についても、都市の現代的形態についても、多くの書物が書かれたが、それらの中には、都市についての一般的に満足のいく定義や、一般的に同意を見るような定義は提示されていないようにみえる。あるものは、出現しつつある都市の本質的特徴は、それが宗教的文化的中心として役立つということにあったと主張し、あるものは、都市は血縁に基づく共同体組織から、社会的ないし経済的階級に基づく組織への移行を表現すると感じており、あるものは都市の機能分化を、商品集散のための経済的中心としての都市の発展に見出し、またあるものは都市の機能分化を、政治的または軍事的権力の焦点としての都市の発展に見出している。都市を定義づけるには、単一の規準または幾つかの規準群では不十分である。いろいろな特徴が探し出されなければならない——それらすべての特徴の出現が都市を構成するには必ずしも必要ではないとしても、である。単なる大きさや人口密度だけでは、大きな村や町から都市を区別することができない。一般にこうした物理的証拠というものには、手工業・貿易・社会階級・あるいは中央集権的支配のような、都市の機能的側面と関係にあるのではあるけれども。また統治の統一や防壁の存在そのものが都市を示すでもない。……古代世界においては、紀元前6世紀のネブカドネザル支配下のバビロン、紀元前3世紀以後のセレウコス朝とローマ支配下のアンティオキアとアレクサンドリア、あるいはローマ帝政期を通じてのローマおよび後にはコンスタンティノーブルのように、かなりの大きさに成長した都市は少なかった。大多数の都市は、わずかに数千の住民を含むにすぎず、部分的には農業中心であり続けたのであり、その住民の多くは依然として毎日自分の畑に出かけるか、上層階級の間で所領の収入をはなれて暮らしていた。ただし都市は同時にまた工業・商業・政治・宗教・文化といった他の機能をはたしたのではあるが。そのうえ交易は、叫び声の聞こえる範囲、口頭のまたは書かれた通信をもった走り手または騎士、あるいは鏡のきらめきや輝く光の見える限度を越え

なかった。そして隊商や、とくに船は、大量の商品の移動を可能にしたとはいえ、たいていの陸上貿易は徒歩の行商または騾馬をもった荷負い行商によって、小さな荷物でおこなわれた。その結果、古代史における都市の役割は、最も重要であったにもかかわらず、少数者——多分人口の10パーセントにも満たない部分——の役割でしかなく、人口の大多数は農夫または牧夫として田園に住み続けた。これとは対照的に、進んだ現代社会は、人口の半数以上が都市生活に移ったのを見ている。

この討論のための出発点として、都市はまず第1に、その成員が、単一の統治のもとで、近隣して、建物の集合した複合物の中で生きているような、そうした共同体で、しばしば防壁をめぐらしている。しかしこの定義は、同時に多くの村々や軍営や宗教的団体やそれに類似のものをも包含することになるから、さらに進んで都市は、人口のかんりの部分が都市の内部で主な活動をし、非田園的職業に従事しているような、そうした共同体と記述してよからう。しかし修道院や、労働者の住居にかこまれた小さな工場のような、他の共同体も同様に特徴づけることができるであろう。したがって都市の第3の特徴は、少なくともその影響力を、さらにはその支配を、単に自己の自給自足を維持するに必要とするよりももっと広い地域に拡大するような、そうした共同体である、ということである。」(Hammond 1972: 6-8)

ハモンドは本書で扱う範囲を説明し、かつ研究の現段階が提起する問題を指摘して次のように述べている。

「都市の起源についての近年の研究は、広く世界中に拡がり、メソポタミアばかりでなく、メソアメリカ・ペルーや中国の黄河流域にも注意を払っている。これらの地域では、あるいは少なくとも中国とメソアメリカでは、都市は伝播によるよりもむしろ独立におこったようにみえる。それ故にそれらは、都市の出現が、いかなる人間社会においても、環境と経済と文化の適切な条件を与えられれば発展するところの、自然な段階であることを強く示唆している。しか

しここでの論議は、都市の観念を伝播させたところの相互関係や連続があったと推定される地域、すなわちメソポタミア、エジプト、インダス河谷、カナアン、アナトリア、ギリシア以前のクレタおよび他のエーゲ海の島々や沿岸、古典ギリシア、ヘレニズム世界、イタリアおよびローマ世界と限られるであろう。これらの地域における都市の歴史は、次の諸問題を鋭く提起する。すなわち、都市発生の範囲拡大を最もよく説明するのは、伝播か、それとも独立した創造かという問題。さらに、都市は気候・地理・穀物生産・水の供給といったような生態学的諸条件に対する人間の応答における自然的段階であったのかどうかという問題。あるいは、都市は人間自身における経済的・宗教的・技術的・社会的な達成を表現するものであるのかどうかという問題。」(ibid.:9)

〔太田 秀通〕

第4章 中世都市論

§ 1 都市概念論の意味

カール・ハーゼ

Carl Haase (1920-) は、ドイツ現代の歴史学者。本稿使用書は、"Stadtbe-gri-ff und Stadtentstehungsschichten in Westfalen: Überlegungen zu einer Karte der Stadtentstehungsschichten," in Haase, Herg., Die Stadt des Mittelalters, 1te Bd., 1969.

I 都市概念の諸観点

「そのような地図〔発端から現代までのヴェストファーレン地方の都市成立の層を示す地図〕を作成する場合、二つの主要な問題が解明されなければならない。

- 1 都市概念の問題。都市とはそもそも何であるのか、という問題である。

.....

- 2 第二の主要問題は時代的な層の問題である。

(1) 多様な観点

ところで、周知のように、種々雑多な都市の概念規定が可能である。最も重要な出発点からするものだけを挙げてみるならば、経済の観点からするもの、法の観点からするもの、地誌の観点からするもの、統計の観点からするもの、官庁用語の観点からするものがある。これらの定義の出発点はそれぞれ正当な根拠をもって、特定の問題設定に対しては、正当に、そして事情によっては単独で、用いることができる。しかしある地域の、一千年にわたる期間に成立

した都市の層分けの基礎とするには、どれをとってみても不十分である。

例えば、[・][・]経済の観点から都市の本質を規定しようとする、中世初期の商業・[・]経済の中心地をも都市概念に包摂することができる。しかしながら、その代りに、その性格が圧倒的に農業的だと規定される、多くの中世末期と近代の小・[・]中都市を無視しなければならない。ところがそうした場所の多くは、例えば用語的、法的には常に『都市』であったし、一般的見解では今日でも都市である。ホルスト・イエヒト Horst Jecht は……『中世都市の大きな部分、いや場合によったら最大部分は、[・][・]経済的には村落であった』ことを指摘した。経済的意味での都市の基礎にはゾンバート Sombart の定義をおくならば、確かに当を得ている。『経済的意味における都市とは、その生活維持について、外部の農業労働の生産物を頼りにしているところの、比較的大きな人間集落である』というのである。……

都市を[・][・]人口統計の観点から概念的に握えようとするれば、どのような解決のつかぬ問題が生ずるのであろうか。ゾンバートが、『都市とは住民 2000 人以上の集落である』という国際統計会議の定義を報告するとき、そうであるとすれば、今日わが国の多くの農村地方団体を都市と呼ばなければならないことが、^{ゲマインデ}直ちに明らかとなる。以前でも、多くの^{ゲマインデ}農村自治体が、住民数の上では、相当数の都市よりも大きかった。……

[・][・]地誌の観点からする概念規定、人口統計よりも地理学的なこの都市概念も、五十歩百歩である。そうした規定は、封鎖的な都市的集落様式、そして結局は防備施設といった基準に依拠しなければならないであろう。……『市民と農民を分つものは周壁だけ』という言葉は、確かに中世の集落の一部分にはあてはまるが、しかし、全部の集落にはなかなかあてはまらない。……ヴァルター・ゲルラハ Walther Gerlach の指摘するように、防備施設は都市だけに特徴的なメルクマールではない。……」

(2) 法の観点

(i) 一般的理解

「『都市』とは何かということについての最も愛用される規定は、依然として法の観点からするものである。都市とは、特別の法、特別の統治組織、固有の裁判権を備え、周辺農村とは区別された形成体だ、というのである。そこでは、ラント法とは対照的に、都市法が適用される。古い研究では、都市についてこの法概念から出発して、実際にドイツにおける都市の発端が屢々、特別の都市法の施行地域としての都市の初出と時期の点で等置される。法の観点からするこの規定は、少なくともドイツの都市に関しては、実際に決定的な核心をついている。都市研究の大きな部分が、ずっと前から、法史家によって担われたのは偶然ではない。」

(ii) ヘルシャフト的形態

「しかしながら、最近に至って、都市法の観点からする都市についてのこの概念規定に対しては、種々の異論が提示された。ヴァルター・シュレジンガー Walter Schlesinger とエドムント・シュテンゲル Edmund Stengel ……は、都市の発端をば、特別な都市法の施行地域としての都市の形成の以前、すなわちドイツについて言えば、大体のところ12世紀以前の時代に溯って求めようとする。大よそのところを言えば、その場合、結局、『ヘルシャフト的な』初期形態と『ゲノッセンシャフト的な』完成形態への都市の区分が現われる。これに近いのがジョン・ジリセン John Gilissen の企てたような類型学の研究である。『ヘルシャフト的』都市は、自由に関するジリセンの三つの状態類型の中では、管理的法規の都市 *ville de statut administratif* に近いであろう。特別法、自治、いわんや主権をもたない行政区としての都市である。

けれども、これらの萌芽は、われわれの問題設定には決定的重要性をもってはいない。19、20世紀の都市を扱う際には、場合によっては一定の意味をもつかもされない。何となれば、ヴェストファーレンにおける都市の第一の層

の成立を、われわれは……1180年に、従って法的意味における『ゲノッセンシャフツ的』組織の都市が型として形成された時代に置くからである。……

(iii) 『半都市』の存在

しかし、法的都市概念はもう一つの面からも、最近になって、疑問視された。カール・クレッシェルKarl A. Kroeschellが〔Kroeschell 1960参照〕、都市法と農村的なハーゲン法との間に如何に密接な関連があるかを示そうと企てた。クレッシェルの命題は、詳しくはなお精密な検討を必要とする。しかし、他ならぬヴェストファーレンが、まずわれわれの都市とは呼び得ない場所、そして都市と自称したこともない場所が、他の諸都市が都市法特許状として付与されるものに対応する、特許状を付与される例を数多く提供しているのである。だから、いずれにせよ、東方、例えば、マクデブルク法圏だけではなく古帝国でも非都市集落が都市と同じ法をもつことがある事実を精力的に指摘したことは、クレッシェルの功績として残る。都市の法概念は、中世末期になると、とりわけ『半都市』によって厳格さを喪失する。

『半都市』という術語の使用は、ハインツ・シュトーブHeinz Stooßによって、われわれの見るところでは極めて上手に、造語された表現をうけついでものである。シュトーブは、この半都市という術語で、ほぼ1300年から1450年の間の中部ヨーロッパにおける都市成立を支配する、一つの中世的型を理解している。『半都市に共通しているのは、ある一定の、勿論……しばしば容易には握えられない、特許状の削減、発育不全である。村落から完全都市への移行は流動的になる。』われわれは、『半都市』の概念のもとに、二種類の未発達な都市類似の集落を包括する。すなわち、一つは、初めから不完全な法乃至は別の点で不完全な性格の都市集落として計画されたもので、従ってこの場合には初めから完全な意味での都市の建設は考えられていないものである。例えば、『フライハイト』である。もう一つは、落伍者、発育不全型、発達を阻止された都市である。

都市についての一面的な法概念から出発しようとするれば、多数のフライハイ
ト Freiheit , フレッケン Flecken , ヴァイヒビルト Weichbild
つまりは法を度外視すれば如何なる意味でも都市ではない『半都市』を、都市
と呼ばなければならないだろう。ここで、そもそも『都市法』とは何であるの
か、この概念は何を意味するのかという問題につながる、からみあった問題の
全体が開示される。

(iv) 19世紀の性格変化

しかし、都市についての法概念に対しては、もう一つの異論が提起されてい
る。この概念は19世紀にはもはや適用できない、というのである。政府制定
都市法および地方団体令の登場とともに、多数の小都市は、特にヴェストファ
ーレンでは、多くは恐らく経済的考量から、その制度の基礎として政府制定都
市法ではなく、農村団体令を採用する決心をする。それとともに、それら小都
市は特別法としての都市法とは永訣する。いずれにせよ、18世紀の漸次的な
行政集中化以降、特別法としての都市法のうち多くはもはや残ってはいなかつ
た。にも拘らず、さし当ってはそうした都市をひきつづいて都市と呼ばなければ
ならないであろうし、そうした都市自体、都市を自称し続けるのである。

(3) 用語の意味論

このようにしてわれわれは、最後の、そしてわれわれの目的からすれば最も
重要な都市の概念規定に到達する。用語〔による概念規定〕である。エーリヒ・
カイザー-Erich Keyser が嘗てこの概念規定を簡潔に定式化したことが
ある。都市とは都市を自称するものである、という定式化である。これに言葉
を加えて、都市とは官庁用語で都市と呼ばれるものである、としなければなら
ない。

この概念規定は、実際、およそ考えつき得る限りでの最も説得力のある概念
規定である。しかし、これにも難点はある。まず第一に、われわれの都市の生
成の過程で決定的な時期に属する記念碑的著作は、なおラテン語で書かれてい

る。……翻訳の問題が登場するのである。……ある特定の時点において、キーヴィタース *civitas* , オッピドゥム *oppidum* , 或いはヴィラ *villa* といった名称の属性は何であるのか、キーヴィス *civis* , オッピダヌス *oppidanus* , 或いはブルゲンシス *burgensis* の属性は何であるのか。都市が人間共同生活の現象形態としてなお生成の過程にある限り、一義的概念的な区別を要求することもできない。漸く12世紀になって、この生成過程は、同時代人の一般的意識にとって都市とは何であるかということに関する観念が形成される程度に、完結した。……しかし同時に、『都市』という現象形態の計画的な多様化が始まる。……多数の境界事例、不成功に終った建設、発育不全の企て……が見られる。だから、『都市』を自称するものをすべて都市と呼ばなければならないのか、と問うことが必要になってくる。ラテン語使用史料からドイツ語使用史料への移行に伴って、新しい問題が生ずる。……『都市』というのは、前にキーヴィタースと言っていたものと同じなのか。ヴァイヒビルト或いはフライハイトは、前のオッピドゥムと同じものであるのか。…
…19, 20世紀にとぶならば、次の問いを提出しなければならない。すなわち、歴史的遺産として『都市』の称号をもっている以外には、村落と、農村地^ゲマインデ^{マインデ}と、何らの違いもない場所をなお都市と呼んでもよいのか、という問いである。……だから、非常に単純に見え、説得力もある、用語の観点からする都市の概念規定も、結局は不満足なのである。

II 複合都市概念の要請

……一面的な都市概念は、都市についての法概念も、経済概念も、さらには地理的概念、統計的概念、用語的概念も、単独では、都市成立の層を示す地図の作成の基礎としては適さない。都市の概念規定は、単一の基準によっては不可能である。その都度、諸基準の総体が概念規定には必要なのである。……

必然的に『複合』都市概念に到達しなければならない。それは諸々の単独概

念の一面性を克服し、それらを内蔵し、従って都市を全体として把握しようとするものである。諸基準の総体だけが、都市概念を形づくることができる。…

…

(1) 複合の意味

しかしこの場合、この複合都市概念にも拘らず、幾つかの難点が生ずるのである。何となれば、今やこの諸基準の総体……がどのように構成されるべきか、ということが問われるからである。……以上で検討した概念規定あるいは基準が、具体的な一つの『都市』という形成体にすべてマッチするということは、期待すべくもない。諸々の個別基準は、われわれの〔地方の〕都市をこれまで包含している一千年の全期にわたって、役立つものではない。だから、その総体にしても役立つものではない。何となれば、この総体は、それを構成する個別基準と一緒に、変るからである。

全体としての都市は、固定した一体ではなくして、生き生きと変化し、絶えず新しい形態を生み出す一体である。だから……「複合」都市概念といえども、……構成諸要素が不変の構造をもつべきであるとするならば、例えばヴェストファーレンのような限られた地域での都市を、起源から現代までカヴァーすることはできないのである。……

都市の本質そのものが時間の経過のなかで新しい都市の成立とともに変化し、そしてそれとともに、絶えず新しい諸形態を取り入れる必要のある都市の概念も、変化する。だから、それぞれの時代に、その都度、「複合」都市概念が、単に史料状況が違うからというだけの理由によってではなく、純粋に構成的にも、組み立てなおされる。少くとも、個々の構成要素はその比重を変え、その序列は変動する。例えば、一つの構成要素として防備施設という契機をとってみると、次のことが明らかになる。この契機は10世紀以降重要性をまし、1200年頃には事実上都市にとって不可欠のものとなり、13世紀の経過中には屢々都市の設置の唯一の原因となり、それから次第に重要性が少くなり、

19世紀には一切の重みを失うのである。……

……都市の本質と概念を個々の時代の直観からその都度把握しようとするならば、個々の基準のもっている価値の序列のこの変動が、一般史の進行にその内的根拠をもっているところの、認識可能な図式に従って生ずることが確認される。幾世紀かの経過の間に、ある形成体—わけでも新しく成立した形成体—が都市と呼ばれるようにするところの規定的要素は、確認可能な、ある程度は確かな、リズムに従って変化する。例えば、司教座が都市と結びついていなければならない都市の初期には、都市は司教座によって定義することができる……。12世紀には、自治行政をもった領域法人という都市についての法概念が、防備施設のある集落という概念、および経済中心地という概念と組になって、次第に前景に現われる。1200年の頃が、都市概念が最も包括的であり、ある場所を初めて都市にする条件や基準の数が、最も多いかもしれない。それから、そうした条件は一つずつ脱落して、遂に19世紀には、無内容になってしまった『都市』という称号を引き続き用いることを承認するには、その場所が嘗て都市であったというだけで足りるようになった。

(2) 結 論

以上のことから、一つの重要な、決定的な結論が出てくる。個々の基準に基づくものであれ、諸々の基準の束に基づくものであれ、ただ一つの都市の概念規定があるのではなく、異な[・]った時代には、異な[・]った都市概念を適用しなければならない、という結論である。

そのような一連の概念規定は勿論のこと、1200年の頃の時代の包括的都市概念を内容とする、中心像を欠くことはできない。そうした一連の概念規定は先行する時代を叙述する場合には、この中心像を手がかりとしなければならないし、後の諸時代については、この中心像の諸々のメルクマールが新しい都市の成立によって次々に脱落していく経過を示さなければならない。一方では、技術時代に適合した、新しい中心像が次第に発達していくのである。……」

§2 その諸論

1 マウラー

Georg Ludwig von Maurer (1790-1872).
ドイツの政治家・法制史家とくにマルク共同体の研究で画期的な業績をのこした。主著, *Untersuchungen über das gemeindliche Leben der Deutschen seit ihrer ersten Niederlassung in Deutschland*, 12 Bde., 1854-1871。本稿使用書は, *Geschichte der Städteverfassung in Deutschland*, 4 Bde., 1867-1871。

(1) 都市の自由

「都市は村落から発生し, 都市共同体は村落共同体から発生した。故に, 初期の都市の制度とその住民の仕事は, 村落と村落住民のそれらとまったく異なるところがなかった。したがって, 初期の都市の制度は, 都市マルク制度であり, 初期都市住民の仕事は, 農耕と牧畜とであった。市場の成立と自由な取引の発生があつてはじめて, 性質が変わった。何となれば, 都市を村落から区別する自由は, その時期になってから始つたからである。自由な取引と, それに結びついた安全護送権および市場の平和とは, まず最初は自由商人にだけ認めら

れたので、自由商人の権利であった。これらの権利は、のちになってようやくほかの都市市民にも拡張されたのである。それによって、市場の平和は都市の平和となり、自由商人の権利は、自由な都市法となった。そうになって、農業と牧畜は都市市民のおもな仕事ではなくなり、営業活動が都市の栄養源となった。かくて都市は、営業活動と資本財産の中心地となり、同時に、土地所有を代表する貴族に対する貨幣財産の開拓者となった。都市というものの性格はこれにより根底から変化した。…………

したがって、都市の自由の発達の出発点は、市場の権利と市場の自由と結合した自由な取引であった。自由な取引は、国王の保護と人身の自由とがなければ存立できなかった。したがって、取引は、必然的に、安全な護送権、市場と都市の平和、免税特権、隷属の廃止と人身の自由をみちびきだした。こうして、12, 13世紀に出現したほとんどすべての都市において、一つのきわめて類似した制度が発達した。…………

以上のようにして、都市は、新しい自由と新しい権利の中心地にまでなっていた。すなわち、都市の自由と都市法は初期の民衆の自由や権利とは本質的に異なっていたのである。それは市民の自由であり、市民の法であった。しかしながら、この新しい自由と新しい権利のうちに、まったく新しい時代の芽もまた、当初よりひそんでいた。この芽が成長して、都市は新時代の先導者となり、さらに発展して今世紀にまでいたらしめられたものとみられる。」

(Maurer 1867, I: 653-657)

(2) 都 市

(i) 都市制度の発生

「一つの村落を城壁で囲むことによって、以前の開放されていた場所は、特
ブルク ヴィク ウルプス キヴィタス
設された場所、城塞地、都市、商人定住地、都市ないし市民組織となった。その場所は、そうなったからといって、初期の制度とは異なった都市制度をまだ作りだしたのではなかった。何となれば、城壁圍繞だけでは、古い諸関係はな

んら変るものではなく、したがって制度についても変るところがなかった。…
…初期の都市制度は村落制度以外のなにものでもなかった。よって、初期の村
落マルク制度は、むしろ都市マルク制度と言うべきであった。だがそれはそう
だとしても、初期の村落マルク制度から次第次第に後期の都市制度が発生した
のである。……」(ibid., I: 134)

「都市制度は、言ってみれば、都市マルク制度から発生した。初期の村落＝
都市共同体は、すなわち村落マルク＝都市マルク共同体であった。したがって、
このマルクの業務を処理するために、一つの公職の存在が必要となった。公式
の裁判所はそのことには不適であったので、それとは別の公職が求められたの
である。……マルク支配人は、すなわち共同体の^{ゲッセンシャフト}役職であった。ただ領主支
配下の共同体では領主の官職であったが、公式のものではなかった。……そ
してこのマルク支配人とそれに付随した共同体参事員とから、都市マルクにお
いても、大きなマルクにおいてもまた村落マルクにおいても、同時に、都市支
配人および都市参事会が発生したのである。」(ibid., I: 161-162)

(ii) 都市の自治

「他のすべての共同団体およびくに村落マルク共同体と同様に、都市マル
ク共同体も、そしてその名において都市参事会も、自治を保有していた。共同
団体の業務について自治がなければ、われわれの祖先には共同団体などおよそ
存在しなかった。したがって、自治の権利は都市においてはじめて形成される
にいったとか、国王ないし領主から賦与されて存在したとか信じてきたなら
ば、そして今もなおそう信ずることがあるならば、それは大きなあやまりであ
る。むしろ、都市共同体と都市参事会は、歴史にあらわれでるとともに、固有
の共同の業務について指定、いわゆる選択をする権利を保持していたことが、
見いだされる。それは、領主都市においても、また自由都市、混合都市におい
ても変りなかった。……

けれども、自治の権利は、本来は共同の業務に限定されており、古くは領主

や公権力保持者の認可が必要とされた。この共同の業務にかぎるという制限は、基本的な性質と理解される。何となれば、共同団体は、その固有の業務を処理することか当然だったからである。……

都市参事会と同様に、都市参事会の主宰者すなわち市長も、初期の地域マルク支配人と密に関連しており、直接間接にそれから発生したものである。……」
(ibid., I : 615 - 622)

(iii) 都市の機関

「とはいえ、初期の共同体支配人は、個々の都市により相違があった。一部の都市においては、初期の共同体支配人から市長が発生した。……しかし大部分の都市にあっては、初期の都市マルク支配人から都市参事員がうまれた。さらに一部の都市では、概して、……複数の個別的な地域マルク支配人にかわって、単独の共同体の役職があらわれた。……

けれども、どこでも、新しい都市参事員と市長とは、古い地域マルク支配人と深い関連をもち、後者から直接に発生したか、あるいはすくなくとも後者に完全にかわるものであった。都市参事員と市長とは、もとは、初期の村落マルク支配人と同一の地位をもっていたことになる。すぐわかるように、どちらもゲノッセンジャフト
共同体の役職であった。したがって、いずれも、本質的には公共の公職であり、大体の例において、領主の官職とは異なっていた。……都市参事員と市長とは、もともと、村落マルク支配人と異なる機能をもつものではなかった。自由な取引と市場の自由、およびそれと関連した都市的な施設と自由とが発生するにいたってはじめて、都市参事員と市長の機能も本質的な変化をみせたのである。どの例においても、その機能は顕著に増大し拡大され、そして多様な面で型態を新たにした。都市の業務すなわち初期の都市マルクの業務は、ここにいってますます営業の業務および取引の業務となり、これらの業務は都市の公職者の機能についても影響を与えざるをえなくなった。……

都市公職者の初期村落マルク支配人との関連および両者の地位と機能の類似

性はあったのだが、それにもかかわらず、都市参事会は、歴史にあらわれた最初のときから、まったく新しいものであった。……都市に新しく定住した者や、市民権を新たにえた城内家臣、従士や、その他の新しい市民が、今や同じように都市マルクの管理運営に参与できることとなった。増大する要求が共同体幹部の増大を当然としたのである。……」(ibid., I:549-552)

(2) 都市の展開

(i) その後における都市の地位

「都市は、発生以来そして今日においてはますます、全領土のうちにおいて国家およびラント王の官吏の監督のもとにある。何となれば、都市はいまは、中世におけるように、国家内部の国家ではなくなっている。都市は、もはや自由国家であろうとしてもできることではない。国家の最近の国家法により規定された裁判権と警察権は、どの都市でも、ラント王の官吏あるいは国家の委任により都市の公吏によって処理されている。しかし国家のものでない、都市経営の指令と執行および都市内部の業務の処理は、いまでもどこにおいても、自由で独立な都市の処置、したがって都市の自治政府 *Selbstregiment* にある程度は、ゆだねられている。……国家は、現在では、法律にしたがった行政運営に関する監督と、重要な事項についての承認権および同意権と、そして争いのある場合における決定権との範囲についてだが、それを法律上留保している。

以上のように、ドイツの都市はすべて、程度の差に大小はあっても自由な自治政府を今もなお維持している。……都市は、取引と産業活動とともに精神生活の中心であったし、今日でもそうである。都市は、〔国家の〕高度の政治とラントの政治の中心であり、公権力の中心点であり、かつ守備地・防衛組織として軍事力の中心点でもある。都市の国に対する影響は過去において大であったが、今日においてもなおきわめて大きい。——むしろ低下するよりも上昇している。都市の繁栄は国家の繁栄につらなる。都市の充実是全国土の充実に

はねかえってゆく。何となれば、都市の与論は国の与論だからである。だからして、自治がより自由にかつより独立に確保されゆくにともない、都市は充実されてゆき、全国土もまたこれにしたがう。何となれば、ふたたび確保された自治があるならば、都市はふたたび自分自身の主人となり自己の幸福の創造者となるからである。……」(*ibid.* , IV : 374-375)

(ii) 最近の都市の地位

「……19世紀以来ないし18世紀にはいつてからも、都市市民 *Bürger-schaften* の自由と独立は、ほとんど全ドイツにおいて失われ、せいぜい自由の外観にとどまった。都市市民はもはや召集されることがなく、市民委員会もまただいたい同様であった。ラント王の許可がなければ、それらは集会さえも許されなかった。ゆえに、都市の管理運営のすべては、市庁 *Magistrat* の手にゆだねられた。市民は、ただ従うだけであり、自己の利益のために定められたこと、いな時々は自己に不利益に定められたことに対して金を支払うだけであった。かれらは、従順ではあったがたいていは不満しかもたなかった。何となれば、かれらの市庁を見る目は、あらゆる機会に自己を圧迫し冷遇する敵というよりは、自己の上官や代理人としてだったからである。だが、市庁がその権力を手にしていたのも外観上であった。何となれば、かれらは、多くの都市では従前どおり特別の選挙によって補充され、また他の都市では都市市民のうちから長短の期間をもって、時には終身制で選挙されることもあったからである。しかしそれでも、どの場合をとっても、かれらは、ラント王の官吏またはラント王自身から認証をえなければならず、時にはラント王から任命されたこともあったから、もはや全然共同団体の公職ではなく、むしろラント王の臣下であり、時にしばしばじっさいにラント王の官吏またはラント王自身の下僕でもあった。そして非常にしばしば、とくにプロイセンにおいて、市長と参事会長の地位は、年をとり老朽した下士官連かあるいはラント王の側近のポストとして利用された。そこで、市庁自体もラント王のきびしい監督のもとにあ

ることとなり、ラント王の官吏の同意がなければ、どんな小さなことでも決定も実施もできなかった。何となれば、ある程度の自由を市庁に認めているような都市においても、この自由たるや、都市の警察と行政の執行を指示し規制するラント王の命令と指令を実行するかぎりにおいてであった。……」

(*ibid.* , IV 297-298)

[千葉 正士]

2 ベロウ

Georg von Below (1858-1927)。ドイツの歴史家、中世史の専門家だが経済史・憲法史にも著書が多い。主著、*Das ältere deutsche Stadtwesen*, 1898, 等。本稿使用書は、*Der Ursprung der deutschen Stadtverfassung*, 1892 (復刊1968)。

(i) 「市場地としての都市」

「市場の存在が中世都市制度の一つの本質的要素をなすことは、疑いがない。ゆえにいずれにせよ、都市制度の一部を市場法にさかのぼらせることができる。ただしその一部だけであるということが重要である。市場法で都市制度のすべてが尽されるわけではないのである。何となれば、市場をもつ場所は無限に多いが、そのすべてが法的意味における都市なのではないからである。古い時代にも新しい時代にも、市場を備えてはいるが農村共同体にすぎない例が無数に見いだされるのである。この事実は、(直接であれ間接であれ)市場法が同時に中世都市制度の他の本質的諸要素の萌芽であるという仮定に反論するものとして、すでに確実に証明されている。……」(Below 1968:15)

(ii) 「都市の城壁圍繞」

「市場と同様に、城壁圍繞も中世都市の一つの本質的因子である。しかもそれは独立の因子で、これを市場法に由来とするとする見解をもつ者はだれもない。……〔都市を表現する〕ことばが、〔城壁による〕防衛と都市との緊密な関連を示唆してくれる。『都市という意味は、中世高地ドイツ語の時代にはじめてあらわれたのであって、その前の用語は城 Burg であった。』それに由来して、城の人〔市民〕が生じ、都市法は城の法といわれる。……」

(ibid. : 14-20)

(iii) 「市民の公的役務に関する規律」

「中世においては、都市は、公的役務の点で農村とは異なっていた。公的役務は縮減され、都市は同様に公的役務の件についてある程度の独立の規制が可能であった。……これは、中世都市制度のまちがいのない一つの本質的因子として重要である。都市法の全体系は、この点の特別待遇とくに財政上のそれにとりわけ都市の自由であることを示している。……中世都市制度のこの要素も、その由来を市場法に求めることができない。公的役務について特別待遇を与えられていない市場地が相当多数あるからである。……」(ibid. : 21-22)

(iv) 「共同体としての都市」

「……平坦な森林や灌木地や牧野に存在した大共用地 Allmende は、原則として、一個の共同体の占有地ではなく多数の共同体の占有であったし、したがって都市共同体はこの大きなマルク共同団体から発生したなどということとはありえない。……都市は、その起源においては単一の地域共同体であった。……」(ibid. : 23-27)

「大部分のドイツの共同体は、都市制度発生のところには領主に従属していた。しかしこの従属は、共同体が領主支配にのみこまれるほどにはいたらなかった。……あらたに興ってきた都市共同体においても、まったく同様の従属があり、

市民らがそれから解放されたのも、時をへてのことでありしかも部分的で完全なものではなかった。……」(ibid. : 41-42)

しかし、「都市においては、ことがらの性質上、都市の諸関係は、農村共同体の場合とはちがった秩序づけをなされなければならなかった。農村では家屋と農地とをもつ者だけが本来的な共同体構成員であったが、都市においては家屋をもつことだけで十分だった。……」(ibid. : 56)

しかし、都市は、やがて都市市民特有の権利を発展させ、農村共同体よりも大きな自立性を獲得し、都市共同体として団体的機能を確保するにいたり、自治体機関をもって行政にあたるものとなった。

(v) 「裁判所管轄区域としての都市」

「中世の都市は、原則として、一つの特別な裁判所管轄区域をなしていた。ラント裁判所管轄区域はだいたいにおいて全共同体を包括するが、都市裁判所管轄区域は、原則として、都市共同体の境域にとまっていた。どんな小さな都市共同体も固有の裁判所管轄区域をもっていた。」⁽¹⁾(ibid. : 82)

〔千葉 正士〕

(1) 都市の要素を以上の5とするベロウの考え方は、ほかにBelow

1889にも示されている。なお、エルンスト・ハムも下引のようにほぼ同様に5要素をあげている(Hamm, Die deutsche Stadt im Mittelalter, 1935 : 3)

「中世の都市の概念は、次のメルクマールを含んでいる。第一に、都市は、地誌的に見るならば、その封鎖性と防備施設によって農村共同体と完全に区別される集落体である。経済的な意味では、都市は市場、商業交易の営まれる場所である。法的には、都市は、特別の都市裁判の施行される封鎖的な裁判区である。行政的には、都市は、著しい自立性をもち、行政機関として多くの肢体を有する^{ゲマインデ}共同体委員会、すなわち市参事会をもっている。さらに都市は、公的な、軍事的・財政的の給付および義務に

関する一連の諸特権を享受し、ランデスヘルの関税を全部または一部、免除されている。以上のメルクマールの総体が都市制度の中に総括されている。」

〔佐々木克己〕

3 ソーム

Rudolf Sohm (1841-1917)。ドイツの法学者、とくにローマ法から出発しゲルマン法・教会法の研究者として大きな影響をのこした。主著、*Institutionen des römischen Rechts*, 1883。本稿使用書は、*Die Entstehung des deutschen Städtewesens*, 1890。

(i) 都市と市場との関係

「都市制度は、13世紀に多数のドイツ都市に成立したもののだが、さまざまにことなる形で展開した発展の結果である。

法的意味における都市の発生は、常設市場地の誕生により生じた。ヴェイヒビルトのラント裁判所およびラント法からの解放、すなわち特殊な都市裁判所および都市法の形成は市場法から（その限界内において）うまれてたのである。

都市の制度は、上述のような市場制度 *Markverfassung* として存在したものであった。ただし、市場制度は、市場共同体 *Markgemeinde* の構成員のすべてを包みこんだただ一つのものではなかった。すなわち市場居住者には、この市場団体のほかになお二つの団体があり、かれらはそれらにも同様にくみこまれていた。

その団体の一つはラント裁判所の団体で、なかんずく、グラフ（城主、上級守護官）が裁判長をつとめる正統的裁判により代表されていた。……

他の一つの団体がここで問題とされるもので、ラント共同体Landgemeinde の団体である。都市共同体Stadtgemeinde は、この種の形でもっぱら市場関係事項に関与し組織されていたのである。……」（Sohm 1890:91-92）

(ii) 都市参事会の成立

「参事会Ratは、市場制度から発生した。市場法に機関らしいものとして存在していたものはただ一つ、市場裁判所であった。その理由で、参事会制度は市場裁判所制度（都市裁判所制度）から発生するほかなかった。

市場共同体は、そのトップに市場裁判官すなわち代官Schultheiszをもっていた。もっとも市場裁判官は、商業取引により繁栄をつづける都市にあっては、のちになると十分にみたされることができなかった。そこで、他の役所の存在が必要となり、参事会もうまれたのである。……」（ibid.:95）

諸都市により異なる事情と経緯があったが、「上の代官との関係で、すなわち代官に従属するものとして、参事会は誕生した。だからこそ、代官（都市裁判官）はどの都市でも新興の参事会と緊密な関係をもつことが、われわれの目にうつるのである。……

都市においては、最初にかつまったく特別に、そして市場取引の重要事項を第一の目的とし、一つの合議体裁判所が都市裁判所の機関として形成された。これが参事会であり、また、近代の裁判所の性質をそなえた最初の裁判所でもあった。（すなわち）まもなく、都市裁判所の参審員たちがあらわれて参事会としての役を演ずることとなり、さらにのち、この参事会員合議体が参審員合議体のワクからはずれてきた。そうはいっても、参事会の組織は、参審員裁判所のそれとは別であった。参審員裁判所は、伝統的な古い裁判所法にしたがっ

て組織は独任制であるのに対し、参事会は合議制であったのである。参審員合議体は、もともとは主宰者である裁判官だけに認められていた権力を執行するのを補助したのだが、参事会は……一個の全体として権限を保有し行使した。都市に発生した都市貴族は自己本位の貴族政治的統治方式をおしだし、参事会に席をえた。参事会の権力を拡大すること、同時に参事会を、最初はすくなくとも形式的だった都市支配者の権力機関から変じて共同体の権力機関とすること、これが、のちの発展におけるかくれもない目的となったのである。」
(ibid. : 99-101)

〔千葉 正士〕

4 リーチュル

Siegfried Rietschel (1871-1912)。ドイツの法制史学者で、とくに都市と市場との関係を論じた。本稿使用書は、Markt und Stadt in ihrem rechtlichen Verhältnis, 1897(復刊1965)。

「都市と市場の相違は、都市が常設的商業地であって、都市には『永久市場』が存在するのに対して、市場では、一時的に、一年のうちの若干の市場日だけに、商業が営まれる点に求められるべきだ、などと考えてはならない。……市場はむしろ、都市と同じく、もともと商業を営む人間の居住地なのである。
……

都市と市場の相違は、本当は、都市は防備施設をもっているが、市場はもっていない点に求められるべきである。都市とは、同時にブルク〔城砦〕であるところの市場のことである。都市はすべて市場である。しかし、すべての市場

が都市なのではない。都市はすべてブルクである。しかし、すべてのブルクが都市なのではない。……」(Rietschel 1965:149-151)

[佐々木克己]

5 ヘーゲル(カール)

Karl Hegel. ドイツの法制史学者、市史編纂で有名。本稿使用書は、その主著でもある、*Städte und Gilden der germanischen Völker im Mittelalter*, 2 Bde., 1891の2te Bd. これは、ゲルマン系の諸国全般にわたる考察である。

(i) ゲルマン諸国の都市の特徴

「特徴的な態様としてゲルマンの王国ではどこでも、都市とギルドとのつながりがあった。ライヒの憲法により都市に認められた地位と意義も、またそれにより条件づけられた都市の発達の仕方も、かなり異なっていた。しかし共通することは、都市の本質と淵源がゲルマンの民族性ととともに制度の一般性にもとづいて現出した点であり、そして同時に一般的文化発展との関連、すなわち諸民族間の交渉の間におこなわれた影響が、問題となる。」(Hegel 1891:501)

「都市共同体は、商人および営業者の諸組合にわかれた。それらは、旧時のギルドの制度と慣習にならったものだが、それとは別の形のものであり、形態としては弱まったギルドで、都市という自治団体 *gemeinwesen* に奉仕し、そのなかにはめこまれ、それに従属したものであった。」(ibid.: 511)

(ii) 都市共同体のメルクマール

「都市共同体は、起源は地域共同体 *Ortsgemeinde* から出ている。このことは、新都市の建設の場合にも妥当する。ただ例外である場合は、地域共同体がはじめて作られたときである。……地域共同体は、ラント領主権のもとで自由なものとしてそして土地所有権には従属的なものとして存在した。領主の城、皇帝や諸侯や教界・俗界の土地所有者などの持ち株等が、大部分の都市の出発点であった。だから城塞地 *borough* がイギリスでは今日も都市をさし、同様に城 *Burg* がドイツでは古くは都市を意味する。城は、領主の館と地域共同体とを包括し、この両者にまたがって、領主の裁判官、上級守護官、城代 *castellanus*、司祭長 *praepositus* がおかれていた。……この城の土地を基礎として、強力な諸侯の支配権が成立していたのである。

それとは別に、市場地および商業地として発生ないし建設された都市もある。

………

都市を塁壁や堀によって外からとりかこむことは、のちには城壁でもおこなわれたが、都市の本質にかかわることでもなく、また都市存在の条件をなすものでもない。……都市を城壁でめぐらすことは、のちの時代になって市民がやりだしたことである。それを作るのにとくに役立ったものは裁判の罰金収入であった。………

都市の生活も生業も営業と商業に依存していた。その点において、都市は平地の農村と区別され特徴づけられ、都市の市場取引と外来人、とくに客との商業もなりたっていた。だが、法を、そして最初の制度形式を都市に賦与したものは、都市支配人 *Stadtherr* であった。

そのはじめは、市特有の特別の裁判所管轄区域の成立と、市および市民の土地の、市域への所属であった。……都市裁判所とラント裁判所との分離は、イギリスでも、スカンジナビアの諸王国でも大陸の諸国でも、いたるところにおこなわれていたのであった。都市が免除をうけた都市裁判所をもつことと、

権利を証する唯一のものとして市民の基本権とが、都市の本質的メルクマールである。」(ibid. : 504-506)

(iii) 都市法と市民の権利

「市民の基本権は、都市法に記されている。その一つ、都市裁判官の前でのみ権利が証されることについては、すでにのべたが、もっと大事なことは、人身の自由の権利である。……

人身の自由の基本権と関連して、財産権と相続権がある。その一般原則は、都市法によってもラント法によっても、相続人のない財産はラント領主あるいは都市支配人に帰属するということである。……

刑法と罰金制度は、北欧の諸王国にあっては大部分成立していた。国王の立法による都市法も、この点においてはラント法と一致していた。一般的原則をいえば、都市にあっては、公的な罰金の一部は都市の収益に帰するということだった。……

自家用の商品に対する関税免除は、都市の商業を促進するために、しばしば市民に認められていた。……15世紀の都市法一般としては、市民の関税免除は、そのもつ特権として、とくい客とちがっておこなわれていた。

都市制度の一般的形態と~~基本~~的類型は、都市支配権と都市共同体との関係をつうじおのずから生ずるにいたったもので、領主裁判官、行政のための市民選出の委員、および共同体の市民集会である。……

一方では市民の自治に、そして他方では都市裁判所への参与にともなって、都市参事会の発生があった。参事会こそ、都市の政治的独立のもっともいちじるしい象徴である。……」(ibid. : 507-509)

「さまざまな王国や領邦において国王や諸侯がその支配権を都市について主張し、あるいは市民に及ぼしたのだが、その方法・態様は、都市の自由の程度をあらわすものであった。ただしそうはいても、現実の権力行使にくらべ法の形式面の重要性はずっとすくなかった。……」(ibid. : 515)

〔千葉 正士〕

6 ピレンス

Henri Pirenne (1862-1935)。ベルギーの歴史学者。中世社会経済史を専攻しとくに中世都市論を展開した。主著, *Histoire de Belgique*, 7 tomes, 1930-32。本稿使用書は, *Les villes du moyen âge*, 1927 (佐々木克己訳『中世都市』); *Histoire économique et sociale du moyen âge*, 1933, Nouvelle édition, 1963 (増田四郎外訳『中世ヨーロッパ社会経済史』1956)。

(i) 中世都市の意義

「都市は、9世紀の経過する間に西ヨーロッパがそこへと辿りついたところの、根底において本質的に農業的な文明のただ中に存在したのであろうか。この間に対する答は、都市という言葉に与えられる意味の如何によって違ってくる。もしその住民が農耕によって生計をたてる代りに商工業に専念する場所を都市と呼ぶならば、否と答えなければならないであろう。またもし、都市というものによって、法人格を与えられ、自己自身のものとして持っている法および諸制度を享受する共同体を理解するならば、答えは同じく否となるであろう。それに反して、都市を、行政の中心地として、また城砦としてみるならば、カロリング王朝時代も、それに続いた諸世紀が知ることになった都市と殆んど同数の都市を知っていたことが、容易に納得されるであろう。ということは、この時代に見出される都市なるものが、中世および近代の都市の基本的諸属性のうちの二つを、市民的住民と自治都市組織とを、失っていたということである。」(Pirenne 1927: 53)

「中世の都市は、12世紀に入って現われてくるところでは、防備施設のあ
る囲いの保護の下に、商工業によって生活を営み、都市を特権的な集団の人格

とするところの特別の法，行政，裁判を享受する，コミュニオンである。」

(ibid. : 185)

(ii) 中世都市の市民

「市民階級を本質的に特色づけるものは，事実，その他の人口のただ中で一つの特権階級を構成しているということである。この観点に立てば，中世の都市は，古代都市，現代都市とは明瞭な対照を呈している。古代都市，現代都市は，その住民の稠密なこととその行政の複雑なことによる以外は，他との区別がない。それ以外には，公法においても，私法においても，その住民が国家に占める地位を特殊にするものは何もない。中世の市民は，その反対であって，都市周壁の外側に住むすべての人々とは質的に異なる人間である。都市の市門や外濠を越えれば，他の世界，もっと正確に言えば，他の法域に入るのである。……市民は，聖職者と同じくまた貴族と同じく，普通法の適用を受けない。彼等と同じく，市民は特殊な身分，後に第三身分と呼ばれるようになる身分に属するのである。

……短言すれば，あらゆる点で，市民階級は例外の階級である。その上，市民階級は全体的階級精神をもたない階級であることに注目しなければならない。各都市は，言わば，自己の特権に恋々としすべての近隣の都市に敵意を抱いているところの，自己中心的小祖国を形成しているのである。⁽¹⁾」(Pirenne 1963 : 50)

(1) 訳文は訳書のものを一部改変してある。

〔佐々木克己〕

7 プラーニッツ

Hans Planitz (1882 -)。ドイツの法学者，

元来民商法学専攻だったが、のち都市制度史を研究した。本稿使用書は、Planitz 1940（鯖田豊之訳『中世都市成立論』）および、Deutsche Rechtsgeschichte, 1971。

(1) 時代的2特徴

(i) 都市君主時代の都市

「中世都市の制度史において、われわれは二つの主要な時代、都市君主の時代とゲノッセンシャフトの時代とを区別しなければならない。

都市君主の時代には、都市における司法、行政のあらゆる権力は都市君主に帰属する。10, 11 世紀がそれである。……都市君主は、司教、修道院、グラフ、その他の有力者で、彼等はその権力地位を、帝国では国王からひき出した。その他に、都市域内の自分の隷属民に対して所有権ならびに司法高権、行政高権を行使するグルントヘルが都市君主であった。農村共同体とは異な^{ゲマインデ}って、多くのキーヴィタースやカストルムでは、このような古い時代においてすでに、商工業が大きな役割を演じていた。市場と周壁、商人や手工業者の集落が存在しており、従ってわれわれは、それを、経済的意味においては、すでに都市と呼ぶことができる。商工業は当時すでに、少数の都市では大きな重要性を獲得することができ、その結果商人の団体が独自の法慣習を発達させていた。しかしながら、法的意味においては、都市君主支配下の場所はおも都市ではなく、都市君主あるいはグルントヘルの所有物にすぎず、都市君主あるいはグルントヘルの支配領域の裁判および行政区の一部分を構成する従属的存在にすぎ^{ゲマインデ}なかった。当時は、未だ、都市共同体について云々することはできず、少数の都市住民の諸グループについて云々し得るだけである。都市のいろいろの部分で、都市君主または都市のグルントヘルの隷属民や非自由民は、地域的、行政的、法的に、別々になって生活していた。同じことが、自由な住民にも、自由な土地所有者にも、しかしながら就中商人にも、妥当する。自由な商人はす

に1000年ごろには、単一のギルドに結集し、富と政治的能力によって、都市制度再編成のための運動を指導できるほどの声望を獲得した。

(ii) ゲツツヤンシャフトの時代の都市

12, 13世紀をカヴァーする都市制度史の第二の時代には、都市共同体^{ゲマインデ}の発展が生じた。そのためには、都市のあらゆる分子、自由民、隷属民、不自由民が、単一の団体に結集することが必要であった。全市民を包含する誓約団体だけが、都市君主の権力地位を根底からくつがえすに足るだけの衝撃力をもつことができた。都市宣誓団体が新しい都市制度を構築した。都市君主の司法官庁、行政官庁と並んで、この団体がそれ自身の政庁を設置した。この団体の目的は、都市君主の権力支柱を駆逐、排除し、そうすることで漸次、この団体の自治を実現することにあった。この発展の推進力は商人のギルドに由来し、そして商人のギルドは、変革の時代を経て、都市共同体内においてもその支配権をもち続けた。⁽¹⁾」(Planitz. 1940: 1-2)

(1) 訳文は訳書のものを一部改めてある。

(2) 都市の性質

(i) 法的意味における都市

「^{.....}経済的意味における都市とは、その境界内で主として商工業の営まれる空間体である。商工業従事者が都市関係事項の自治行政のために結集するとき、それは^{.....}法的意味における都市になる。中世都市は……初め、経済的都市にすぎなかった。国王ブルクに依存していた商人集落が、自己の防備施設をもった、商人と手工業者の商業地に転化する。それは、12世紀以降に、法的意味における都市になった。……」

「^{.....}それまでは」行政権と裁判権は都市君主の手中に、根本的には国王の手中にあった。……

都市君主の役人が、都市君主の代りに、都市における裁判権と行政権を行使していた。……

多くの都市は中世を通じて、都市君主の全面的支配の下にとどまった。……それには、12世紀以降に領邦君主によって建設された大抵の都市が含まれていた。しばしば、農村が都市法の付与を通じて都市に昇格したが、しかし通例は農業都市にとどまった。……

12世紀以降、西部のニーダーフランク諸都市が、都市君主の圧倒的な地位から自己を解放し、都市君主と並ぶゲノッセンシャフト的都市統治を構築するのに成功した。この運動の起動力となったのは商人ギルドであった。……

(ii) 誓約団体としての都市

……商人の指導の下に、都市住民は単一の誓約団体に結集し、誓約団体は全員を兄弟的な誠実と援助義務へと結びつけた。この運動の第一の目的は、都市の軍政を奪取することであつたに違いない。全住民が、それ故に、周壁築造義務と軍役義務を負い、その財産に応じて公的負担に参加しなければならなかった。平和団体として宣誓団体は平和秩序を樹立した。宣誓団体は団体裁判と自治行政を行なった。これらの任務は構成員集会（市民集会）の手中にあった。個々の事柄を実施するためには独立の諸機関、すなわち誓約者、あるいは都市審判人、あるいは……有力者、リヘルツェへ〔富裕者の組合〕が成立した。全都市住民の誓約団体への加入は全員に同等の法的地位を保証した。商人法が、この法的地位のモデルとなった。……誓約兄弟は相互に自由の証人にならなければならなかった。隷属民あるいは非自由民の兄弟もそのヘルに対して保護してやらなければならなかった。このようにして『都市の空気は自由にする』の原則が成立したのである — 勿論大抵は、『一年と一日の後に』という条件つきで。……

12世紀以降、帝国の北部、東部、南部で、多数の都市が建設された。その多くは、自市の市民のために、西部の諸都市で発達していたのと同じ自由な法的地位を保証することができた。……

(iii) 都市の政治的機構と機能

皇帝時代〔10世紀半ばより13世紀の半ばまで、中世中期にあたる〕の経過する間に、都市は、独立の行政および裁判区へと、自治権を与えられた政治的ケルベルシュフト〔法人〕へと、発達した。

市参事会の先駆者は、12世紀に有力者の間から出た西部の諸都市の宣誓団体員の役人、すなわち誓約者、都市審判人であった。……

都市の自治行政の核心をなすものは警察であった。この警察の最初の形態は、市場警察、とりわけ食料品警察であった。……そこから出発して、市参事会は、治安警察、衛生警察、風俗警察、救貧警察、さらには交通警察、建築警察、消防警察を含む行政権を発達させた。……その他、市参事会は外に向って都市を代表し都市印章をもっていた。

都市の財政および租税は非常に発達した。初めは貢租に二形態、……市民の間に割当てられた臨時のペーデ〔特別税〕と……食料品および商品に賦課させる間接税とがある。13世紀以降…貨幣鑄造権、関税徴収権、都市の土地所有、手工業経営から、都市に収入がもたらされた。

都市の軍政が初めから都市の所管事項であったのは、宣誓団体都市だけである。そうした都市では、軍政の出発点は市民の一般的軍役義務であった。……傭兵は中世末期になって初めて徴募された。

……教会保護者として、都市は司祭を選挙した。……都市は都市役人を通じて教会財産を管理した。

都市は初めから、独自の下級裁判区を形成していた。都市裁判所は都市内の土地所有および都市市民の自由をも自己の権限の対象とした。都市裁判所は同時に市場裁判所であった。……

ラント裁判所からの離脱を都市が達成したのは、極くゆっくりとであった。……〔結局、〕都市君主の任命するシュルトハイスが上級裁判権を掌握した。

〔以上の都市君主制の時代の裁判を前提として〕結局のところ、市参事会が裁判権を掌握することができた。宣誓団体都市には、平和命令、和解命令を発

布し、共同社会からの追放を課することのできる、団体の仲裁裁判が存在していた。下級裁判権を、市参事会は早くに取得した。……上級裁判権は、売買または質権を通じて市参事会が取得した。……」(Planitz 1971: 181-189)

〔佐々木克己〕

8 エンネン

Edith Ennen (1907-)。ドイツ現代の歴史学者。本稿使用書は、*Frühgeschichte der europäischen Stadt*, 1953; *Die europäische Stadt des Mittelalters*, 1972.

(i) 中世都市の比較的特徴

「……歴史家としてわれわれがこの問題に肉薄するというのは、方法論的に言えば、われわれがいつでも、掴み得る歴史の事実可依拠するということを意味している。われわれには、中世都市の成立を跡づけることが問題なのであって、都市一般の成立を跡づけることが問題なのではない。それ故に、われわれは、都市の一般的定義を下すことを、意識して断念する。完全に発達した中世都市が、われわれにとっては、それにかけて中世都市の一切の歴史的先行諸形態を測る尺度なのである。……

その場合直ちに、次の問題が提起される。そもそもわれわれは、単一の中世都市文化を語ってもよいのであろうか、という問題である。……われわれが、古代都市とも近代都市とも本質的に区別される一つの中世都市を語ることが許されるという意識は、多かれ少かれ明瞭且つ決定的に、これまでの研究のもっ

ているところである。しかし、研究によって苦心の末明らかになっ、この中世都市の周知の共通性ということから、中世都市が強烈な対照を内蔵していることについて、錯覚を抱くことは許されない。……類型構成的な観察の不可欠の必要性については、われわれは以前に指摘しておいた。……」(Ennen 1953:10-12)

(ii) 中世都市の概念

「都市とは何かという問いには、中世に関しては、一見したところでは、極めて容易に答えられそうである。周壁で囲まれ、家々が密集し、教会やブルク〔城砦〕の塔が高く聳えたつ都市が、コンパクトなシルエットとして、都市をとりかこむ農村からくっきりと浮びあがっている——ただつひろく広がった現代の都市集落とは正反対である。周壁は都市を要砦とするだけではない。それは、特別な都市法の——つまり都市周壁の外側で妥当するヘル身分的秩序とは対照的な広汎な市民の法の平等の——、自由な市民がその都市君主に対して共同決定、いやそれどころか自治をさえ主張する統治組織の、従って、今日われわれは勿論のこともはや都市自由を必要としなくなっているのだが、その現代の国民の平等を萌芽的に先取りしている秩序の、領域を劃しているのである。中世の都市周壁は、その特殊な社会的地位が、自由だけではなく、移動の自由と流動性、職業の専門化と多段階の分化によっても際立っている住民を、取り囲んでいるのである。都市周壁のなかに、都市当局の統制管理するこの時代の商工業経済が集中するのである。商人は都市に定住するようになり、商業網をヨーロッパ中に投げひろげ、西南アジア、北アフリカをもその商業網で結びつけた。彼等商人は、市参事会にあって都市の運命を決定し、国王や諸侯が、全力をあげても、その封臣を抑えつけ、近代的な制度国家を建設するための、彼等の支配領域を打って一丸とする意識的、徹底的な経済政策をまず遂行することのできない時代の、経済政策を遂行する。

都市の商工業生活の中心は市場で、ここでは多種多様な生産分野の交換が行

われる。市場を通じて、都市は境界線を引くことのできる周辺地域を支配し、経済生活の「中心地」となる。礼拝・文化上の、政治・行政上の空間諸機能がこの中心性を強化し、その結果、残余のすべての中心的場所が、これまた既に階層制的組織をもった中心的諸機能を有しながら、都市の後塵を拝することになる。——この空間機能 *Raumfunktion* に、われわれは都市の最も不変の本質的メルクマールの一つを掴める。

中世都市に関する以上の「質的」メルクマールを、1968年、カールハインツ・ブラシュケ *Karlheinz Blaschke* が提示している。これは、19世紀の有力な都市史家の一人、ゲオルク・フォン・ペロウ *Georg von Below* の挙げるものと大きく異なるものではなく、そして確実に、すべて正しく、歴史的に確証されるものである。しかし——われわれは歴史家としてすぐさま問わなければならない——この像は、一束の基準を一つにまとめたこの都市概念は、どの程度まで現実をカバーするものであるかを。

今日われわれが複合的で、柔軟で、固定しない都市概念を用いて仕事をし、都市とは何かということを、もはや硬直した一つの基準に従って空しく規定しようとはせず、時処に応じてその構成の変動する基準の束に従って規定しようとしていることは、少なくとも、時代的層と地域的相違とを明らかにする道を開き、それぞれの都市に固有の、置き換えのきかない個性を無視しない道を開いている。他方でわれわれは、都市史が諸都市史の総計に解消されてはならない場合には、一つの都市概念を使用する。そしてわれわれにとって基準となるのは、常に中世の都市、外的現象、内的構造と内的機能の点に関して、史料から再構成される中世の都市、専門用語として理解される中世の都市である。

最も複合的で、最も固定しない都市概念でさえも、多種多彩な外的諸現象を叙述しつつそれを支配することが、廃墟のような伝承のなかから漸くにして正確に把握できる構造を刻みあげることが、多様な諸機能を認識することが、諸機能の有効範囲を区画することが、中世の大都市と最も卓越した諸都市地域

Städtelanschaften について、生き生きとして正確な観念を与え、それぞれの相互関連を把握することが、そして発展の時代的層を際立たせることが、今や肝要であるのならば、骨組みにすぎないし、補助的構成物にすぎないのである。」(Ennen 1972:11-12)

〔佐々木克己〕

9 エーベル

Wilhelm Ebel (1908-)。ドイツ現代の法制史学者。本稿使用書は、Der Bürgereid als Geltungsgrund und Geltungsprinzip des deutschen mittelalterlichen Stadtrechts, 1958.

(i) 都市法の一般的理解

「中世都市法制についてわれわれの通例描いている像は、19世紀の憲法様式にのっとった小国家という観念に、あまりにも支配されすぎている。『近代国家の温室』と目されている中世都市は、その内部に、立憲的統治の一切の機能、権能、整備された裁判組織、立法、法律的基础をもった行政と警察、生活の全領域にわたる制定法およびそれから流出する市民および住民の権利義務を備えた、一種の市民的の小国家として思い浮べられている。15-16世紀の比較的大きい都市はこの状態に近づいているから、以上の諸観念をそれに当てはめても、表面的には、難点の生じないことは認めてもよい。けれども、そのような状態は、たとえ今日のわれわれの諸概念をそれに適用することができるように思われても、永い時間の経過のなかで、全く異質の法世界のうちに、成長したものであること、しかも都市の歴史の初期には、一般的な、古い法観念に

照応した諸基礎から、成長したものであることを誤認してはならない。……

この宣誓団体法は—H・ブラーニッツの見るところでは—ひとたび創出され
ると、〔国王の〕特許状を基礎とする前都市時代のユース・メルカートルム
〔商人法〕と並んで、生成しつつある都市法の永続的構成部分となる。13—
14世紀以降、この二重の性質をもった起源に、『ユース・キーヴィターティ
ス』、すなわち自治権（自治定立法）と都市の慣習とから発生し、属人法的効
力ではなく属地法的な効力を有し、従って都市領域内の非市民にも効力が及ぶ
ところの、そしてやがて膨大な記録にとどめられたところの、都市法が付け加
わる。これは、法生活のすべての領域、刑法、私法、訴訟法、裁判制度、営業、
警察を包括する。

(ii) 都市法の妥当根拠

以上に略述した〔ブラーニッツによる〕都市の法素材の分類は……結局のと
ころ、法の妥当範囲によるものであって、法の妥当根拠に基くものではない。
フランク時代のユース・メルカートルムは、慣習法にすぎないであろう。……
すでに述べたように、中世末期および近代の都市が真正の自治立法の観念を、
すでにもっていたというのは確実だと思われる。しかし、同じことが11—
12世紀〔の宣誓団体〕にも妥当するかどうかは、少くとも疑問である。同様
に、初期の、誓約（コンユラーティオ）に基く自治定立法と、後の、いうと
ころの誓約によらない自治定立法との間に、大きな相違があるとするのも疑問
に思われる。……誓約共同体^{ゲマインデ}は、精々のところ、その事実上の存在に関して
初めから永続的制度だと見るのであって、誓約共同体^{ゲマインデ}を通じて基
礎づけられた法的拘束力に関しては、そうではない。この法的拘束力は……絶
えざる更新を必要としたのであって、そのことは、市民の宣誓団体がすでに永
続的の自明事、ケルベルシュフト〔法人〕、自治的な法制定者になってしまった
時代にも変らなかった。宣誓団体は〔つねに〕事実上は永続的存在であるが、
しかし法的には、更新を必要とする誓約結合だったのである。……

〔ユース・メルカトールムを除いた〕本来の意味における都市法は、自治的につくられた法、自治定立法であり、従ってその原初的な概念よりするならば法律行為的性格のものであり、自らその自治的立法に参加した者のみを拘束する条件付きの自己判決であった。しかし、この本来の意味における都市法が都市で効力を有する法のすべてではなく、そしてその本来の意味における都市法も、実質的に見るならば、中世の終りきってしまったといううちに法律行為的性格を喪失し、『法律』になったのである。〕(Ebel 1958:1-5)

〔佐々木克己〕

10 シュタインバッハ

Franz Steinbach (1895 -)。ドイツ現代の歴史学者。本稿使用書は、Collectanea Franz Steinbach, 1967.

(i) 中世都市

「市民は、宣誓団体を通じて、都市共同体^{ゲマインデ}のなかで、ヘルの法およびヘルの権力からの経済的および法的独立を獲得するのに成功した。ゲノッセンシャフト的な自治と自己責任が、ヘルシャフト的な後見と保護に代って登場した。しかしそれだけではなく、市民は、都市共同体^{ゲマインデ}のおかげで、さし当ってはささやかなものであっても、一般的な政治的意義を国家のなかで獲得した。……中世盛期の急傾斜の上昇に、絶対主義時代の急激な墜落と後退が続いた。しかし、市民の政治的生命線の中断はもはや起らなかった。

……11, 12世紀の市民運動は世界史上初めて、商工業市民都市、すなわち商人および手工業者の居住地を、自主的な政治的有機体にたかめたのであ

た。商工業市民は、中世の都市共同体^{ゲマインデ}のなかで、初めて、自分の力と自主的な意志統一とから、法と権力の独立組織を創ったのであった。」

(ii) 都市の諸類型と都市人

「都市は、そして都市自治体も、すでにずっと前から存在していた。しかし、それらは全く別の社会学的機能をもっていた。……」

都市の存在は、ほぼ紀元前4000年以降、近東で実証されている。その時はじめて成立した都市的生活形態は、その『抗し得ぬ魅力』の故に、幾多の停滞、あと戻りの後に、そこから、地球の表面全体にひろがっていった。その際、絶えず新しい型の都市が成立した。……

フェニキア人の商業都市、ギリシア人のポリス、ローマ人のキーヴィタース、ケルト人のオッピドゥム、そして中世の商工業市民都市は、都市の世界史的原現象の、類型学的に明瞭な輪廓を与えることのできる諸形態であり、明確な姿をもった個別諸類型である。これらの都市は、相互に置きかえのきかない、劃時代的なその独自性にも拘らず、相互間に、また近東の古い都市との間に、起源の因果関係をもっている。都市人は、栽培者、牧畜者、農民と同じく、人類の革命的文化形態の一つである。……西欧および中欧に向って、都市文化は、その前に農民文化がそうであったのと全く同じく、第二次現象として押し寄せてきた。……

都市の概念は、中世の商工業市民都市の社会的および経済的機能だけに結びついているのではない。……商工業市民ではなく、聖職者、行政役人、戦士、土地所有者が、9、10世紀の旧市区住民の社会的指導者層を構成していた。しかし、都市的集落様式と都市的生活形態はそこにあったのだ。とにかく完全に亡却の淵に沈んではいなかったのだ。

この都市定住民の生活様式、緊急の時に都市周壁が都市定住民に、居住地を変えることなく提供した保護〔別の個所ではこれを都市の普遍的機能と呼んでいる〕が、……富裕有力な遍歴商人に強力な吸引力を及ぼしたに違いないの

である。都市的生活様式の魅力は、いつの時代にも極めて大きかったのである。」

(Steinbach 1967:782-790)

〔佐々木克己〕

11 ビューチャー

Karl Bücher (1847-1930)。ドイツの経済学者で、後期歴史学派を代表する一人である。本稿使用書は、*Die Entstehung der Volkswirtschaft, zehnte Auflage, 1917*。

「じつさいそれ〔都市〕は、中世においてもまず第一に防禦機構であり、要塞であり、そしてそのまわりはすべて強固な城壁で囲まれている。戦争の場合には、〔周辺の〕農村に住んでいる人々もその保護を受けられる。しかし、このような農村に住んでいる人々は、古代ローマ帝国のように、都市には組み込まれていない。都市は、固有の社会的制度と政治的位置をもつ。その人々は、特別な地方的行政機構（Ortsbehörde）をともなった共同体をかたちづけている。つまり、村長（Schultheisz）、陪席判事（Schöffe）、村方（Heimburge）、下級裁判職（Büttel）などの機構をそなえているのである。彼らは、貴族や、諸侯や、教団などが保持していた荘園支配権の管轄下にある。彼らは農村法や地方裁判所に服していたが、それにたいして都市には固有の都市法があり、都市裁判所がかかわっていた。都市の人々は市民と呼ばれ、農村に住んでいる人たちは農民と呼ばれる。それぞれは、お互いにはっきりと分けへだてられた身分を形成する。したがって、古代では都市が農村を組み合わせていたのに、中世においては両者が相互に独立し、対等な権利

をもって存在している。

それゆえ、古代と中世の経済的な相違に留意するなら、われわれがただ理解しうる一つの世界は、ローマ的・ギリシア的なものとはまったく異なった世界である。ギリシアやローマの都市居住者は土地所有者であり、かつ土地耕作者であって、彼はまたなにしろ奴隷や小作農を使って仕事を行なわせることができる。クセノフォンとカトーが、そのことをこう証言している。良き市民とは、また良き宮農家（Landwirt）である。このことは、中世都市の市民にはあてはまらない。ともかく彼が庭やわずかばかりの畑を耕していたとしても、彼はまず第一に生業を営んでいる者、手工業者であった。都市と農村は、経済的な機能という点で分かれていた。農村は原料や食料を生み出す。都市はその原料を加工し、領域内では生産できないものを遠方から交易によってもたらす。市民と農民は、都市にある市場で双方の生産物を交換する。一種の自然な強制のなかで、都市と周辺の農村は、分業によって自らに供給し自らを満たす閉鎖的な経済領域をつくる。そして都市には、同業者開業拒否権（Bannrecht）と市場開催権（Stapelrecht）によって、都市に有利な諸関係を人為的に強化しようとする傾向があった。都市は、手工業者は農村に住んではならないという原則（都市強制、マイル権）をうちたて、そして都市はその原則をだいたい貫き通しさえしたのである。

ゲルマン民族およびラテン民族の中世都市は、農村の内的な経済発展の自然な産物であり、住民をかりたてる商工業の地方的結合である。したがって都市は、特有の『暮らしの場』（Nahrungstand）をもっている。中世都市は、ギリシアやローマの場合のようなたんなる消費の中心ではなく、より重要な意味で商品を生産する産業の所在地である。『仕事は市民の誉れである。』（中世の）市民は、アッティカやローマの市民のように、支配下においたものからの貢物によって、あるいは奴隷や小作人の労働からのあがりによって生活するのではない。…中世都市は、都市の市場をただ手工業者の諸ツンフトだけに取

っておき、他との競争は例外的にのみ許可するのである。都市は、一市民が他の市民のように十分に生活していけるように取りはからう。

しかもその起源において、中世都市の多数は古代のそれと異なっている。このことは、われわれが知っているように、たいてい公権力の配置の帰結であった。同様に中世においてもまたみいだせるのである（ハインリヒ一世や、ヴェルフェン家、ツェーリングー家などの都市建設のことを想起できる）。しかしほとんどのドイツの都市は、なんといっても農村共同体から徐々に生じてきたのである。その都市権は、確かに君主の賦与にもとづくものであるが、このことは都市にとって従属の一つの基礎になったのではなく、都市にたいして市民的自由への道をさし示したことなのである。」（Bücher, Bd. I, 1917 : 379-381）

「〔中世〕都市はまったくの社会的形成物である。つまり、農村住民の避難・保護所であり、経済的交通の中心点であり、営業の集中する場所であり、自然経済に支配された時代の内部における貨幣流通のオアシスである。」（ibid. : 397）

「当初、〔中世〕都市の定住者は、その仕事の点に関しても決して農村部の住民とは区別されない。都市定住者は、つぎのように農業や牧畜を営む。彼らは、共同で森や水や牧場を利用する。彼らの住民は、現代でも多くの古い都市の建物にうかがえるように、納屋や家畜小屋をそなえた農家であり、そのあいだには広い中庭があった。しかし彼らの共同生活が、たいてい入会地の利用やその他の農業上の利害に尽きてしまうことはなかった。それどころか彼らは、いわば城内において恒常的に占領しているのであって、そして彼らは順番に塔や城門で毎日の警衛勤務をひきうけるのである。都市内に定住しようと思う者は、そのために、たんに土地（少くとも家）をもつだけにとどまらず、武器・甲冑をも装備しなければならない。」（ibid. : 118）

〔長沼 宗昭〕

12 オットカール

Nicola Ottokar (1884-1957)。イタリアの中世史研究者。本稿使用書は、清水・佐藤訳『中世の都市コムーネ』創文社、1971 (Nicola Ottokar, *Studi comunali e fiorentini*, 1948)。

「中世における自治都市制度の起源は、10, 11世紀の間にヨーロッパの生活形態がこうむった根深い変化との関係において考察されねばならない。中世都市は1000年ごろヨーロッパのいたるところで生じた経済活動の復興の一つの表現であり、また同時に、社会の法的・政治的組織の一つの新たな形態である。旧来の諸経済組織が、それぞれの孤立状態……から離脱していくのに伴ない、また交換が発展するのに伴ない、そして、個々の生産活動が複雑化し、したがって分業化していくのに伴ない、いたるところで新たな交易の中心地が生まれ、あるいは旧来の中心地がより強い生命をもって復興した。それらは、多かれ少なかれ広範な活動範囲と吸引範囲、再興した経済生活の動脈、常設的市場、とくに商業および工業労働に従事している人々の定住地などを伴っていた。

このような中心地は、普通、防備がよく整っていて安全な場所か、人の往来が頻繁な地点か、あるいは、その地理的位置がとくに有利な諸条件を与えている場所に発展した。……

この純粹に経済的な側面については、10, 11世紀におけるヨーロッパという世界、すなわち、北海沿岸から地中海沿岸まで、エルベ河流域からブリテン島まで(のちにこの現象は、一部はこれらの諸地域で生じたのに近い過程をへて、一部はドイツの植民活動あるいは商業的膨張によって、東方と北方へと拡大した)の全域において、中世都市は本質的に同一の形で現われる一般的現

象である。……アルプス以北の諸地域においては、法的・政治的組織としての都市は、経済的意味における都市を構成している領域と住民の世界に限定されている。別の言葉でいえば、この新たな法的・政治的組織は、周囲の世界からかれらを区別している特殊な経済活動に従事している人々だけが居住している特定の定住地にのみ広がっている。……要するに、アルプス以北のコムーネは、社会的・領域的に孤立し、都市生活の特殊な経済的性格に限定されている現象である。

他方、イタリアにおいては、コムーネの法的・政治的機能ははるかに大きく広範である。……イタリアのコムーネは、都市の特殊な経済的性格に束縛されていないし、社会的・領域的に孤立し、区別された世界でもない。それは周辺世界とのきずなを維持し、むしろその組織化と統治の中心となる。したがって、イタリアの都市はそのコンタード〔周辺領域〕を別にしては考えられない。むしろ、コムーネの形成と都市外の領域の形成とは同じ事なのである。イタリアのコムーネは、孤立した特殊な世界のように、都市の経済活動に参加していない住民にたいして社会的に対立するということはない。逆に、コムーネは、経済的・社会的にきわめて不均質な住民的要素から形成されており、都市や周辺農村部の封建貴族をも含んでいる。イタリアのコムーネの市民(cittadino)の社会的様相は、アルプス以北の都市の市民(borghese)のそれとはきわめて異なっている。

……アルプス以北の諸コムーネ(プロヴェンスと南フランスのそれを除いて)とは違って、イタリアのコムーネにおいては政治の様相が経済の様相に優越している。それは、特に都市的な(社会経済的な意味の、あるいは市民的な)組織を構成せず、都市に(都市の市民層にではなく)自らの指導と組織化の中心をもつ領域国家の形をとる傾向をもっている。

……

その商業的あるいは工業的重要性においてイタリアの大都市に劣らず、さら

に、きわめて重要な政治的要素として自らを確立しているフランス、ベルギー、ドイツのもっとも繁栄したコムーネも、決して本来の意味における真の領域国家に発展することはない。たとえ、それらが一定の領域に自らの経済的ヘゲモニーを確立し、若干の人的諸特権および商業的独占を享受したとしても、その禁制区域の狭い限界を越えて、政治的・領域的な真の権力を行使することはない。……要するに、アルプス以北の諸都市は、常にそれらの経済的特質に結びつけられているのに対し、イタリアのコムーネは、固有の意味における都市世界の領域的・社会的限界を最初からのり越えているのである。

……

事実上、イタリアの都市は、周辺農村のもっとも有力な諸勢力が集合し、結集する中心として存在し続けた。農村の封建貴族や大土地所有者たちは、彼らの封土や農村の土地に孤立して生活することはない。…これらの諸勢力が、後に都市コムーネの中核を構成することになるであろう。こうして、新たな形態において、そしてきわめて異なった基盤の上にはあるが、ローマのキヴィタス(civitas)のかつての統一が再建されていく。事実上、ある程度まで周辺の領域を統一する力を維持し続けている卓越した中心の存続が、アルプス以北の(もとより、プロヴェンスと南フランスを除く)諸国の都市史から、イタリアの都市史を本質的に区別している基本的特徴である。」(オットカール：3-10)

〔長沼 宗昭〕

13 ピグレフスカヤ

Nina Viktorovna Pigulevskaya (1894-

)は、ソヴィエト科学アカデミー会員、ビザンツおよび近

東史の研究者。本稿使用書は、彼女が他の研究者らとともに書いた、
渡辺金一訳『ビザンツ帝国の都市と農村 — 4～12世紀』創文社、
1968 (N.V. Pigulevskaya, Gorod i derevnya
v Bizantii v IV—XII vv. ; 1961, XII^e
Congrès international des études byzan-
tines, Belgrade)。

古代ローマ帝国は、4世紀末に東西両帝国へ分裂した。その後、西ローマ帝国はゲルマン諸族の侵入にあって5世紀後半に滅亡したが、東ローマ帝国は15世紀中頃オスマン・トルコによって滅ぼされるまで約千年のあいだ存続した。この東ローマ帝国は、後代ビザンツ帝国とも称されるようになったが、その正式の国名がローマ帝国であったように、あくまでも古代ローマ帝国の中世における連続として存在したのであった。この地における分裂以後の歴史は、西ヨーロッパとはかなり異質の歩みとなっていた。都市の様相もまた、同様に西ヨーロッパとは異なっていたといえる。そこで、ビグレフスカヤをはじめとする現代のソヴィエトの代表的なビザンチニストたちの報告をみていきたい。

「……4世紀から12世紀にわたるビザンツの都市と農村の相互関係の歴史を解明した結果、つぎのような結論が生まれる。

この相互関係の発展の基本線はつぎの点に存した。すなわち、都市が農村を支配するという純古代的な関係にとってかわって、農村が都市を支配するという中世的関係が出現する点がそれである。古代では都市は、ある場合には農村と政治上一体をなしていた。…他の場合には都市は、半自由人土地所有者が住むところの、あるいは非自由人土地所有者さえもが住むところの都市周辺地帯にたいして経済的政治的な支配をおよぼしていた。奴隷制生産様式の危機は、古代都市の存続の基盤を破壊した。…これらの諸条件のもとで、4—7世紀の蛮族侵入は、古代社会そのもののなかに成熟しつつあった内的諸過程を実現さ

せるうえに大きな役割を演じた。……

7-9世紀には一連のビザンツ都市は小さな農村都市、城塞、ないし行政上の中心地であった。これらビザンツ都市は、経済的な点では農村とたいして違っていなかった。初期中世の諸条件のもとでは、市民は農業にたずさわリ、荘園の手工業者は一般に封建領主の手工業生産物にたいする需要をみたした。しかしながら都市生活がこの時代のビザンツで完全に消滅したわけでない。東ローマ帝国の都市は西ローマのそれにくらべて、一層安定していた。……

商工業の新たな上昇がみられたのは、なかなずくコンスタンティノープルであった(すでに9世紀に)。これは地理的諸要因にくわえて、このまちが帝国の中心であったという事情にある程度起因するものであった。11-12世紀にビザンツ属州都市の発展はとくに顕著となった。これを条件づけたのは、手工業の農業からの分離過程が著しく進んだことである。……

属州都市の発展は、農業機構に重要な影響をおよぼし、商品・貨幣関係の拡大をうながし、その結果、地代の金納化がもたらされた。それと同時に属州における都市の成長は、コンスタンティノープルの経済的意義を低下させ、地方の小経済圏が自分自身の経済的中心をもちながら形成されていく傾向を促進した。これは、12世紀末-13世紀はじめに出現すべき、国土の封建的遠心分離化の一前提であった。

11-12世紀のビザンツ都市を政治的にも経済的にも支配したのは、商工業者のグループの上層部ではなく、地方の封建領主であり、都市の自治を握ったのも彼らであった。この点とくに、中世都市の古代都市との根本的差異がみられる。都市はいまや農村にたいして支配をふるうのでなく、農村が都市に君臨したのである。もし古代が都市から出発したとするなら、中世は農村から出発した。商工業者のグループは都市における封建的要素に反対したが敗北を喫した。この事情こそ、なぜビザンツでは都市の成長そのものが、国家の封建的細分化を促進し深化させる要因たりえたか、を説明する。

ビザンツにおける農村と都市との相互関係の社会的発展は、はげしい社会闘争のさなかで経過した。都市（なかでも都市貴族）と都市領域の半自由人住民との間に初期の段階には存在していた対立は、古代ポリスの消滅につれて消失せる。重要な役割を演じはじめるのは、土地所有者（封建領主化する貴族）と、封建的隷属にひきこまれた農民層との間の対立である。中世都市が成長するにつれて、新しい対立がますます表面化する。それは、市民と、都市にたいし支配をおよぼそうとする封建領主との間の対立である。

農村および都市における階級闘争の成りゆきは、社会的諸関係の構造に本質的な影響をおよぼした。都市の民主主義勢力の敗北は、つづく数世紀におけるビザンツの経済的崩壊の基本的一要因であった。」（ビグレフスカヤ他
1968:95-98）

〔長沼 宗昭〕

第5章 理想都市論

1 プラトン

Platon (429-347 B.C. ころ) はアテネの哲学者で
ソクラテスの弟子。本稿使用書は, Platon, Republic
(=Politeia), translated by P. Shorey, 2
Vols., Cambridge, Harvard University
Press, 1956.; Idem., The Laws (=Nomoi),
translated by R.G. Bury, 2 Vols., Cam-
bridge, Harvard University Press, 1968.。
訳文はつぎの岡田訳による。岡田正三訳『国家』プラトーン全集4,
大阪, 全国書房, 1970 (Aと略記); 同訳『法律』プラトーン
全集5, 大阪, 全国書房, 1971 (Bと略記)。

(1) ポリス (polis) 成立論

「僕が; 思うんだが, 国 (polis) が成り立つのは我々一人一人が自足状
態にあるわけではなく, 多くのものに欠けているからだ。いや国の建設に何か他
の原因があると思うかい。

彼 (アデイマントス) が; ありません。

そうするとそういう風に, 我々は多くのものを必要とするから, 銘々がそれ
ぞれ別々の用に応じて別々の人に助力を求め, 多くの人々を同じ住所に集めて
共同者・助力者にして, その同居体に国という名目を立てた。そうだろう。

まったくですね。」 (A: 51 [Politeia, II, 369 B-C])

このように, 一人一人が多くのものを欠いているが故にポリスが成立する

というのであるが、この欠けているものとは具体的に次のことをさす。

「僕が；さあそれじゃ、国というものをコトバの上で初めから作ってみようじゃないか。我々の必要が国を作るわけであるらしい。

そうですとも。

ところで生存と生活とのために食糧の供給が最初にして最大の必要だ。

まったく。

第二は住居の、第三は衣料などの供給だ。

そうです。

僕が；さあそれでは、国はそれだけの供給にどうすれば事欠かないだろうか。百姓が一人、もう一人は大工、もう一人は織屋とちがうか。いや、その他にまた靴屋とか他にも誰か身の回りの世話をする人を加えようか。

どうぞ。

そうすると必要最少限の国は四～五人から成る筈だ。

明らかに。」(A:51〔Ⅱ,369C-D〕)

こうした必要のもとに、ポリスが成立すると説くのである。

(2) ポリスの構成への見解

「アテナイの客人；君は、ねえ、クレーターの法規に通暁するように立派な訓練を受けておるらしく見受けられるなあ。それじゃもう一つこれをもっとはっきり言ってくれ。良くおさめられておる国の定義として君が規定したことなんだが、戦争で他国に勝てるように組織されて治められていなければならんと言っておるようにわしには思われるんだが。そうだね。

クレイニアース；まったくそうなんだ。この人だって異存なかろうと思うよ。

メギッロス；神的だよ、君は。ラケダイモン人なら誰だってそう答えるほかはあるまいよ。

アテナイの客人；国と国との間ではそれで正しいが、村と村との間ではそうじゃないのか。

クレイニアース；そんなことはない。

アテーナイの客人；じゃ同じことか。

クレイニアース；うむ。

アテーナイの客人；じゃどうだ。村民の家と家との間，いや個人一人一人の間でもやっぱり同じことか。

クレイニアース；同じことだ。」(B:18-19〔Nomoi, I, 626 B-C〕)

このように，国(polis)は村々から，さらに村々は家々から，家々は個人々から構成されていると考えているのは，後のアリストテレスも同様である。

(3) ポリスの人口に関する考察

「さてそれでは正しい分配の仕方はどんなことだろうか。まず彼等の人口がいくらであれば宜しいか，それが決められなければならない。またその次は国民の配分で，彼等をいくつの部分，どの位の大きさに分けるべきか，それが協定されなければならん。またそのために土地と家とをできるだけ均分しなければならん。ところで十分な人口総数は土地のこと隣接諸国のことを考察にいれなくては正しく語られたことにはなるまい。どれだけの土地があれば思慮健全な(→浪費しない)人々をどれだけ養うに十分であるか。それ以上の土地はいらない。また人口のことだが，どれだけあれば隣国が不正を加えた時に防衛し，隣国が不正を受けた時にとことん困り果てることなしに救援できるか。そのことは土地と隣国とのことを考えた上で現実と理論とをもって規定することにしよう。ここではその完成のために構想・腹案をつくる目的で，話を立法のことにすすめなければならん。

5040人でいいんだよ，適当な数としてはね，土地を所有してその配分制を守護する者は，また土地と住居もその通りで同じ数に分けて人と配分地との数があうようにしなければならん。そこでまずその総数が二部分に分けられ，

ついで同じものが三部分に分けられなければならん。その総数は元来四分・五分という風に順次十分まででできるようなものなんだよ。そこで立法を行なう者はみな数についてこれだけのことは考えていなければならん。何という数、どんな数がすべての国々に一番役に立つだろうか。それはそれ自体の内に一番多くの、しかも特に順序正しく続いておる因数に分解できる数だと言ってよからうじゃないか。総数はあらゆることのために、あらゆる分割ができるようなものになっておる。5040は戦争のためにも平和時代のことのためにも、あらゆる契約にも共同にも備えられたものだ。戦時特別税についても配分についてもそうで、59以上には分割されないけれども、1から10までの因数を兼ね備えておる。」(B:134-135〔V, 737C-738〕)

このように、5040という数をあげているが、この数字は、「なるべく何時までも5040世帯だけにとどめるような工夫をみ出させなければならんわけだ。」(B:137〔V, 740D〕)「そうしてまた最後にどうにもこうにも5040世帯の均衡が保てなくなり、共同生活をする人々の仲がよいために我が国民の過剰を来たして困る場合には、度々言って来た古い手がある筈だ。移民の送り出した。」(B:137〔V, 740E〕)

以上のごとくこの数は、常時保たねばならないものと考えているのである。

(4) ポリスの位置と構造について

「その次にまずその国のなるべく中央に、そうして他にも都市部(城)に必要なものを持っておる地点をありあわせの諸地点の中から選定して都市部を建設しなければならない。それを考えて語るのは何もむずかしいことではないがね。その次には12区を分けなければならんが、その時にはまずヘスチアーとゼウスとアテーナーとの神殿を建て、アクロポリスと名づけ、ぐるりを円形にかこんで、その外を都市部そのものも田舎全体も12区に分けるんだ。しかし12区は肥沃な土地の区は小さく、瘦地の区は大きいという風にして収獲が平等なようにならなければならん。また配分地は5040に分け、その一つ一つ

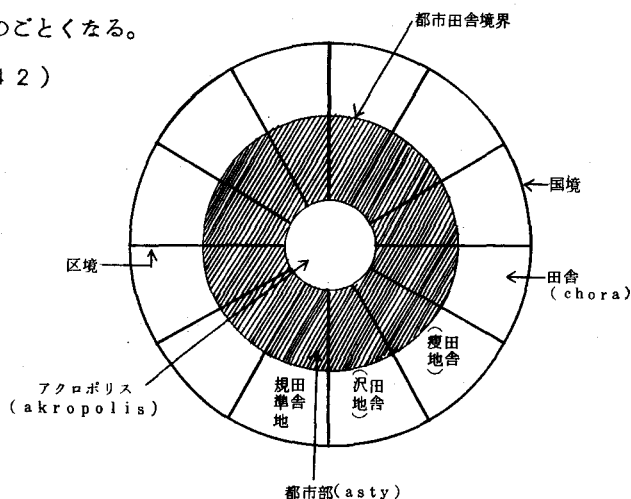
をもう一度兩分し、二部分を組み合わせると一つの配分地にならなければならない。どれも近い所と遠い所から成る。都市部に近い部分と国境にある部分とが一つの配分地になり、国から二番目にある部分は国境から二番目にある部分と組み合わせられ、その他すべてそういう風だ。またその分割に当たっても今言った土地の良否のことを考えて、配分地の広狭によって収獲を平等にしなければならない。それでまた人々を12部に区分し、配分地以外の財産はなるべく等しいように12部にまとめて、すべての財産の登録をして……そうしてまたその次に12神に12の配分地を割り当て、それぞれの神に割り当てられた地域を献げてその神の名で呼び、それをピューレー（部族→行政区）と呼ぶなければならない。それからまた都市部の12部分を田舎の土地配分の時と同じようにして分割する。したがって銘々が中心に近いのと都市部の端にあるのと二つの住居を与えるられるわけだ。こうして国家建設の仕事は終わる。』（B:142〔V,745B-E〕）

なお最後に、訳者に

よる図を引用してみる

と、右図のごとくなる。

（B:142）



〔桜井 悠美〕

2 アリストテレス

Aristotelis (384-322 B.C.). スタゲイラ出身の哲学者で、プラトンの弟子。古代最大の体系的思想家とされる。

本稿使用書は、Aristotelis, *Politica*, recognovit brevisque adnotatione Critica instruxit W.D. Ross Oxonii, London, Oxford University Press, 1964。

訳文は、山本光雄訳『政治学』アリストテレス全集15, 岩波書店, 1969によった。

(1) ポリス(Polis) 観

「国(Polis)は、現にわれわれが見る通り、いずれも或る種の共同体である、そして共同体はいずれも或る種の善きものを目当てに構成されたものである(というのは、凡ての人は、善きものであると思われるもののために凡てのことを為すからである)。だから、共同体はいずれも或る種の善きものを目ざしているが、わけてもそれらのうち至高で、残りのものをことごとく包括している共同体は、(その他の共同体にくらべて)最も熱心に善きものを、しかも凡ての善きもののうちの至高のものを目ざしていることは明らかである。そしてその至高のものというのが世にいう国、あるいは国的共同体なのである。」(アリストテレス1969:3. [Pol., I, 1252a])が、具体的に、**「従って国は場所を共同にする団体でもなく、また互いに不正をしないことや、物品交換のための共同体でもないことは明らかである。むしろそれらは、いやしくも国があろうとする以上は、必然に存しなければならない。が、しかしそれがことごとく存しても、それですでに国が存するのではない。いや、完全で自足的な生活のために家族や氏族が善き生活において共同する時、初め**

て国が存するのである。けれども、このことは同一の場所に住み、互いに結婚し合うのでなければ、あり得ないだろう（血縁と地縁は国の成立の必須条件、その真の原因は、善き生活における共同）。」（同上：113-114〔Ⅲ，1280b 30〕）

「して国とは氏族や村落の完全で自足的な生活における共同である」（同上：114〔Ⅲ，1281 a〕）が、その目的は「従って国的共同体は、共に生きることのためではなく、立派な行為のためにあるとしなければならない」（同上：114〔Ⅲ，1281 a 5〕）のであった。

(2) ポリスの構成への見解

「二つ以上の村からできて完成した共同体が国である、これはもうほとんど完全な自足の限界に達しているものなのであって、なるほど、生活のために生じてくるのではあるが、しかし、善き生活のために存在するのである。」（同上：6〔Ⅰ，1252 b 29.〕）

さらに村は、「凡ての国は家々から構成されている」（同上：9〔Ⅰ，1253 b〕）とあるように、その基本単位はあくまで家（*oikia*）であり、この家も「家の中で最初で最小の部分といえば、主人と奴隷、夫と妻、父と子」（同上：9〔Ⅰ，1253 b〕）なのであった。

また、このことを次のごとくに別言している。「何故なら国はその本性上一種の多数であって、より以上に一つになれば、国は国たることを止めて家になるだろうし、家は人になるだろうから。というのは家は国に比して、より以上に一つであり、一人の人は家に比べて、より以上に一つであると言うことができるから。従って人はたとえこのことを為すことができるにしても、為すべきではない。それは国を破壊することになるからである。」（同上：40〔Ⅱ，1260 a 20〕）

ここでいう人とは、「国は或る数の国民であるから」（同上：90〔Ⅲ，1275 a〕）その国民（*politēs*）〔むしろ市民といった方がよいと思われる〕とは

いかなる者をさすのかという、「条件ぬきでの国民は『裁判と役とに与かること』というのを以てより外には、他の如何なることを以ても、うまく定義され得ない」(同上：91〔Ⅲ，1275a 20〕)ものである。

以上のように、国は村々から、村々は家々から、家々は人々から、人々は裁判と役とに与かる条件ぬきでの市民から構成されているのであった。

(3) ポリスの人口と規模について

「国に必要な備品はまず人間の数であって、これについてはどれだけのものが、また本性上どういう性質のものが存しなければならぬかが問題であり、また土地に関しても同様で、それはどれだけのものであらねばならぬか、またどのような性質のものでなければならぬかが問題である」(同上：285〔Ⅶ，1326a〕)とあるように、国の人口、それと関連して規模に注目している。

まずその人口からみると、「最初の国は、国的共同体に即した善き生活をするのに自分だけで足りる人口に初めて達した時の人口の数からなるものだということになる」(同上：287〔Ⅶ，1326b 10〕)が、その限界としては、「生活の自足を目標に、一目でよく見渡しうる数の範囲内でできるだけ膨張した人口。では、以上を国の大きさについての規定としよう」(同上：287〔Ⅶ，1326b 25〕)とあるように、ポリスの最善の人口と規模に言及しており、その論拠として、「正しいことについて判決するためには、またいろいろの支配の役を値打に応じて分かち与えるためには、国民がお互いにどのような性質のものであるかということを知り合っていないといけない」(同上：287〔Ⅶ，1326b 15〕)からなのであった。

(4) ポリスの位置と構造への考察

次にその位置については、「また、国都の位置は、もしそれを現想通り定めなければならないとすれば、海に対しても陸に対しても都合の善いところにおかれなければならない。その場合の基準の一つは上に述べられたものである

(すなわち援軍を送り出すために、国土の凡ゆる場所と通じていなければならない。)残りの基準は――農産物や、さらに大工の用材やその他、国土がさいわい持っている何かそのような産業用の材料を搬入するために、運び易いところでなければならない」(同上:288-289〔VII, 1327a 5〕)のであった。さらに、具体的に次のごとく列挙している。「しかし国都の位置は、四つのものに着目して、それが祈願通りに上り斜面であることを祈らなければならない。着目すべき第一のものは、是非必要なものとしての、健康である。しかし、着目すべきものとしてなお残っているものについて言うと、その位置は政治的行為と戦争の行為とをするのに都合が善くなくてはならない。」(同上:301〔VII, 1330a 37〕)ここでいう健康とは、「健康はその土地が健康な所に、また健康な方向に向かって格好な位置を占めていることと、第二に健康な水を使用することとにかかっているから、このことも大事なこととして、配慮するところがなくてはならない」(同上:302〔VII, 1330b 9〕)ことをさすものである。

ポリスの位置についての第四の点としては、はっきり述べられていないが、山本氏の指摘のごとく(同上:387)、美観だと思われる。

こうした以上四つの留意点をふまえ、さらにその構造に関しては、都壁(teichos)について触れており、「都壁を国都の周りにめぐらしてはいけなと要求するのは、国土が侵入し易いものであることを求め、山岳地帯を取り去るのと同じことである」(同上:303〔VII, 1331a〕)として、ポリスの周りに都壁をめぐらすことを主張している。

又、個人の住宅の配置も、「国都の全部ではなくて、部分的に場所場所にに応じて井然たるものにしなければならない」(同上:302〔VII, 1330b 30〕)のであり、要塞地も「有益なものは国制の如何によって異なっている。例えば稜砦(akropolis)は寡頭制や独裁制にふさわしいものであるが、民主制にふさわしいのは平地であり、貴族制にふさわしいのはそれらのいずれ

でもなくて、むしろいくつかの強固な地所である」(同上：302〔VII, 1330 b 20〕)としている。

(5) ポリスの存立基盤について

「国がそれなくしては存し得ないところのそれはいくつあるかということも考察しなければならない」(同上：294〔VII, 1328 b 4〕)が、まず第一に食糧が、次に技術がなくてはならない(というのは生活には多くの道具が必要であるから)、第三に武器が(というのは共同している人々は内では服しない者を支配するために、外では不正を加えようと企てる者を防ぐために、武器を自分らのうちに持たなければならないから)、さらにまた、国内での入用と戦争の費用とを調達するために、相当な額の金がなくてはならない、第五に、そして本来から言えば第一に、神事と呼ばれている神に対する配慮が、そして数の上では第六にだが、凡てのうちで最も必要なものとして、利益のあるものや、国民相互の間の正しいものについての判定がなくてはならない。」(同上：294-295〔VII, 1328 b 8〕)

以上一〜六までがそろってはじめて、ポリスの自足的生活を可能としたのであり、「従って、食糧を供給する耕作者の多数と職人たちと軍人の部分と富裕な部分と神官たちと必要なものや利益のあるものの判定者たちとがいなければならない」(同上：295〔VII, 1328 b 20〕)のであった。

〔桜井 悠美〕

3 トマス・モア

Thomas More (1478-1535)。イギリスの人文主義者、政治家、ヘンリ8世に反逆罪のかどで処刑された。本稿使用書は、平井正穂訳『ユートピア』岩波文庫、1957。

「ユートピア島には54の壮麗な都市（あるいは州都）があり、すべて同じ国語を用い、生活様式も制度も法律もみな同様である。これらの都市はみな場所や地形が許すかぎり、同じような位置を占め、すべての点で同じように作られている。都市と都市の間の距離は、最も近い所で24マイル、最も遠い所でも徒歩で一日以上かかる所はない。

毎年アモーロート市にあらゆる都市から各々三人の学識経験ともに優れた長老が国家の共通の問題を論議するために集まってくる。アモーロートがこの国の首都とされているからである（この都市は国のちょうどまん中に位しているし、したがって国内のすべての地方から代表者が集まってくるのに最適なのである）。各州の管轄区域はその州都を中心として都合よく巧みに配置されている。すなわち、各都市ともその周囲いずれの方面でも少くとも20マイルの地面をもっている。中には都市相互の距離が相当遠いといった場合のごとくそれ以上の地面をもっている方面もある。どの都市もその州の領域なり境界線なりを拡張しようという野心をもっているはない。なぜなら、州民たちが土地の所有者というより、むしろよき農民であるという自覚をもっているからである。」
(モア1957:72)

「アモーロート市は低い丘の中腹にあって、形はほぼ四角をなしている。横幅は丘の頂上のすぐ下の所からアナイダ河に到る間、約2マイルの長さにあたる。縦幅は河岸に沿うて2マイルをやや超えている。

……

市の四方は幅の厚い、高い、しかも櫓や保塁のずらりと並んだ、城壁をもってめぐらされている。水はないが、深く広い、その上葎や茨や棘のいっぱい生えている濠が市の三方面を取りかこんでいる。もう一つの方面はアナイダ河自体が濠のかわりをつとめている。街路は交通の便と風除けとこの二つの点を充分よく考慮して、便利に、かつ美しく設計されている。家屋はこれまた壮麗な建築で、街路の端から端まで、櫓の歯のごとく整然と少しの切れ間もなくならんでいる。……家の中に入ろうと思えば誰でも

自由に入ることができる。それというのも、家の内には私有のもの、つまり誰々個人のものといったものがないからである。家そのものは十年ごとに抽選によって取換えることになっている。」(同上：75-77)

「……都市は世帯からなりたっている。世帯は大体一家眷属から成立っている。というのは、女子は法定年齢に達すると大抵結婚して婚家に行くが、男子は、およそ男と名のつく限り、子々孫々に到るまで自分の生家に留まり、最年長者である家長に従うことになっているからである。……

しかし市民の人口が一定数以下にへったり、また途方もなく殖えたりしないように、田舎を除き各都市ともその6千の全世帯数の中、どの世帯も14歳前後の子供を一時に、少くとも10人以上、多くとも16人以下を常に持っていなければならないことが法律をもって定められている。…もし市の全人口が一定の数を超えた場合には、それだけの過剰の人々を他の都市の人口不足にあてる。それでもなお、ユートピア全島にわたって多くの人口過剰をきたすような場合には、各都市から一定の市民を選んで、これを、人は住んでいるが荒れ果てた土地の多い、近くの陸地に送り、自分たちの法律の下に一つの新しい町を建設させる。もちろん、もしこれらの土地の住民と一緒に生活をしたいと申込んでくれば受け入れる。」(同上：90-91)

〔長沼 宗昭〕

4 カンパネッラ

Tommaso Campanella (1568-1639)。

ドミニコ修道会の僧で、プラトンの国家論にもとづいてユートピア思想を展開した、反スコラ的思想家。本稿使用書は、坂本鉄男訳『太陽の都』現代思潮社、1967。

ジェノヴァ人

〔太陽の都の〕広い平原の中に一つの丘がそびえております。都の大部分はその丘の上に建てられているのですが、都をめぐる幾重もの城壁は、丘の麓のそと遠くまで広がっています。都は直径2マイル以上で、周囲は7マイルあります。だが、この都は丘の斜面に作られているので、平地よりもずっと多くの家が建っているのです。

都はそれぞれ違った惑星の名前がついた非常に大きな7つの環状地帯からできています。……城壁は、中に土が詰められたどっしりしたもので、とりで、塔、大砲を備え、外側には濠がめぐらされています。……

修道士

どうか、この国の統治の方法をすべて話してくれ。これが知りたかったのだよ。

ジェノヴァ人

彼らには、一人の神官君主がおり、『太陽』と呼んでいます。これはわれわれの言葉でいえば『形而上学者』のことです。これは全市民の精神的・政治的指導者で、あらゆることが彼によって決定されます。

彼には三人の補佐役の高官がいます。この三人は『ボン』、『シン』、『メル』と呼ばれそれぞれ『権力』、『知識』、『愛』を意味しています。

『権力』は、戦争、平和、軍事一般を司り、戦時には最高権力者となりますが、けれども『太陽』を凌ぐものではありません。『権力』は将校、戦士、兵士、弾薬・糧秣、築城、攻略などを監督します。

『知識』はすべての学問、文芸、工芸の博士や教師を監督し、学問と同じ数の責任者を部下に従たがえています。つまり、占星学者、宇宙学者、幾何学者、論理学者、修辞学者、文法学者、医学者、博物学者、道德学者などがいます。

『知識』はすべての学問について記したただ一冊の本を持ち、これをビュタグラスとその弟子たちのような方法で全市民に読んで聞かせます。また、城壁の

内外壁全部と、とりでの上にもあらゆる学問を絵で描かせました。……

『愛』は生殖について監督し、男女を立派な種族ができるように結合させます。彼らは、犬や馬の種族には注意するくせに、自分たちの種族の向上には全然気をつかわないわれわれを笑っています。『愛』はこのほか、教育、医術、薬学、種まき、果実の収穫、家畜の飼料、食物および衣・食・性に関するあらゆることを司り、こうした技術を専門とする大勢の男女の教師を部下に持っています。

『形而学者』はこの三人の指導者と共にあらゆることを処理します。というのは『形而上学者』なしには何事も決められないのです。そしてあらゆることはこの四人で相談され、『形而上学者』が承諾すると一同これに従います。

……

ここの種族は元来インドからやって来たのでして、モゴール人やその他の略奪者、暴君たちの暴虐破壊から逃れてきた賢者たちなのです。そこで、彼らは理想的な方法で共同生活をするにしましたわけです。彼らの祖国では婦人共有制は実行されていませんが、彼らはそれを採用しているのです。すべてのものは共有になっており、必要な物の配分は役人の手にゆだねられています。こうして、食糧のほか学問や栄養やいろいろな娯楽なども共有で、決して何物も個人の所有にはできないようになっています。」（カンパネッラ 1967: 6-14）

ジェノヴァ人

最高位の神官は『太陽』です。指導的立場にいる者について述べるならば、役人はすべて神官で、彼らの仕事は人々の良心の浄化にあります。人々は彼らに告白をし、彼らはどのような過ちが都を支配しているかを知ります。それから、今度は彼らが自分の過ちと、他人の一般的な過ちについて、その過失を犯した当人の名前は言わずに、三人の高官に告白いたします。つぎに、今度は三人の高官が『太陽』に告白します。『太陽』は、こうして、いまどんな種類の

過ちが多いかを知り、都に必要な措置を考えます。彼は神にいけにえを捧げて祈り、それが自分や人々の罪をあがなうに必要とあらば、公開の祭壇上で神に向って自分と国民全体の過ちを告白しますが、特に過失を犯した当人の名前は言いません。こうして彼は人々が再びそのような罪科を犯さぬよう注意するようになし、国民全体を許してやります。彼は自分の過ちを公開の場で告白し、神にいけにえを捧げて都全体を許し、教えを賜わらんことを、また都をお守り下さらんことをお願いします。」(同上：57-58)

〔長沼 宗昭〕

昭和49年3月22日印刷

昭和49年3月30日発行

印刷物規格表第2類

印刷番号(48)2603

刊行物番号 (S) 7

都市研究報告 第40号

発行 東京都立大学都市研究組織委員会

代表者 千葉正士

東京都目黒区八雲1丁目1番1号

印刷所 明宝印刷

東京都目黒区中目黒3-22-11